

七九八 明治廿二年乙第百七十七號

長野縣平民烟草製造營業 長岡傳兵衛

烟草稅則ヲ適用スルニ烟草稅則第二十四條ト第廿五條トハ其制裁ヲ異ニシ帳簿ノ登記ヲ詐テ脱稅ヲ圖ル者ハ無印紙不足印紙ノ烟草ヲ販賣シテ税金ヲ遁脱シタルモノヨリ其刑重シ由是觀之帳簿ノ登記ヲ詐テ脱稅ヲ圖ル者ハ無印紙等ニテ販賣スルヲ豫防スルニ出シモノト云フヲ得サルヲ以テ既ニ無印紙不足印紙ノ烟草ヲ販賣シタルノ所爲ヲ懲メ之レヲ懲罰シタル場合ニ於テ仍ホ其無印紙等ノ烟草ニ對スル帳簿ノ登記ヲ詐リ脱稅ヲ圖リタルノ所爲アリト認メタル時ハ其罪ヲモ併科セサル可ラス因テ原裁判ニ於テ第一第二ノ所爲ニ對シ各自其刑ヲ科シタルハ相當ノ裁判ナルヲ以テ上告第一點リ前半ノ趣旨ハ其當ヲ得サルモノトス然レモ原裁判第二ニ賣渡帳製造帳ニ右十二錢四厘十三錢四厘ノ端圓ヲ故ラニ記載セズ云々トアルニ據レハ賣渡帳製造二個ノ帳簿ニ十二錢十三錢トシ製造烟草ヲ記載シ只其端圓即チ四厘ノ記載ヲ爲サ、ソシモノト視サルヲ得ス然レハ製造帳二十二錢四厘ノ分モ十二錢ト記載シ置キタルモノナルヲ知ルヘキナリ然ルニ原判決第三ニ製造帳二十二錢四厘定額ノ分ヲ忘テ記載セストアルハ判文第二ノ理由ト相離離シ第三第三ノ事實何レカ違ナルヲ知ル能ハス若シ第三ニ掲クル十二錢四厘ノ烟草ハ第二ニ掲クルモノト同一ナルモノニアラサルノ事實ナランニハ其責及ヒ犯罪ノ年月日等犯罪必要ノ事實ハ明示セサル可ラサルニ其理由ノ明示モアラサレハ原裁判第三第三ハ事實理由ノ離離又ハ事實理由ノ不備ヲ免カレサルモノニテ疑難ノ當否ヲ懸念スルニ由ナシ因テ此點ニ對シ上告ノ首趣ハ其原由アルモノトス且ツ此點ヲ以テ原裁判ノ第三第三ハ之レヲ破毀スヘキモノナルニ付上告末段ノ首趣ニ對シ辯明ヲ要セス

明治廿二年四月廿九日

七九九 明治廿二年乙第百八號

清水縣平民農業 有田 尉 八

右府入カ烟草稅則違犯被告事件ニ付明治廿二年四月九日熊本縣裁判所ニ於テ被告ハ第一田邊三太郎ヨリ烟草小

五七〇
二二二〇

二二二二
八條

賣并任入鐵札及雇人山尾三次郎出賣鐵札ヲ代金貳圓五拾錢ニ買取リ第二無鐵札ニテ刻烟草合計四拾賣賣五百二十
勿テ代金貳拾三圓七拾六錢八厘ニ小賣シタルモノト判定シ烟草稅則第二十條第二十八條第二十三條第六條第七條
第三十條等ヲ適用シ第一ニ付前金四圓ニ處シ第二ニ付前金七圓五拾錢ニ處シ現在ノ烟草七百八十目ヲ沒收シ賣抽
代金貳拾三圓七拾六錢八厘ヲ追徴スト旨渡シタル裁判ニ對シ原裁判所檢察官三宅榮寬ハ上告ヲ爲シタリ其要旨原
判官カ認メタル事實ニ據レハ第一ノ所爲ハ鐵札ヲ買受ケタル迄ナレハ烟草稅則第二十條第二十八條ヲ適用斷斷セ
シハ間然スル所ナシ而シテ第二無鐵札ニテ烟草小賣營業セシトテ處罰シタル點ハ頗ル不法ノ裁判ナリトス何トナレ
ハ其烟草ヲ小賣セシハ小賣鐵札仕入鐵札并ニ雇人ノ出賣鐵札ヲ買受ケタル結果ニ外ナラサレハ此烟草小賣セシ點
ニ就テハ烟草稅則第廿條ニ包含スルモノニテ別ニ無鐵札ニテ烟草小賣營業セシモノトシテ處罰スヘキモノニアラ
少レハナリ畢竟無鐵札ニテ烟草小賣セントスルニハ脱稅ノ所爲ナカルヘカラス然ルニ被告ハ田邊三太郎ノ名前ニ
テ已ニ小賣ニ對スル税金ヲ上納シ居レハ脱稅ノ意思ナキモノニテ即チ鐵札ヲ所持シ税金ヲ遁脱ヲモ爲サ、ル者ニ
對シ遁脱稅半額分三倍ノ罰金ニ處シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ破毀ヲ求ムト云フニアリ

被告屬入ハ前項上告趣旨ニ對シ答辯書提出サス
大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ式ヲ履行シト告事件ヲ審裁スルニ烟草稅則第二十條ニ鐵札ハ賣買借及販
渡鐵札ヲ爲スヲ得ストアルハ鐵札ヲ賣買借即チ免許ヲ得サル者ニ於テ他人名義ノ鐵札ヲ代用シ以テ營業ヲ
爲シタル場合ヲ規定セシモノナリ何トナレハ鐵札ヲ買受ケテ辨クハ借受ケ營業スル者ハ無鐵札營業トナシ論斷スヘ
キノ明條ナキハ勿論他人名義ノ鐵札ヲ代用營業スルハ其買受ケ借受ケルモノ、固ヨリ希圖シタル結果ニシテ之
ヲ二所爲ト爲ヌヲ得ザレハナリ故ニ原判官ニ於テ被告ハ第一田邊三太郎ヨリ烟草小賣營業鐵札及仕入出賣鐵札ヲ
買受ケタル事實アリト判定シ烟草稅則第二十條第二十八條ヲ適用斷斷シタル上ハ無鐵札ニテ烟草小賣セシ者ト爲
シ該稅則第二十三條第六條第七條ヲ適用斷斷スヘキモノニアラス然ルニ申越ニ出テ無鐵札烟草小賣營業ヲ爲シ
タルモノトシテ前注條ニ依リ罰金七圓五拾錢ノ刑ヲ旨渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ニ係ル不法
ノ裁判ナリトス俄テ治罪法第四百三十一條ニ則リ原裁判旨渡ノ一部ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判旨渡ヲ爲ス左ノ
如シ

五ノ部

右被告ニ對スル事實ニ依リ烟草稅則第二十三條第六條第七條ヲ適用シ罰金七圓五拾錢ニ處スト言渡シタル部分ハ之ヲ取消スモノナリ

明治廿二年五月十六日

八〇〇 明治廿二年乙第二百三十八號

山梨縣平民農 若月勝助

本案被告ハ曾テ吉屋助右衛門ヨリ地所ヲ借受ケ麥并烟草ヲ耕作シ其因テ得タル所ノ葉烟草ノ一作ヲ小作料トシテ右助右衛門ヘ納付シタル事實ニシテ則チ穀キニ設定セル賃借契約ニ基キ助右衛門ハ其賃貸シタル土地ノ一部ニ烟草ヲ耕作セシメ被告ハ他ノ一部ニ麥ヲ收益スル爲メ其賃借料トシテ前烟草ヲ助右衛門ヘ納付セシハ助右衛門カ自作シタルト同一ニシテ此所爲タルハ讓與賃借トハ異ナルヲ以テ烟草稅則第十二條烟草耕作人烟草仲買人ハ其所持スル云々賣渡賃借讓渡スコトヲ得ストアル法條ニ違犯セザルノミナラス該稅則中他ニ所罰スヘキノ正條ナキヲ以テ原裁判所ニ於テ右ノ事實理由ヲ付シ其所爲烟草稅則ニ觸ルハ廉ナシトシテ治罪法第三百五十八條ニ依リ無罪ヲ言渡シタルハ適當ノ裁判ナリトス

明治廿二年五月廿七日

八〇一 明治廿二年乙第二百三十二號

熊本縣平民烟草製造人 吉岡庄次郎

烟草稅則施行細則第十七條ニハ烟草製造人製造スル烟草ハ其自用ニ供スル者ト雖モ總テ烟草稅則ニ從フヘシトアリ又烟草稅則第十八條ニ烟草營業者ハ無印紙不足印紙ノ製造烟草云々所持シ又ハ賣買賃借及讓渡讓受ヲ爲スコトヲ得ストアリテ烟草製造營業人ハ假令其自用ニ供スルモノト雖モ本稅則ニ從ヒ營業品ト同一ノ手續ヲ盡サハルヘ

カラス然ルニ其手續ヲ盡サス自用ノ爲メ所持スル者乃チ無印紙烟草ノ所持ナルヲ以テ其制裁ヲ免カル、ヲ得ズ本按ニ付原裁判官ハ前掲ノ事實アルヲ認メナカラ烟草稅則中適當ノ正條ナシトシ其罪ヲ論セスト言渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百二十九條ニ照依シ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

明治廿二年五月廿七日

八〇二 明治廿二年乙第二百七十六號

熊本縣平民烟草製造人 石川金次實切人 瀧田掄吉

右瀧田掄吉カ烟草稅則違犯被告事件ニ付明治二十二年五月廿九日宇都宮輕罪裁判所ニ於テ被告掄吉ハ明治二十一年中擅ニ烟草ヲ自作シ其年十一月中同村平民瀧田米吉ノ依頼ニ依リ同家留守番中右米吉ノ刻器械ヲ所有スルヲ寄貸トシ私カニ之ヲ使用シ前烟草ヲ賣捌カントノ目的ニシテ其月二十日ヨリ二十五日迄ノ間二百匁入刻烟草四拾五個ニ製造シタルモノナリ右證據ハ栃木縣收稅廳荒木重太郎告發書檢察官ノ被告并ニ石川金次ノ訊問調書該烟草四拾五個ノ現在等ニ依リ充分ナリ仍テ之ヲ法律ニ照スニ烟草稅則第十六條一項ニ背キタルヲ以テ同則第二十八條ニ依リ被告掄吉ヲ罰金拾圓ニ處シ仍ホ現在スル刻烟草百匁入四拾五個ハ之ヲ沒收スルモノナリト被告人欠席ノ儘賣渡シタル裁判ニ對シ原裁判所檢察官瀧谷列ハ上告セリ其趣旨ハ原裁判ハ事實ノ理由ト法律ノ理由ト相當セザル裁判ナリトス如何トナレハ烟草稅則第十六條第一項ニハ烟草耕作人ニアラサル者ハ自用ノ爲メタリトモ烟草ヲ製造スルコトヲ得ストノ明文ニシテ烟草自作者ヲ支配スヘキ法律ニアラサルヤ明カナリトス然ルニ被告掄吉ハ明治二

明治廿二年五月廿七日

八〇三 明治廿二年乙第二百七十五號

熊本縣平民烟草製造人 石川金次實切人 瀧田掄吉

カラス然ルニ其手續ヲ盡サス自用ノ爲メ所持スル者乃チ無印紙烟草ノ所持ナルヲ以テ其制裁ヲ免カル、ヲ得ズ本按ニ付原裁判官ハ前掲ノ事實アルヲ認メナカラ烟草稅則中適當ノ正條ナシトシ其罪ヲ論セスト言渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百二十九條ニ照依シ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

明治廿二年五月廿七日

八〇四 明治廿二年乙第二百七十五號

熊本縣平民烟草製造人 石川金次實切人 瀧田掄吉

右瀧田掄吉カ烟草稅則違犯被告事件ニ付明治二十二年五月廿九日宇都宮輕罪裁判所ニ於テ被告掄吉ハ明治二十一年中擅ニ烟草ヲ自作シ其年十一月中同村平民瀧田米吉ノ依頼ニ依リ同家留守番中右米吉ノ刻器械ヲ所有スルヲ寄貸トシ私カニ之ヲ使用シ前烟草ヲ賣捌カントノ目的ニシテ其月二十日ヨリ二十五日迄ノ間二百匁入刻烟草四拾五個ニ製造シタルモノナリ右證據ハ栃木縣收稅廳荒木重太郎告發書檢察官ノ被告并ニ石川金次ノ訊問調書該烟草四拾五個ノ現在等ニ依リ充分ナリ仍テ之ヲ法律ニ照スニ烟草稅則第十六條一項ニ背キタルヲ以テ同則第二十八條ニ依リ被告掄吉ヲ罰金拾圓ニ處シ仍ホ現在スル刻烟草百匁入四拾五個ハ之ヲ沒收スルモノナリト被告人欠席ノ儘賣渡シタル裁判ニ對シ原裁判所檢察官瀧谷列ハ上告セリ其趣旨ハ原裁判ハ事實ノ理由ト法律ノ理由ト相當セザル裁判ナリトス如何トナレハ烟草稅則第十六條第一項ニハ烟草耕作人ニアラサル者ハ自用ノ爲メタリトモ烟草ヲ製造スルコトヲ得ストノ明文ニシテ烟草自作者ヲ支配スヘキ法律ニアラサルヤ明カナリトス然ルニ被告掄吉ハ明治二

明治廿二年五月廿七日

八〇五 明治廿二年乙第二百七十五號

熊本縣平民烟草製造人 石川金次實切人 瀧田掄吉

カラス然ルニ其手續ヲ盡サス自用ノ爲メ所持スル者乃チ無印紙烟草ノ所持ナルヲ以テ其制裁ヲ免カル、ヲ得ズ本按ニ付原裁判官ハ前掲ノ事實アルヲ認メナカラ烟草稅則中適當ノ正條ナシトシ其罪ヲ論セスト言渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百二十九條ニ照依シ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

明治廿二年五月廿七日

八〇六 明治廿二年乙第二百七十五號

熊本縣平民烟草製造人 石川金次實切人 瀧田掄吉

カラス然ルニ其手續ヲ盡サス自用ノ爲メ所持スル者乃チ無印紙烟草ノ所持ナルヲ以テ其制裁ヲ免カル、ヲ得ズ本按ニ付原裁判官ハ前掲ノ事實アルヲ認メナカラ烟草稅則中適當ノ正條ナシトシ其罪ヲ論セスト言渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百二十九條ニ照依シ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

明治廿二年五月廿七日

十一年中ニ在リテハ現ニ烟草ヲ自作シ居リテ裁則ニ所謂烟草耕作人ト稱ス可キ者ナリ原裁判官ハ煙ニ烟草ヲ自作シト云ヒ耕作人タルニハ特定ノ規則ニ依據セザレハ耕作人ト稱スル能ハサルモノ、如ク見認メラル、ト雖正烟草ヲ耕作スルト否トハ自由ニシテ別段法律規則ニ制限セラル、トナケレハ烟草耕作人ノ資格ヲ有セシモノナルヲ論ヲ俟タサルナリ然ルニ原裁判官ハ耕作人ノ資格ヲ有スルニモ拘ハラズ被告拾吉ノ所爲ニ對シ耕作人ニアラサル者云々トアル法文ヲ適用シタルハ嚴密錯誤ノ甚クシキ者ト謂フヘシ又自作ノ業烟草ヲ以テ刻烟草四十五個ト爲シタルハ自用ノ爲ナリト云ハシテ原裁判官モ已ニ見認メラル、如ク賣捌カントノ目的ニテ製造セシトハ被告本人ノ自供スル處ニシテ自用ノ爲メ云々トアル法文ニ適當セサルヤ明瞭ナレハ是亦法律ノ適用其當ヲ得タリト云フヲ得サルナリ要スルニ原裁判官渡ハ復頭復尾其當ヲ得サル不法ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十項ニ相當スル破毀ノ原由アルモノト云フニアリ

對手人被告瀧田拾吉ハ答辯書ヲ提出ス

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ茲ニ之ヲ審按スルニ原裁判所カ認メタル本按ノ事實タルヤ被告ハ烟草ヲ自作シ之ヲ賣捌カントノ目的ニテ百匁入刻烟草四拾五個ヲ製造シタルモノトアリ然ハ則原裁判所ニ於テ被告ハ其自作ノ業烟草ヲ以テ刻烟草ヲ製造シタルモノト認メタルニモ拘ハラズ稅則上特ニ烟草耕作人ノ資格ヲ定メタル所アルモノ、如ク煙ニ烟草ヲ自作シト云ヒ之ヲ烟草稅則第十六條第一項ニ背キタルモノトシ同第廿八條ニ依リ處斷シタルハ嚴密錯誤ノ裁判ナリトス何トナレハ稅則第十六條第一項ハ烟草耕作人ニアラサル者ハ自用ノ爲メタリトモ烟草ヲ製造スルコトヲ得ストアリテ唯モ烟草自作者即チ耕作人ニ關係セサル法條ナルハ言ヲ俟タズ被告カ烟草耕作人ナルニ於テハ該第十六條第二項ニ依リ自用ノ爲メニ烟草ヲ製造スルコトヲ得ルモノナレハ假令賣捌カントノ目的ヲ以テ製造シタリトスルモ元來本件ノ如キ稅則違反ノ場合ニ在テハ未遂ノ所爲ヲ罰スルモノニアラザレハ其未遂販賣ヲ爲サ、ル限リハ該第十六條第二項ニ背クノ罪ヲ組成セサルニ依リ同第二十三條ノ制裁ヲ受ケサルモノナレハナリ

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ノ裁律ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

瀧田拾吉

原裁判所カ認メタル事實ニ依リハ被告カ所爲ハ法律上罪トシ罰ス可キモノニ非サルヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ依リ無罪ヲ宣讀スモノナリ

明治廿二年九月廿一日

八〇三明治廿二年乙第三三三十二號

長野縣平民烟草營業人

伊藤多之吉

外一名

三五七ノ
三三五
三三三條

上告ニ依リ之ヲ審按スルニ原裁判所カ判定シタル本按ノ事實タルヤ被告小林豐三郎ハ明治廿二年十二月七日豫テ所持スル業烟草十二匁目ノ製造方ヲ伊藤多之吉ハ依頼シ多之吉ハ其依頼ヲ承諾シ印紙其他雜費三圓九十錢申受クテ約ヲ爲シ當金受取リ其烟草ヲ豐三郎ニ渡シ豐三郎ハ右ノ烟草ヲ賣捌キ代金七圓八十錢ヲ得タルモノナリ由是觀之ハ被告多之吉ハ假令烟草製造營業人ナルニモセヨ烟草稅則第十五條ハ何人ニテモ製造人ニ雇使セラル、ノ外人ノ依頼ヲ受ケテ烟草ヲ製造スルコトヲ得ストアリテ其製造營業人ト否トヲ問ハス命スル所ノ法條ナレハ該第十五條ノ違反タルハ免レサルモノトス然ハ則被告ハ之ニ對シ帳簿ノ記載ヲ爲サ、ルヘカラサル義務アルモノニアラザレハ從テ罰則第廿五條ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラザルモノトス被告豐三郎ハ多之吉ニ依リテ製造シタル烟草ヲ營業免許ヲ受ケテシテ賣捌キタルハ烟草稅則第二條ニ背クト勿論而シテ其烟草ハ假令製造營業人ノ手ニ成リレモノトスルモ被告ニ於テ之ヲ依頼シ製造セシメタル以上ハ即チ製造權ヲ犯シタル者ナリトス右ノ理由ナルニ依リ原裁判所ニ於テ被告小林豐三郎ヲ烟草稅則第二條同第廿三條同第卅三條ニ照シ處斷シ又被告伊藤多之吉ヲ同則第十五條同第廿三條ニ照シ處斷シタルハ相當ニシテ被告カ上告論旨ハ相立スト雖モ被告多之吉ニ對シ尚同則第廿五條ヲ適用處斷シタルハ不當ナルヲ以テ其部分ハ取消スモノナリ

明治廿二年九月十九日

トノ部

八〇四 明治廿二年乙第百八拾號

長野縣平民烟草耕作人

櫻井 子ノ

外一名

烟草稅則中ノ烟草耕作人トハ烟草耕作家ノ戸主一人ノミヲ云フノ精神ニアラス共居同産ニ係ル家屬ノ者ヲモ包含シタルモノナルヲ以テ耕作人ノ家屬ニ於テ該家耕作ノ業烟草ヲ烟草製造人仲買人ニアラサル者ニ賣渡貨渡讓渡シタル時ハ則ち烟草耕作人ニ於テ烟草稅則第十二條ヲ犯シタルモノトシ論スヘキモノナリトス而シテ烟草耕作人ノ家屬ノ所爲ハ其戸主ヲ罰スヘシトノ特別アルニ非ス又原裁判所カ認メタル事實ハ被告等各家ノ爲メニ賣渡シタリト云フニアラサレハ各犯者則ち被告櫻井「子ノ」櫻井「リノ」ヲ處罰スヘキモノナルニ原裁判所ニ出テ被告櫻井「子ノ」櫻井「リノ」ハ非耕作人ナリトシ無罪ノ旨渡ヲ爲シタルハ擬律ノ錯誤ニシテ上告ノ旨趣ハ其原由アルモノトス右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ櫻井「子ノ」櫻井「リノ」ニ對スル裁判ヲ破毀シ直チニ裁判官渡ヲ爲ス左ノ如シ

櫻井 子ノ
櫻井 子ノ

原裁判所カ認定シタル事實ニ據リ被告ノ所爲ハ烟草稅則第十二條ノ違犯ナルヲ以テ同則第二十七條ニ依リ三圓以上三十圓以下ノ罰金範圍内ニ於テ被告兩名ヲ各罰金三圓ニ處シ仍ホ同則第三十條ニ照シ櫻井「子ノ」ハ賣代金九錢壹圓櫻井「リノ」ハ賣代金四錢ヲ追徵ス

明治廿二年十月七日

八〇五 明治廿二年乙第百十三號

大阪府平民烟草製造仲買小賣業

高井 説 三

明治廿一年大藏省令第三號烟草稅則施行細則第十條ニ稅則第八條第九條ノ場合ニ於テ製造者ハ各種烟草一東洋ニ

各之ヲ紙袋入り又ハ紙包入りトシ其包裹ノ縫キ目合セ目等ハ糊類ヲ以テ完全ニ之ヲ固着シテ貼用印紙ヲ破毀セサレハ烟草ヲ取出スヲ得サル様ニ密封スヘシトアリテ其印紙ヲ貼用スル箇所ハ封シ目ニシテ即チ箱ナレハ蓋ノ開閉スヘキ口目又紙包ナレハ烟草ヲ取出スヘキ口目ヲ指示シタルモノニシテ紙包ノ縫キ目合セ目ハ恰モ箱ノ釘付ケノ箇所ト一般唯ニ糊類ヲ以テ固着スルニ止マリテ是レニ一々印紙ヲ貼用スヘシトノ注意ニハアラサルナリ今原判文ヲ徵スルニ前掲ノ如クニシテ其紙包ノ兩方ノ合セ目ノ一方ノミ印紙ヲ貼用シ印紙ヲ破毀セサレハ烟草ヲ取出スヲ得サル様密封セサルモノ云々トアリ原裁判所ハ合セ目ト封シ目ヲ混同シタルニ依リ其印紙ヲ貼用セサリシ一方ハ果シテ封シ目ナルカ合セ目ナルカヲ區別シ難ク擬律ノ當否ヲ鑑査スルニ由ナシ是レ治罪法第三百四條ニ違背シタル不注ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノトス因テ同法第四百二十八條ニ則リ原裁判官渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ受ケシタル爲メ名古屋控訴院ニ移スモノナリ

明治二十二年十一月七日

○テノ部

○傳染病豫防規則

●參照

○判決例

八〇六 明治二十一年乙第百三九號

神奈川縣士族醫學

原 深 造

抑モ傳染病豫防規則ハ其第二條ニ(醫師ノ傳染病ヲ診斷スルモノハ遅クモ二十四時間内ニ之ヲ患者所在ノ町村戸長ニ通知スルヲ要ス)ト規定シアルヲ以テ醫師ニシテ傳染病ヲ診斷セル時ハ同條ノ規定ニ從ヒ之ヲ通知セサルハ

テノ部

三百七十九

〇八

カラサルハ勿論ナリト雖モ其通知書ノ送達タルヤ醫師自ラ之ヲ爲スヘシトノ明示ナキヲ以テ之ヲ爲スハ使者ヲ以テスルモ亦代理者ヲ以テスルモ通知者タル醫師ノ擇フ處ニ任ヌヘキ亦當然ノ理ナリトス然レハ通知書ノ送達ヲ他人ニ委託シタル場合ニ在テハ其受託者ノ醫業者タルト否ラサルトニ論ナク其送達ニ關スルノ責ハ受託者之レニ任セサルヘカラス何トナレハ受託者ハ醫師ニ代リテ之レガ通知書ノ送達ヲ爲スヘキトテ請下シタルモノナレハ其通知ニ關スルノ責受託者ノ負擔クニハナリ以上說明ノ如ク前條第二條ヲ解釋スヘキモノナルヲ以テ原判官於テ本案被告事件ニ付其判文ハ「前清治郎妻ヨネ」ガ腸胃衰弱ニ罹リシヲ診斷シ直チニ報告書ヲ作り之ヲ該村戸長役場ニ呈出スルニ當リ云々清治郎ニ委託シ當時即チ明治二十一年八月廿一日午後第五時頃若シ延引スル「アルモ明廿二日午前第九時迄ニハ必ラス呈出ヌヘキ旨ヲ囑囑シ置キタリシニ云々明治二十一年八月廿三日午前第九時ニ至リ始メテ清治郎方ヨリ該報告書ヲ戸長役場ニ呈出スルニ至リタル」云々ト明示シ其受託者ノ過怠ニ依テ定規ノ時間内ニ報告書ヲ呈出シ能ハサリシモノナルノ事實ヲ認メ之ニ對シ傳染病豫防規則ノ罰則ヲ受クヘキモノニアラストシ無罪ヲ宣讀シタルモノナレハ乃チ相當ノ裁判ニシテ毫モ瑕遺アルニアラス因テ上告ノ報告ハ相立タサルモノトス

明治二十一年十月廿九日

〔八〇七〕明治二十一年之第六一九號

廣島縣平民醫業 宮川 順吉

〇五九ノ二條四八ノ六六八

抑モ傳染病豫防規則第二條ハ醫師ノ傳染病ヲ診斷スルモノハ過クモ二十四時間内ニ云々トアリテ若モ醫師ニシテ該規則第一條ニ掲ケタル六病ノ一ナル病者ヲ診斷シタル場合ニ在テハ二十四時間内ニ必ズ之ガ通知ヲナサハルヘカラス然レハ先キニ診斷シタル醫師アル場合ニ於テ其醫師ヨリ通知ヲ爲シタル「アルモ」明廿二知リタルトキハ格別ナリト雖モ其通知ヲ爲シタルヤ否判斷セサルモノニ在テハ後ニ診斷シタル者其通知ヲ爲サハルヘカラス即チ本案原裁判官其判文ハ明示シタル被告ガ所爲ハ其通知ヲ怠リタルニアレハ該第二條ノ違犯ニシテ同則第二十二條ノ罰則ヲ受クヘキハ當然ナリトス何トナレハ第一次ノ診斷醫タル權崎文二郎ガ茂太郎ノ病症ヲ赤痢ナリト診斷シ之ヲ通

知シタリトハ原判文中尠モ視ルヘキノ點ナク其判文ニ「前ノ茂太郎ノ該病氣ニ付醫師權崎文二郎ガ與ヘ置キタル藥劑モ亦赤痢病ニ適應スルモノナルヲ一見シ由テ已ニ權崎文二郎ヨリ成規ノ屆濟ニ爲リアルモノト思考セルトテ云々」ト被告入カ當時ノ思想ヲ掲出シタルニ過キサレハナリ以上ノ理由ナルヲ以テ原裁判官ガ被告所爲ノ前掲判文ノ事實ナルヲ認テ以テ傳染病豫防規則第二條ニ違犯シタルモノトシ同則第二十二條ヲ適用シ罰金十圓ニ處シタルハ至當ノ裁判ナリトス

明治二十一年十二月十七日

〔八〇八〕明治二十三年二部第一〇七號

三重縣平民醫業 山本 品太郎

〇五九ノ二條四八ノ六六八

傳染病豫防規則第二條ニ於テ傳染病ヲ診察シタル醫師ニ命スルニ過クモ二十四時間内ニ其首患者所在ノ町村戸長ニ通知スルヲ以テシタル所以ハ其病ノ他ニ傳染スルヲ豫防スルノ便ヲ得ルニ外ナラザレハ既ニ前醫師ヨリ之ガ届出ヲナシ爲メニ豫防スル方法ノ得タル以上ハ後ニ診斷シタル醫師ヨリ重複届出ヲナサハルモ該條ニ違フタルモノトハ云フヲ得サルモノトス今ヤ原判文ニ就キ其認メタル事實ニ依レハ被告於テ西川久兵衛妻ノ病狀ヲ診察シ腸胃扶弱病ト認メナカラ届出テサル所爲ノ罪トナラヌト認メタルハ蓋ク證人關本實太郎ニ於テ前ニ腸胃扶弱病ナリト診察シ届出タル後ニ係ルモノト判定シタルニ出テタルヨリ無罪ヲ宣讀シタルモノナルハ相當ノ裁判ニシテ擬律ノ錯誤ト云フヲ得ス

明治二十三年十一月二十七日

電信條例

參照

關係法令

テノ部

八〇九 勅令第七十八號 明治二十一年十一月十六日
朕鐵道所屬電信電話線公衆ノ通信取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
勅令第七十八號 (官報十一月十七日)

鐵道所屬電信電話線公衆ノ通信取扱規則

- 第一條 遞信大臣ニ於テ鐵道所屬ノ電信電話線ヲ以テ公衆ノ通信ヲ爲サシムルコトヲ必要ト認ムルトキハ當該官廳又ハ其所有者ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得
- 第二條 前條ノ取扱ヲ爲ストキハ總テ電信條例及電信取扱規則ニ依ルヘシ但鐵道事務ニ係ル電報ハ官報其他ノ電報ニ先ヅテ之ヲ傳送スヘシ
- 第三條 第一條ニ據リ公衆ノ通信ヲ爲サシメタルトキハ遞信省ハ當該官廳又ハ其所有者ニ對シ手数料ヲ交付ス其金額ノ割合ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

三六〇
三七五
八一〇

八一〇 遞信省令第二號 明治二十三年三月十四日
電信取扱規則中左ノ通り改正シ本年三月二十八日ヨリ施行ス

- 一 電信取扱規則第十八條へ左ノ但書ヲ追加ス
但歐文電報ニ略號ヲ常用スルトキハ略號常用料ヲ納ムヘシ其金額及納付手續ハ別ニ之ヲ定ム
- 一 同第四十六條 削除
- 一 同第五十三條 左ノ通り改正ス

四三七五

電報料手数料ヲ還付スルトキハ都テ郵便切手ヲ以テスヘシ

- 一 同第五十五條 削除
- 一 同第五十六條 左ノ通り改正ス
追徵電報料及手数料ハ之ニ相當スル郵便切手ヲ貼附シタル追徵證書ヲ發スルニ依リ發信人又ハ受信人ニ於テ其金額ヲ追納スヘシ
- 一 同第八十九條 左ノ通り改正ス
追尾電報ヲ著信局ヨリ一里ヲ超エタル地ニ遞送スルトキハ前拂郵便ヲ用ヒ其郵便稅額ハ追徵證書ニ合記シ之ヲ追徵スヘシ
- 一 同第一百十二條 左ノ通り改正ス
前納返信料ハ著信局ニ於テ郵便切手ヲ以テ電報ト共ニ受信人ニ交付スヘシ

○判決例

八一〇 明治二十一年乙第五〇〇號

岡山縣平民漁業 森野源 七
外四名

六〇ノ
六一條

抑モ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサルモノハ刑法ノ總則ニ從フヘキハ論ヲ俟タスト雖モ電信條例罰則ノ如キハ各條中本刑ノ外附加刑則チ罰金或ハ沒收ノ特別ヲ掲ケアレハ別ニ沒收ノ明文ナキモノハ假令罰則ノ用ニ供シタル物件ナルニモセシ沒收スヘキモノニアラサルヤ亦勿論ナリトス故ニ本案原裁判官ニ於テ還付ノ旨渡ラ爲シタルハ適當ニシテ被告等カ使用シタル漁具ヲ犯罪ノ用ニ供シタル物件ト爲シ沒收スヘキモノナリトノ上被告等ハ不當ナ

テノ部

ソト又因テ罪体ナルヤ否ヤノ論旨ニ對シテハ別ニ説明ヲ與ヘス
明治二十一年九月廿七日

(一四六)蹄鐵工免許規則 明治二十三年四月三日
法律第三十一號
朕蹄鐵工免許規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
法律第三十一號 (官報 四月五日)

蹄鐵工免許規則

- 第一條 蹄鐵工ハ農商務大臣ヨリ蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ニ限ル
- 蹄鐵工トハ他人ノ依頼ニ應ジ蹄鐵ヲ裝シ又ハ蹄ヲ剪ルヲ以テ其ノ業ト爲ス者ヲ謂フ
- 第二條 蹄鐵工免狀ヲ受ケルコトヲ得ル者左ノ如シ
 - 一 蹄鐵工免許試験ニ合格シ其及第證書ヲ有スル者
 - 一 官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校又ハ陸軍部内ニ於テ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
 - 一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
 - 一 外國ニ於テ官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
- 一 獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
- 第三條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ蹄鐵工免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試験及第證書

一四六
一五五
一六三
一八三
二一三
二一四
二一六

一四六
一四七

五六七八九
一四六
一四七

- 又ハ卒業證書若クハ獸醫學開業免狀ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ
- 第四條 蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ蹄鐵工籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ
- 第五條 蹄鐵工廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ
- 第六條 蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ハ其ノ免狀下付ノトキ手数料トシテ金壹圓ヲ納ムヘシ
- 第七條 蹄鐵工免狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ
- 第八條 蹄鐵工ハ正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ムコトヲ得ス
- 第九條 免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第十條 第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第十一條 蹄鐵工免許試験規則ハ農商務大臣之ヲ定ム
- 附則
- 第十二條 鐵蹄工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

一四六
一四七
一四八
一四九
一五〇
一五一
一五二
一五三
一五四
一五五
一五六
一五七
一五八
一五九
一六〇
一六一
一六二
一六三
一六四
一六五
一六六
一六七
一六八
一六九
一七〇
一七一
一七二
一七三
一七四
一七五
一七六
一七七
一七八
一七九
一八〇
一八一
一八二
一八三
一八四
一八五
一八六
一八七
一八八
一八九
一九〇
一九一
一九二
一九三
一九四
一九五
一九六
一九七
一九八
一九九
二〇〇
二〇一
二〇二
二〇三
二〇四
二〇五
二〇六
二〇七
二〇八
二〇九
二一〇
二一一
二一二
二一三
二一四
二一五
二一六
二一七
二一八
二一九
二二〇
二二一
二二二
二二三
二二四
二二五
二二六
二二七
二二八
二二九
二三〇
二三一
二三二
二三三
二三四
二三五
二三六
二三七
二三八
二三九
二四〇
二四一
二四二
二四三
二四四
二四五
二四六
二四七
二四八
二四九
二五〇
二五一
二五二
二五三
二五四
二五五
二五六
二五七
二五八
二五九
二六〇
二六一
二六二
二六三
二六四
二六五
二六六
二六七
二六八
二六九
二七〇
二七一
二七二
二七三
二七四
二七五
二七六
二七七
二七八
二七九
二八〇
二八一
二八二
二八三
二八四
二八五
二八六
二八七
二八八
二八九
二九〇
二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

テノ部

●二四六ノ五
六七八一二條
八三二六三

第十三條 第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス
第十四條 此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル歌醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼セント欲スル者ハ第三
條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ免狀ヲ受クル者ハ第六條ノ手
數料ヲ要セヌ

●二四六ノ一條
以下

第十五條 此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

●參照

○關係法令

八一三 農商務省訓令第三千八百號 明治二十三年七月十九日

北海道廳 府縣

明治二十三年四月法律第三十一號蹄鐵工免許規則第十二條ニ據リ蹄鐵工假免狀ノ下
付ヲ出願スル者アルトキハ左ノ手續ニ依リ取扱フヘシ

蹄鐵工假免許手續

第一條 蹄鐵工假免狀ノ下付ヲ出願スル者アルトキハ蹄鐵工乏シキ地ニ限り左ノ事
項ヲ取調本人ノ願書及履歷書ヲ添ヘ具狀スヘシ

- 一 區域廣袤、地勢及馬匹頭數
- 一 營業年限

第二條 假免狀下付ノ出願ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

○同指令

八一三 歌醫ノ剪蹄ニ關スル件(長崎縣) 明治二十三年九月十九日

牛馬ノ蹄剪削等ハ從來歌醫ノ業ニ之レアリ候處本年四月法律第三十一號蹄鐵工免許規則實施後ハ正格ノ開業
歌醫タリトモ蹄鐵工免狀ヲ有セサル者ハ人民ノ依頼ニ應ジ剪蹄ノ儀相成サル哉

農商務省指令 明治二十三年九月二十四日

伺之通

○サノ部

(一四七)裁判所ノ召喚ニ遲不參者處分法 明治二十三年六月十六日
法律第四十二號

朕明治十年第五號布告廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第四十二號 (官報 六月十七日)

明治十年第五號布告ハ明治二十四年一月一日ヨリ之ヲ廢止ス

〔參照〕 第五號布告(明治十年一月十七日)

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受ケタル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スル時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其
裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ届出ル歟又ハ無届ニテ遲參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾
圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

○登種検査規則

サノ部

●六二參看

①一四八ノ二
二三條

第六條 汽船汽艇ハ火藥庫ヲ距ル百三十間以内ニ接近スヘカラス 舳舟漁舟其他何人ト雖モ同距離内ニ於テ火ヲ焚クヘカラス

①一四八ノ二
八九一〇二一
條

第七條 軍艦ノ外火藥庫發物ヲ積載セル船舶ハ司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ丸瀬以內 丸瀬ノ中心ヲ貫通シテ東西ニ延長ニ入ルコトヲ得ス
内ニ丸瀬ノ想像線以內ヲ云フ以下同シ

①一四八ノ七條

第八條 丸瀬以內ノ海面ニ在テハ司令長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ何人ト雖モ漁業ヲ爲スコトヲ得ス

①一四八ノ七
一〇條

第九條 丸瀬以內ニ在ル艦船ハ海中ニ物品灰塵砂石塵芥ヲ遺棄スヘカラス但軍艦ニ遺棄物アルトキハ其用ニ供スル船艦借用ヲ知港事ニ請求スヘシ

①一四八ノ七
九條

第十條 丸瀬以內ノ海岸海面ニハ何人ト雖モ定所ノ外ニ於テ物品灰塵砂石塵芥ヲ遺棄スヘカラス物品灰塵砂石塵芥遺棄場所ヲ定ムルニハ司令長官ノ許可ヲ受クヘシ

①一四八ノ七條

第十一條 傳染病者アル艦船ハ丸瀬以內ニ進入スルコトヲ得ス

①一四八ノ一
條

第十二條 軍港内海上ニ於テハ砲又ハ司令長官ノ許可ヲ得タルモノノ外銃砲ヲ發スルコトヲ得ス

①一四八ノ二
三條

第十三條 軍港内ニ浮標又ハ立標ヲ設置スルニハ司令長官ノ許可ヲ受クヘシ

①一四八ノ二
三二五二六條

第十四條 軍港内ニ於テ左ノ工業ヲ起サントスル者ハ起工ノ前ニ於テ司令長官ノ許可ヲ受クヘシ但地方官ノ許可ヲ請クヘキモノハ先ツ其許可ヲ受クヘシ

- 一 鐵橋ヲ架設シ波止場ヲ築造スル事
- 二 海面ヲ埋立テ海岸ヲ掘鑿シ又ハ海岸ニ石垣ヲ造ル事

①一四八ノ一四
條

三 道路ヲ開通シ橋梁ヲ架設スル事

四 山岡ヲ掘鑿スル事

五 森林ヲ伐採スル事

第十五條 司令長官ハ前條ニ掲グル工事軍港ノ防禦若クハ海軍ノ事業ニ妨害アリト認定スルトキハ許可ヲ與フヘカラス

第十六條 司令長官ハ許可ヲ與ヘサル工事ヲ爲スモノアルトキハ建築部官員ヲシテ之ヲ中止セシムヘシ

第十七條 軍港内衛生事務ノ施行ニ於テハ地方官ハ地方衛生吏ヲシテ鎮守府衛生會議ニ協議セシムヘシ

○キノ部

(一四九)金藏公債證書發行條例 明治二十一年十一月六日 勅令第七十三號

股諸公債證書條例中條項ノ改正削除及元金償還其他取扱手續等變更ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第七十三號 (官報十一月七日)

明治八年第九十五號布告新舊公債證書發行條例第三條第四條及第五條ノ第一節ヨリ第四節
マテ第六條ヨリ第十一條マテヲ削除シ第五條第五節中一切以下ノ五十七字ヲ「之ヲ償還セ

①一四九
一七
五七
四八

①一四九
一七
五七
四八

サルヘシ」ト改メ同節但書中又以下ノ三十二字ヲ削除シ同九年第百八號布告金祿公債證書發行條例第二條但書同十三年第四十七號布告金札引換公債條例第十條但書第十三條同十六年第四十七號布告中山道鐵道公債證書條例第七條第一項但書第九條第十條第十二條ヨリ第十六條マテ及第十七條中一切ノ二字ヲ削除シ同年第四十八號布告金札引換無記名公債證書條例第七條第一項但書第九條第十條第十二條ヨリ第十六條マテ及第十七條中一切ノ二字ヲ削除シ同九年第百八號布告金祿公債證書發行條例同九年第百八號布告金祿公債證書發行條例同十三年第四十七號布告金札引換公債條例同十六年第四十七號布告中山道鐵道公債證書條例同第四十八號布告金札引換無記名公債證書條例ニ據リ發行シタル諸公債證書ノ取扱ハ金祿公債金札引換公債金札引換無記名公債證書ノ利子支拂期日ヲ毎年五月一日ヨリ同二十五日マテ十一月一日ヨリ同二十五日マテトスルノ外明治十九年大藏省令第三十號整理公債取扱順序第十三條ヨリ第三十一條マテノ各條ニ據

●參照

○關係法令

八一七 大藏省令第十四號 明治二十一年十一月十四日
明治八年第九十五號布告新舊公債證書發行條例同九年第百八號布告金祿公債證書發行條例同十三年第四十七號布告金札引換公債條例同十六年第四十七號布告中山道鐵道公債證書條例同第四十八號布告金札引換無記名公債證書條例ニ據リ發行シタル諸公債證書ノ取扱ハ金祿公債金札引換公債金札引換無記名公債證書ノ利子支拂期日ヲ毎年五月一日ヨリ同二十五日マテ十一月一日ヨリ同二十五日マテトスルノ外明治十九年大藏省令第三十號整理公債取扱順序第十三條ヨリ第三十一條マテノ各條ニ據

ル但其第十四條第十六條第二十條第二十一條第二十二條第三十一條中無記名證書ニ該當スル取扱ハ新舊公債證書發行條例金祿公債證書發行條例金札引換公債條例ノ記名證書ニ適用セサルモノトス
本令ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス

○起業公債證書發行條例

(一五〇) 大藏省令第十五號 明治二十一年十一月十四日
明治十一年五月大藏省甲第十三號布達起業公債證書條例第一條第二節但書第二條第一節中「第六條ヨリ」除キマテノ十八字「外國人ヲ除ク」外ノ八字同但書「外國人ヲ除キ」ノ六字及第四條第五條第六條第七條ヲ削除シ證書ノ賣買讓與紛失消滅汚染毀損其他ニ係ル事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例並同年同大藏省令第三十號整理公債取扱順序ニ據ル但其取扱銀行ハ總テ從前ノ通トス
本令ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス

(一五一) 金札引換公債條例 (本條例ニ改正削除アルモ金祿公債證書發行條例中ニ掲ケ之ヲ略ス)

(一五二) 議會并議員保護法 明治二十二年十一月七日
朕議會並議員保護ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

●六七六八

●六九一四九

法律第二十八號 (官報十一月八日)

一五二ノ二
一五二ノ三
一五二ノ四
一五二ノ五
一五二ノ六
一五二ノ七
一五二ノ八
一五二ノ九
一五二ノ一〇
一五二ノ一一
一五二ノ一二
一五二ノ一三
一五二ノ一四
一五二ノ一五
一五二ノ一六
一五二ノ一七
一五二ノ一八
一五二ノ一九
一五二ノ二〇
一五二ノ二一
一五二ノ二二
一五二ノ二三
一五二ノ二四
一五二ノ二五
一五二ノ二六
一五二ノ二七
一五二ノ二八
一五二ノ二九
一五二ノ三〇
一五二ノ三一
一五二ノ三二
一五二ノ三三
一五二ノ三四
一五二ノ三五
一五二ノ三六
一五二ノ三七
一五二ノ三八
一五二ノ三九
一五二ノ四〇
一五二ノ四一
一五二ノ四二
一五二ノ四三
一五二ノ四四
一五二ノ四五
一五二ノ四六
一五二ノ四七
一五二ノ四八
一五二ノ四九
一五二ノ五〇
一五二ノ五一
一五二ノ五二
一五二ノ五三
一五二ノ五四
一五二ノ五五
一五二ノ五六
一五二ノ五七
一五二ノ五八
一五二ノ五九
一五二ノ六〇
一五二ノ六一
一五二ノ六二
一五二ノ六三
一五二ノ六四
一五二ノ六五
一五二ノ六六
一五二ノ六七
一五二ノ六八
一五二ノ六九
一五二ノ七〇
一五二ノ七一
一五二ノ七二
一五二ノ七三
一五二ノ七四
一五二ノ七五
一五二ノ七六
一五二ノ七七
一五二ノ七八
一五二ノ七九
一五二ノ八〇
一五二ノ八一
一五二ノ八二
一五二ノ八三
一五二ノ八四
一五二ノ八五
一五二ノ八六
一五二ノ八七
一五二ノ八八
一五二ノ八九
一五二ノ九〇
一五二ノ九一
一五二ノ九二
一五二ノ九三
一五二ノ九四
一五二ノ九五
一五二ノ九六
一五二ノ九七
一五二ノ九八
一五二ノ九九
一五二ノ一〇〇

第一條 法律ヲ以テ組織シタル議會ニ對シ公然誹毀侮辱シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス但議會ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二條 前條議會ノ議員ニ對シ其公務上ノ言論行爲ニ付公然誹毀侮辱シタル者又ハ議員ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三條 議員其公務ヲ行フニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其言論行爲ヲ妨害シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四條 議員ノ職ヲ辭セシムルノ目的又ハ其公務上ノ言論行爲ヲ妨害セントスル目的ヲ以テ議員ヲ脅迫シ又ハ恐喝シタル者ハ十一月以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第五條 第二條第三條ノ罪ヲ犯シ因テ議員ヲ毆傷シタル者ハ刑法毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

○ (一五三)銀行條例 明治二十三年八月二十三日 法律第七十二號

朕銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス (治二十三年十二月法律第一〇九號ヲ以テ本條例ハ明)

トヲ命ス (治二十六年一月一日ヨリ施行ノトニ延期セラレ)

法律第七十二號

銀行條例

第一條 公ニ開キタル店舗ニ於テ營業トシテ證券ノ割引ヲ爲シ又ハ爲替事業ヲ爲シ又ハ諸預リ及貸付ヲ併セ爲ス者ハ何等ノ名稱ヲ用非ルニ拘ラス總テ銀行トス

第二條 銀行ノ事業ヲ營マントスル者ハ其資本金額ヲ定メ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三條 銀行ハ毎半年營業ノ報告書ヲ製シ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ニ送付スヘシ

第四條 銀行ハ毎半年簡年財産目錄貸借對照表ヲ製シ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五條 銀行ハ一人又ハ一會社ニ對シ資本金高ノ十分ノ一ヲ超過スル金額ヲ貸付又ハ割引ノ爲ニ使用スルコトヲ得ス

第六條 資本金總額ノ拂込ヲ了ラサル銀行ニ於テハ一人又ハ一會社ニ對シ其拂込高ノ十分ノ一ヲ超過スル金額ヲ貸付又ハ割引ノ爲ニ使用スルコトヲ得ス

第七條 銀行ノ營業時間ハ午前第十時ヨリ午後第四時マテトス但營業ノ都合ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得

第八條 銀行ノ休日ハ大祭日、祝日、日曜日及銀行營業地ニ行ハル、定例ノ休日トス但止ヲ得サル事故アルトキハ地方長官ニ届出テ豫メ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ公告シタル上休業スルコトヲ得

第九條 大藏大臣ハ何時タリトモ地方長官又ハ其他ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務ノ實況及財

スルコトヲ得

第十條 大藏大臣ハ何時タリトモ地方長官又ハ其他ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務ノ實況及財

産ノ現況ヲ検査セシムルコトヲ得

第九條 第二條ノ規定ニ違反シ大藏大臣ノ認可ヲ受ケスシテ銀行ノ事業ヲ營ミタル者ハ商
法第二百五十六條ノ例ニ依テ處分ス

第十條 銀行ニ於テ第三條ノ報告若ハ第四條ノ公告ヲ爲サス又ハ其報告中若ハ公告中ニ詐
偽ノ陳述ヲ爲シ若ハ事實ヲ隱蔽シタルトキハ商法第二百六十二條ノ例ニ依テ處分ス
第八條ノ検査ヲ受ルコトヲ拒ミタルトキハ商法第二百五十八條ノ例ニ依テ處分ス

第十一條 此條例ハ日本銀行橫濱正金銀行國立銀行ニモ適用ス

○ユノ部

(一五四)郵便條例 明治二十二年八月七日

法律第二十一號

朕郵便條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
法律第二十一號 (官報八月八日)

郵便條例中左ノ通改正シ明治二十二年十月一日ヨリ施行ス
第一條中

四 書籍帳簿各種ノ印刷物、寫真、書畫、繪圖、野紙、營業品ノ見本及雛形、農産物種子
第十四條 營業品ノ見本及雛形ハ一箇ノ重量百匁ニ超過スヘカラス
第十七條中

第三種郵便物	一號一箇重量十六匁毎ニ十六匁未 ニ號又ハ二箇以上一東重量十六匁毎ニ十六匁未 ニ號又ハ二箇以上一東重量十六匁毎ニ十六匁未	五厘 一錢
第四種郵便物	重量三十匁毎ニ三十匁未 ニ號又ハ二箇以上一東重量十六匁毎ニ十六匁未	二錢

●參照

○關係法令

八一八 郵便貯金條例 明治二十三年八月十二日
法律第六十三號

朕郵便貯金條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施
行スヘキコトヲ命ス
法律第六十三號 (官報八月十三日)

郵便貯金條例

第一條 郵便貯金ノ事務ハ遞信大臣之ヲ管理ス

第二條 郵便貯金ハ遞信大臣ノ指定スル郵便電信局郵便局ニ於テ其預入拂渡ヲ取扱
フモノトス
遞信大臣ニ於テ必要ト認ムル場所ニハ特ニ郵便貯金預所ヲ設置シ郵便貯金ノ預入
ヲ取扱ハシムルコトアルヘシ

第三條 郵便貯金ノ預入ハ貯金通帳ヲ以テ證トシ其拂戻ハ拂戻證書ヲ以テ證トス

第四條 郵便貯金一人一度ノ預金ハ拾錢以上トシ端數ハ厘位ニ限ル一人一日ノ預金

一五七條
一五八條
一五九條

ユノ部

一六〇條

ハ五拾圓以下トス

郵便貯金一人ノ預金總額ハ元利合セテ五百圓ニ超過スルコトヲ得ス

一六一條

第五條 郵便貯金利子ノ割合ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

一六二條

郵便貯金ノ利子ハ毎年三月三十一日ヲ期トシテ之ヲ計算シ元金ニ加ヘ四月ヨリ更

一六三條

ニ利子ヲ付スヘシ

一六四條

郵便貯金ハ之ヲ預リタル月及拾錢未滿ノ端數ニハ利子ヲ付セス

郵便貯金拂戻ノ請求アリタルトキハ拂戻證書發付ノ月ヨリ利子ヲ付セス

郵便貯金ノ利子計算上厘位未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ之ヲ除棄スヘシ

一六五條

第六條 郵便貯金預ケ人ハ何時ニテモ郵便貯金ノ全額又ハ其幾分ノ拂戻ヲ請求スル

コトヲ得但幾分拂戻ノ場合ニハ其未タ元金ニ加ヘサル利子ハ拂戻ヲ請求スルコト

ヲ得ス

一六六條

第七條 郵便貯金預ケ人ハ其貯金ノ幾分ヲ以テ公債證書ノ購入保管ヲ請求スルコト

ヲ得但其公債證書ハ額面五拾圓又ハ五拾圓ヲ遞加シタルモノニ限ル

郵便貯金預ケ人ハ何時ニテモ前項保管ニ係ル公債證書ノ下渡ヲ請求スルコトヲ

得

郵便貯金預ケ人貯金全額ノ拂戻ヲ請求スルトキハ保管ニ係ル公債證書モ同時ニ其

下渡ヲ請求スヘシ

一六七條

第八條 郵便貯金ノ預ケ金額第四條ノ制限ニ超過シタルトキハ其旨ヲ貯金預ケ人ニ

一七〇條

通知シ預ケ金額ヲ制限以内ニ引直サシムヘシ

前項ノ通知ヲ發シタル後六十日以内ニ引直ヲ爲ササルトキハ貯金預ケ人ノ爲メ其

貯金ヲ以テ公債證書ヲ購入スルモノトス但此場合ニ於テ購入スル公債證書ハ額面

五拾圓ヲ超過スルコトヲ得ス

一七一條

第九條 郵便貯金通帳ハ一人一冊ヲ限リトス若シ二冊以上ノ通帳ヲ受領シテ貯金預

入ヲ爲シタル者アリタルトキハ最初受領セシ通帳ニ記載セル貯金ノ外利子ヲ付セ

スシテ拂戻ヲ爲サシム若シ二冊以上ノ通帳ノ日附同一ナルトキハ其貯金最多額ノモ

ノニ利子ヲ付シ其他ノモノニハ總テ利子ヲ付セスシテ拂戻ヲ爲サシム

一七二條

第十條 郵便貯金預ケ人ハ最初貯金ノ預入ヲ爲シタル月ヨリ滿一年毎ニ其通帳ヲ遞

信省ニ差出シ前期間利子ノ記入ヲ受クヘシ但一年ノ終期四月又ハ五月ニ當ルモノ

ハ之ヲ六月ニ差出スヘシ

第十一條 郵便貯金ハ其預ケ人最後ニ貯金預入ヲ爲シタル日又ハ通帳ヲ遞信省ニ差

出シ其書換又ハ利子ノ記入ヲ受ケタル日又ハ拂戻ヲ請求シタル日ヨリ起算シ十年

間預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求セス又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出ササルトキハ滿期ノ

翌月ヨリ利子ヲ付セス但保管ニ係ル公債證書ノ利子ハ此限ニアラス

尙二十年間貯金ノ預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求セス又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出ササ

ルトキハ其貯金ハ政府ノ所得トス

前項貯金ヲ政府ノ所得トスル場合ニ於テ保管ニ係ル公債證書アルトキハ其公債證

書を併テ政府ノ所得トス

若シ第二項ノ期限内ニ貯金ノ預入ヲ爲シ又ハ拂戻ヲ請求シ又ハ通帳ヲ遞信省ニ差出シタルトキハ其翌月ヨリ利子ヲ付ス

一八二條

第十二條 郵便貯金ノ拂戻金又ハ下渡ヲ請求シタル公債證書ハ拂戻證書又ハ下渡證書ノ日附ヨリ一箇年以内ニ受取ルヘシ若シ此期限内ニ受取ラサルトキハ之ヲ供託所ニ寄託スヘシ

一八三條

第十三條 郵便貯金預ケ人ハ郵便貯金ヲ家督相續人ニ讓與スル場合ヲ除クノ外其名前書換ヲ請求スルコトヲ得ス

一八四條

第十四條 郵便貯金預ケ人ニ損害ヲ蒙ラシメ政府其辨償ノ責任スヘキ場合ニ於テハ郵便貯金預ケ人ハ其事故ノアリタルコトヲ知リタル日又之ヲ知リ能ハサルトキハ次期ノ利子記入期限ヨリ一箇年以内ニ其辨償ノ請求ヲ爲スヘシ若シ其期限内ニ請求ヲ爲ササルトキハ政府其實ヲ免カルモノトス

一八五條

第十五條 郵便貯金事務ニ關スル郵便物ハ郵便税ヲ免除ス

一八六條

第十六條 郵便貯金ノ受渡ニ關スル書類ハ證券印税ヲ免除ス

一八七條

第十七條 本條例施行ノ細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

附則

明治十五年十二月第五十九號布告郵便條例第五百五十七條乃至第二百二條及第二百四十二條第二項ハ本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

八一九 遞信省令第二十三號 明治二十三年十一月二十六日

郵便貯金條例施行細則左ノ通相定メ明治二十四年一月一日ヨリ實施ス

郵便貯金條例施行細則

第一款 貯金預入

第一條 郵便貯金ノ預入ヲ爲サントスル者ハ貯金ヲ取扱フ郵便電信局郵便局又ハ郵便貯金預所ニ到リ貯金預入申込書用紙ヲ申受ケ式ノ如ク記入シ記名調印ノ上之ヲ其局所ニ差出シ通帳ヲ受領スヘシ

第二條 貯金預ケ人通帳ヲ受領シタルトキハ其通帳ニ氏名住所居所身分職業ヲ記入シ且其印鑑ノ部ニ捺印ノ上預ケ金ヲ添ヘテ局所ノ主務者ニ差出シ預ケ金ノ記入ヲ受ケ之ヲ所持スヘシ

第三條 貯金預ケ人再度以後ノ預ケ金ヲ爲サントスルトキハ既ニ所持セル通帳ニ預ケ金ヲ添ヘテ貯金取扱局所ニ差出シ其記入ヲ受クヘシ

第四條 貯金取扱局所ノ主務者預ケ金及通帳ヲ受領シタルトキハ通帳ニ其金額及預年月日ヲ記載シ記名調印ノ上日附印ヲ押捺シテ預ケ金ノ領收ヲ證シ之ヲ預ケ人ニ交付スルモノトス

第五條 貯金預ケ人利子記入等ノ爲メ通帳ヲ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ差出中預ケ金ヲナサントスルトキハ貯金取扱局所ニ通帳受取證書ヲ示シ自己ノ氏名ヲ陳述

シ預ケ金ヲ差出シ其假領收證書ヲ領置スヘシ
前項ノ預ケ人通帳ノ返戻ヲ受ケタルトキハ之ニ假領收證書ヲ添ヘテ其預ケ金ヲ爲
シタル局所ニ差出シ其預ケ金ノ轉記ヲ受クヘシ

貯金取扱局所ノ主務者前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ假領收證書ヲ引揚ケ第四條ノ
手續ニ準シ其預ケ金ヲ通帳ニ轉記シ之ヲ預ケ人ニ交付スルモノトス

第六條 貯金預ケ人預ケ金記入済ノ通帳ヲ受領シタルトキハ其場ニ於テ通帳記入ノ
金額其他ニ相違遺漏等ナキヤヲ點檢シ若シ之アルトキハ直ニ訂正ヲ求ムヘシ

第七條 貯金ノ預入アリタルトキハ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ於テ其原簿ニ登記
シ貯金登記簿通知書ヲ預ケ人ニ送達スルモノトス

貯金預入預ケ金ヲ爲シタル日ヨリ三十日(島嶼又ハ交通不便ノ地ハ相當ノ時日ヲ
加フ)以内ニ貯金登記簿通知書到達セザルトキハ其期日ノ翌日ヨリ又通知書到達

セルモ其記載ノ金額年月日等相違アルトキハ到達ノ翌日ヨリ十日以内ニ其事故ヲ
郵便爲替貯金局長ニ申告スヘシ但郵便爲替貯金分局受持區内ノ貯金取扱局所ニ預

ケ金ヲ爲シタル貯金預ケ人本條ノ申告書ヲ差出ストキハ同分局長ヲ經由スヘシ
第八條 貯金預ケ人ハ一ノ貯金取扱局所ニ於テ受領シタル通帳ヲ以テ他ノ貯金取扱

局所ニ預ケ金ヲ爲スコトヲ得
第九條 印形ヲ所持セザル者預ケ金ヲ爲サントスルトキハ引受人一名ヲ定ムヘシ
町村、學校、病院、社寺、會社、組合等ニ於テ預ケ金ヲ爲サントスルトキハ擔當人一名

ヲ定ムヘシ

二人以上共同シテ預ケ金ヲ爲サントスルトキハ總代人一名ヲ定ムヘシ但共同者中
ノ一名ヲ加印者ト爲スコトヲ得

第十條 町村、學校、病院、社寺、會社、組合及共同ノ貯金ハ其町村、學校、病院、社寺、會社、
組合若クハ總代人ヲ以テ一個ノ預ケ人ト見做スヘシ

第十一條 印形ヲ所持セザル者ノ貯金ニ關シ調印ヲ要スル書類ニハ本人記名シ尙引
受人記名調印スヘシ

町村、學校、病院、社寺、會社、組合等ノ貯金ニハ町村、學校、病院、社寺、會社、組合等ノ名
稱ヲ記シ其印ヲ捺シ尙擔當人記名調印スヘシ

第十二條 郵便爲替貯金局受持區内ノ貯金取扱局所ニ於テ通帳ヲ受領シタル貯金預
ケ人郵便爲替貯金分局受持區内ニ移轉シ又ハ同分局受持區内ノ貯金取扱局所ニ於

テ通帳ヲ受領シタル預ケ人郵便爲替貯金局若クハ他ノ分局受持區内ニ移轉シタル
トキハ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ所持ノ通帳ヲ差出シ其引換ヲ請求スルコトヲ

得但本條ノ場合ニ於テ通帳ノ引換及交付ノ手續ハ第五款ノ各條ニ準據スルモノトス
第二款 貯金拂戻

第十三條 貯金預ケ人ハ何レノ貯金取扱局所ニ於テモ貯金ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ
得但郵便貯金預所ニ於テハ拂戻金ノ拂渡ヲ取扱ハス

エノ部

第十四條 貯金預ケ人貯金ノ拂戻ヲ要スルトキハ貯金取扱局所ニ設ケアル拂戻請求書用紙ヲ申受ケ之ニ金額及拂戻金ヲ受取ラント欲スル局名其他式ノ如ク記入シ記名調印ノ上通帳ヲ添ヘ之ヲ其局所ニ差出シ通帳受取證書ヲ受領スヘシ

第十五條 貯金拂戻ノ請求アリタルトキハ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ於テ其請求書到達ノ日ヨリ五日以内ニ拂戻證書ヲ調製シ之ヲ請求人ノ居所ニ發送スヘシ

若シ相當ノ期限内ニ拂戻證書到達セサルカ又ハ到達セルモ金額其他ニ相違アルトキハ拂戻請求人ニ於テ郵便爲替貯金局長ニ宛テ其事故ヲ申告スヘシ但郵便爲替貯金分局受持區内ノ貯金取扱局所ヨリ通帳ヲ受領シタル貯金預ケ人本條ノ申告書ヲ差出ストキハ同分局長ヲ經由スヘシ

第十六條 貯金拂戻請求人拂戻證書ヲ受領シタルトキハ其證書ニ記名調印シ通帳受取證書ト共ニ之ヲ拂渡局ニ差出シ拂戻金ヲ受領シ且通帳ノ返戻ヲ受クヘシ但貯金金額拂ノ通帳ハ返付セサルモノトス

第十七條 代人ヲ以テ拂戻金ヲ受取ラントスル者ハ拂戻證書ノ裏面ニ委任ノ證明ヲ爲スカ又ハ拂戻證書ニ代人屆書ヲ添ヘテ之ヲ拂渡局ニ差出サンメ其代人ハ其拂戻證書ニ代人ノ肩書ヲ爲シ前條ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 貯金預ケ人預ケ金ヲ爲シタル局所ニ貯金拂戻ヲ請求スル場合ニ於テハ其局所ニ預入ヲ爲シタル預ケ金高ノ内金十圓迄又再度通帳ヲ所持スル者其再度通帳ヲ受領シタル局所ニ貯金拂戻ヲ請求スル場合ニ於テハ其繰越金高ノ内金十圓迄ヲ

限リ即時拂ノ取扱ヲ請求スルコトヲ得但本條ノ請求ヲ爲ストキハ一圓以上ノ預ケ金ヲ殘シ置クヘキモノトス

前項即時拂ノ請求ハ一箇月一回ヲ超ルコトヲ得ス

第十九條 貯金即時拂ノ請求ヲ受ケタル局所ニ於テ其請求人ノ正當預ケ人タルコトヲ調査シ能ハサル場合ニ於テハ其請求ヲ拒ムコトアルヘシ

第二十條 即時拂ヲ要スル貯金ノ拂戻證書ハ其拂渡局ニ於テ之ヲ調製シ其請求人ノ居所ニ送達スルモノトス

第二十一條 郵便爲替貯金局及同分局所在地ノ貯金取扱局所ニ於テハ貯金即時拂ノ取扱ヲ爲サルモノトス

第三款 貯金預ケ人異動

第二十二條 貯金預ケ人氏名住所居所印形ニ變更ヲ生シタルトキハ其旨ヲ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ届出ヘシ但改印ニ係ル届書ニハ其印鑑ヲ添フヘシ

引受人擔當人加印者アル預ケ人前項ノ變更ヲ生シ又ハ其引受人擔當人加印者ニ異動ヲ生シ若クハ此等ノ氏名住所居所印形ニ變更ヲ生シタルトキハ其引受人擔當人加印者連署ヲ以テ前項同様届出ヘシ但引受人擔當人加印者ノ變更ノ場合ニ於テハ前任者モ亦届書ニ連署スヘシ若シ連署シ能ハサルトキハ證人ヲ立テ其事實ヲ證明スヘシ

第二十三條 共同者ニ於テ總代人ノ變更ヲ要スルトキハ前任後任ノ總代人及加印者

連署ヲ以テ後任總代人ノ印鑑ヲ添ヘ其旨ヲ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ届出ヘシ但前任者連署シ能ハサルトキハ證人ヲ立テ其事實ヲ證明スヘシ

第二十四條 貯金預ケ人第二十二條及第二十三條ノ届書ヲ差出シタルトキハ同時ニ通帳ノ氏名、住所、居所、印鑑等ノ諸項ニ就キテ其變更ノ際ヲ訂正スヘシ

第四款 貯金通帳利子記入

第二十五條 貯金預ケ人利子記入ノ爲メ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ通帳ヲ差出ストキハ之ヲ貯金取扱局所ニ出シ其受取證書ヲ預置スヘシ

郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ於テ通帳利子記入ノ手續ヲ了リタルトキハ通帳差出人ニ其通達書ヲ送達シ通帳ハ其經由局所ニ返付スヘシ

通帳差出人前項ノ通達書ヲ受ケタルトキハ義ニ領置セル通帳受取證書ヲ經由局所ニ返納シ利子記入済通帳ヲ受領スヘシ

第二十六條 貯金通帳差出人利子記入済通帳ヲ前條ノ經由局所外ニ於テ受取ラント欲スルトキハ初メ通帳ヲ差出ストキ其局所ヲ指定シテ申出ヘシ

第五款 貯金再度通帳

第二十七條 貯金預ケ人所持ノ通帳餘白ナキニ至リタルトキ又ハ毀損汚斑シテ不判明トナリタルトキハ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ其通帳ヲ差出シ再度通帳ノ交付ヲ請求スヘシ但請求書及通帳ハ之ヲ貯金取扱局所ニ出シ其受取證書ヲ領置スヘシ

通帳亡失ノ爲メ再度通帳ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ證人ヲ立テ其事實ヲ證明シ前項ノ手續ヲ爲スヘシ但再度通帳ノ交付ヲ請求シタル後前ノ通帳ヲ發見シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

第二十八條 郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ於テ再度通帳交付ノ請求ヲ受ケタルトキハ再度通帳發行通知書ヲ請求書經由ノ局所ニ廻送シ其告知書ヲ請求人ニ送達スルヲトメ

第二十九條 貯金再度通帳ヲ請求シタル者前條ノ告知ヲ受ケタルトキハ該告知書及通帳受取證書ヲ請求書經由ノ局所ニ差出シ新規通帳ノ交付ヲ受クヘシ但請求人新規通帳ヲ請求書經由ノ局所外ニ於テ受取ラント欲スルトキハ初メ請求書ヲ差出ストキハ其局所ヲ指定シテ申出ヘシ

第三十條 貯金再度通帳發行通知書ヲ受ケタル局所ハ請求人ノ求メニ從ヒ該通知書ニ依リ再度通帳ヲ調製シ前條ノ告知書及通帳受取證書ト引換ヘ之ヲ其請求人ニ交付スルヲトメ

第三十一條 貯金通帳毀損汚斑又ハ亡失ノ爲メ再度通帳ヲ交付スル場合ニ於テハ通帳一冊ニ付手数料金十錢ヲ徴收スヘシ
手数料ハ再度通帳請求書ニ郵便切手ヲ貼附シテ前納スヘシ

第六款 貯金相續

第三十二條 貯金預ケ人其家督相續人ニ貯金ヲ讓與セントスルトキハ預ケ人相續人

連署ノ書面ヲ以テ通帳並相續人ノ印鑑ヲ添ヘ貯金取扱局所ヲ經テ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ名前書換ヲ請求スヘシ

第三十三條 貯金預ケ人死亡シタルトキハ其家督相續人ニ於テ相續人タルコトヲ證明セル書面ヲ以テ通帳ヲ添ヘ貯金取扱局所ヲ經テ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ貯金ノ拂戻ヲ請求スルカ又ハ名前書換ヲ請求スヘシ但名前書換ヲ請求スルトキハ同時ニ相續人ノ印鑑ヲ差出スヘシ

第三十四條 第三十二條及第三十三條ノ名前書換ヲ要スル場合ニ於テ相續人既ニ自己ノ貯金通帳ヲ所持セルトキハ共ニ其通帳ヲ差出シ其相續シタル貯金ノ轉記ヲ請求スヘシ

第三十五條 前三條ノ場合ニ於テ通帳ヲ貯金取扱局所ニ差出シタルトキハ通帳受取證書ヲ領置スヘシ

第三十六條 家督相續人ナキ貯金預ケ人死亡シタルトキハ其貯金ヲ相續シタル者ニ於テ證人ヲ立テ其事實ヲ證明シ第三十二條ノ手續ニ由リ貯金ノ拂戻ヲ請求スヘシ
第三十七條 郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ於テ貯金ノ讓與又ハ相續ニ關スル請求書ヲ受ケタルトキハ正當相續人タルコトヲ認ムル爲メ其請求人ヲシテ市町村長又ハ區長ノ與書證明ヲ要メシメ若クハ其他ノ證明ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第七款 貯金拂戻證書ノ亡失毀損汚竊
第三十八條 貯金拂戻證書毀損汚竊シテ不判明トナリタルトキハ拂戻請求人ニ於テ

貯金拂渡局ヲ經テ郵便爲替貯金局又ハ同分局ニ證書ヲ差出シ貯金拂渡認可證書ノ交付ヲ請求スヘシ

第三十九條 貯金拂戻證書亡失ノ爲メ貯金拂渡認可證書ノ交付ヲ請求スル場合ニ於テハ拂戻請求人ニ於テ證人ヲ立テ其事實ヲ證明シ前條ノ手續ヲ爲スヘシ但拂渡認可證書ヲ請求シタル後前ノ證書ヲ發見シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

第八款 公債證書ノ購入、保管、下渡

第四十條 貯金ヲ以テ購入スヘキ公債證書ハ整理公債證書トシ總テ無記名トス

第四十一條 公債證書ハ時價ニ依リ購入スルモノトス

時價トハ東京ニ於ケル購入當日ノ賣買價格ニ購入口錢ヲ加ヘタルモノトス

第四十二條 公債證書ノ購入ヲ爲ストキハ左ノ手数料ヲ徴收スヘシ

公債證書金額五十圓マテ

金二十錢

同 百圓マテ

金三十錢

以上五十圓ヲ加フル毎ニ金十錢ヲ加フ

第四十三條 公債證書ノ購入ヲ請求スル者ハ其請求書ニ通帳ヲ添ヘ之ヲ貯金取扱局所ニ出シ通帳受取證書ヲ領置スヘシ

第四十四條 郵便爲替貯金局ニ於テ公債證書購入請求書ヲ領收シタルトキハ其到達ノ日ヨリ七日以内ニ公債證書ヲ購入スルモノトス

第四十五條 公債證書購入ノ代金及手数料ハ郵便爲替貯金局ニ於テ請求人ノ貯金ヨ

リ拂出シ且其金額ヲ通帳ニ記入スヘシ

第四十六條 郵便爲替貯金局ニ於テ公債證書ヲ購入シタルトキハ之ヲ公債證書保管原簿ニ登記シ其保管證書及通帳ヲ請求書經由ノ局所ヲ經テ請求人ニ交付スヘシ
保管證書ニハ公債證書ノ記號番號金額購入代價及購入年月日ヲ記載スルモノトス

第四十七條 保管ニ係ル公債證書ノ利子ハ郵便爲替貯金局ニ於テ之ヲ受取り其預ケ人ノ貯金ニ受入ルヘシ

第四十八條 保管ニ係ル公債證書ノ下渡ヲ請求スル者ハ其請求書ニ保管證書ヲ添ヘ之ヲ貯金取扱局所ニ出シ其受取證書ヲ領置スヘシ

下渡請求書ニハ其請求人ニ於テ公債證書ヲ受取ラント欲スル貯金取扱局ヲ指定スヘシ但郵便貯金預所ニ於テハ公債證書ノ渡方ヲ取扱ハス

第四十九條 郵便爲替貯金局ニ於テ公債證書下渡請求書ヲ領收シタルトキハ請求人ノ指定シタル貯金取扱局ニ公債證書ヲ廻付シ且請求人ニ下渡證書ヲ送達スヘシ
請求人前項ノ下渡證書ヲ受ケタルトキハ其證書受領ノ部ニ記名調印シ前ニ受領シタル受取證書ト共ニ下渡局ニ差出シ之ト引換ヘ公債證書ヲ受領スヘシ

第九款 雜則

第五十條 貯金預ケ人貯金事務ニ關シ郵便爲替貯金局又ハ同分局又ハ貯金取扱局所ニ差出す書面ニハ所持ノ通帳ノ記號番號ヲ記載シ又之ヲ郵送スルトキハ其封皮ノ

表面ニ貯金事務ト明記スヘシ

○判決例

八二〇明治二十一年乙第四四〇號

山形縣平民無職業 宮 島 義 清

三七一ノ
二三八條

郵便條例第三百三十八條ヲ按ズルニ本條ニ不長ノ事ヲ行ハシカ爲メトアルハ國法ニ觸ルヘキ事柄ヲ其信書中ニ掲記シタル者ヲ指シタルモノナリトス今ヤ原裁判所カ郵便條例犯則ナリト認定シタル信書即チ被告ヨリ上松駒吉長男實之助及ヒ小島彌右衛門家内ニ宛タル手簡ヲ審問スルニ其文面上ニ於テ未タ國法ニ觸ルヘキ事柄ト認ムヘキ文同ノ記載アルニアラサルナリ然ラハ則チ該手簡ハ假令被告カ金員騙取ノ目的ヲ以テ發送シタルモノニシテ欺罔ノ證據ニ係ルニモセヨ其文意中ニ顯ハレザル意志ニ立入り之ヲ不長ノ事ヲ行ハシカ爲メ郵便ヲ用ヒタルモノト爲スヲ得サルモノトス依テ原裁判所カ郵便條例第三百三十八條ヲ適用成斷シタルハ擬律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス既ニ此點ニ付破毀スルモノト認メタル上ハ上告論旨ニ對シ一辯明ヲ要セス右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判會渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

宮 島 義 清

原裁判所カ認メタル事實ニ依レハ被告ノ所爲ハ法律上罪トナラサルヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ照シ無罪ヲ宣告宜敷免ヌルモノ也

明治二十一年九月二十九日

八二一明治二十一年乙第六二八號

富山縣士族 片 岡 長 信

三七一ノ
二三四條

請假ノ證據ヲ取捨シ事實ノ判定ヲ爲スハ法律上審判官ノ職權ニ任從スルモノニシテ他ヨリ濫リニ容喙シ得サル

ニノ部

モノナリ而シテ該二郵便條例ヲ按ズルニ其第二百三十四條ニ已レニ懸セサル郵便物ヲ開封シ又ハ毀損汚穢シ或ハ私用竊却抑留隠匿拋棄シ云々トアル其隱匿トハ之ヲ受取リタルノアリシトテ直チニ隱匿ナリト云フヘキモノニアラス之ヲ隱匿シタリトセンニハ其隱匿ノ事實アルヲ必要ナリトス今ヤ原判文ヲ査閱スルニ本案被告カ該郵便物ヲ隱匿シタリトノ證據ハ充分ナラサルモノトス因テ云々トアリテ隱匿ノ事實ヲ認メタルニアラサル以上ハ假令被告カ該郵便物ヲ受取リタルモノトスルモ到底郵便條例ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラスト然ラハ則チ本案上告ハ畢竟證據ノ取捨事實ノ判定ニ關シ非難スルニ過キサルモノニシテ治罪法第四百十條各項ニ適合スル上告ノ理由ナキモノトス

明治二十一年十二月廿七日

八二二 明治二十二年乙第八三號

長野縣平民書肆 成瀬義雄

抑郵便條例第五十七條同第五十八條ニ規定スルカ如ク郵便ノ受取人其肩書ノ家ヲ移轉スルカ又ハ已レニ宛タルニアラサル郵便物ノ配達ヲ受ケタル等ノ一アル場合ヲ除クノ外ハ其郵便物ニ附箋ヲ爲シ返還スルヲ得サルモノナレハ若シ己レニ宛タル郵便物其差出人ニ返還セントスルニハ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用シタルニアラサルヨリハ之ヲ郵便ニ差出ヌル能ハサルモノナルヲ以テ之レニ印紙ヲ貼用セズ差出シタルニ於テハ未納稅ノモノヲ差出シタリト云ハサルヲ得今原裁判書第二掲ケタル事實ニ依レハ被告カ明治法律學校内講法會ヨリ送付シ來リタル附箋ニ附箋ヲ爲シ郵便ニ付シタルハ已レニ宛タルモノナレハ假令重複ニ洗リタルモノニモセヨ之ヲ返還セントスルニハ更ニ印紙ヲ貼用シタル上ニアラサレハ返還シ能ハサルモノナルニ之ヲ貼用セズ返還シタルヤ明白ナレハ未納稅ノモノヲ郵便ニ付シタルモノト云ハサルヲ得而シテ大阪郵便局ヨリ差出人タル被告ニ還付納稅ヲ求メタルニ其還付ヲ拒ミ納稅セサルノ事實ヲ認メ郵便條例第二百四十條ヲ適用應斷シタルハ相當ニシテ略モ不法ニアラサレハ上告第一点ハ相立タサルモノト云フヲ得サルモノトス因テ上告第二點モ亦相立タサルモノトス

明治二十二年二月廿八日

時ハ第一種郵便物ニ變スルノ勿論ナリトス故ニ前第一條ニ辯明スルカ如ク明治法律學校内講法會ヨリ送附ヲ受ケタル第三種郵便物ヲ返却スルニ當リ其返還スルノ音信文ヲ記シタルモノナレハ第一種郵便物トナリ又更ニ被告ハ差出人トナルヘキモノナルニ付相當ノ納稅スヘキ當然ナルニ之レヲ拒ミタルノ事實ハ明ニ判定シアレハ郵便物種類變更ノ理由ヲ掲ケサルモノト云フヲ得サルモノトス

○ミノ部

(一五五) 民事訴訟用印紙規則 (民事訴訟用印紙法制定ニ付本則ハ廢止ニ屬ス)

(一五六) 民事訴訟用印紙法 (明治二十三年八月十五日法律第六十五號)

朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ヌ

法律第六十五號(官報八月十六日)

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財產權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

七二一五六

七二二一
一五六二
七二二二
一五六三
七二二三
一五六四
七二二四
一五六五
七二二五
一五六六
七二二六
一五六七
七二二七
一五六八
七二二八
一五六九
七二二九
一五六〇

訴訟物ノ價額金五圓マテ	二十錢
同 十圓マテ	三十錢
同 二十圓マテ	六十錢
同 五十圓マテ	一圓五十錢
同 七十五圓マテ	二圓二十錢
同 百圓マテ	三圓
同 二百五十圓マテ	六圓五十錢
同 五百圓マテ	十圓
同 七百五十圓マテ	十三圓
同 千圓マテ	十五圓
同 二千五百圓マテ	二十圓
同 五千圓マテ	二十五圓
同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ	

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

七二ノ三條
一五六ノ二四條
一五六ノ八九條
一〇條

一五六ノ三
三〇條

一五六ノ三
六八九ノ二〇條
七二ノ五六條
一五六ノ二六條
三五〇ノ二六條

一五六ノ九
一〇條

一五六ノ二
三五條

一五六ノ二
三五七條
七二ノ四六條
一五六ノ二
三四五ノ六七
一六條

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セズ	
第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ	
第六條 左ニ掲グル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ	
第一 抗告	
第二 故障	
第三 證據調ノ申立	
第四 假差押及ヒ假處分ノ申請	
第五 判決ノ送達アラントヲ求ムル申立	
第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ	
第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ	
第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ	
第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ	
第十條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ	

ミノ部

①一五六ノ三
三四五六七
八九一〇一六

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用非ス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

●參照

○判決例

八二三 明治廿二年乙第四百四十四號

大坂府平民飲食店業 松本匡次郎
上告ニ依リ茲ニ民事訴訟用印紙規則第十一條ヲ按ヌルニ官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣スル者ハ云々其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ云々トアル注條タルヤ官許賣捌所外ニ於テ販賣スルニ其販賣者ノ免許ヲ得タル者ナルト免許

②七二ノ九條
一五六ノ一
六條三九一
七二ノ一〇條
一五六ノ二
四條八二三
八五八八六八
七二ノ一二條
一五六ノ三
一五條

③七二ノ一二條

ヲ得サル者ナルトヲ論シ其制裁ヲ異ニス可キモノニアラス即チ免許ノ有無ニ拘ハラズ均シク制裁ス可キ注條ナルト勿論ナリトス今原判文ヲ查閱スルニ原判官ハ被告ハ明治二十二年十月十六日自宅ニ於テ安達德兵衛ナル者ハ民事訴訟用印紙拾錢ノ分貳枚ヲ賣與ヘタルモノナリトノ事實ヲ認メナカラ民事訴訟用印紙規則第十一條等ハ官許ヲ得タル賣捌人カ官許賣捌所外ニ於テ發賣シ又其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者等ニ對スル規則ニシテ本件被告ノ如キ無免許ノ者ヲ制裁ス可キ注條ナシトシ無罪ヲ言渡シタルハ疑律ニ錯誤アル裁判ニシテ即チ治罪法第四百十條第十項ニ該當スル上告ノ理由アルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ノ疑律ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ

松本匡次郎

原裁判所カ認メタル事實ニ依リ被告ハ官許ヲ得スシテ自宅即チ官許賣捌所外ニ於テ民事訴訟用印紙ヲ販賣シタル者ナルヲ以テ民事訴訟用印紙規則第十一條ニ附シ罰金二十圓ニ處ス

但書ハ原裁判官渡ノ通りタル可シ

明治廿二年十一月廿八日

○シノ部

●參照

●參照

○判決例

八二四 明治二十二年乙第六七號

高知縣平民紙濶業

濱田伊太郎

シノ部

四百十七

五則七三ノ

右伊太郎が銃砲取締規則火藥取締規則爲數取締規則犯罪被告事件ニ付明治二十二年一月廿六日高知縣裁判所ニ於テ審理ノ末第一被告ハ銃砲取締規則違反ケル明治二十二年一月十二日香川郡鹿敷村友草真次ノ屋敷内ニ於テ小鳥ヲ獲シカ爲メ自己所持ノ堂刃五分ノ和銃ヲ用ヒ銃撃ヲ爲シ居リタルヲ發見セラレ第二被告ハ今ヨリ十五年前任所姓名不知ノモノヨリ火藥四十粒許ヲ買受ケ爾來其内若干ヲ消費シ五分許ヲ私カニ之ヲ所有シ居タルノ事實アリト爲シ第一ノ所爲ハ鳥獸取締規則第二條第十七條第二ノ所爲ハ火藥取締規則第二十五條ニ依リ刑法第六十條ヲ適用シ且明治十四年第七十二號公布第五條ニ照シ第一ノ所爲ニ對シテハ罰金三圓第二ノ所爲ニ對シテハ罰金貳圓ニ處シ又被告ハ其越ヘ届出テ私カニ和銃電燈ヲ所持シ居タルハ明カナレ其和銃ハ玉目堂刃五分ニシテ之ヲ銃砲取締規則ニ照スニ免許銃ニ屬スルヲ以テ届出ヲ爲スニ及ハサルモノナルニ依リ刑法第五條第二條ニ照シ無罪ト言渡シタリ

同裁判所檢察官武田直行ハ右ノ裁判官電中銃砲取締規則犯罪ノ所爲ニ對シ言渡シタル部分ヲ不法ナリトシ上告スルノ要領ハ本案被告カ無罪ニテ和銃電燈ヲ所持シ居タル事實ハ原判官ノ認ムル處ナルニ其和銃タル玉目堂刃二分ニシテ之ヲ銃砲取締規則ニ照スニ免許銃ニ屬スルヲ以テ届出ヲナスニ及ハサルトノ理由ヲ以テ刑法第五條第二條等ニ照シ無罪ト言渡シタルハ不當ナリト云ハサルヲ得何トナレハ明治五年第二十八號布告第五則ト明治五年第百八十二號布告ニ照スハ之ヲ罰金ニキ刑若アルヲ以テ刑法第五條ニ照シ處斷スヘキニ規則ニ正條ナキ處ヲ以テ無罪ノ判決ヲ爲シタルハナリ因テ治罪法第四百十條第十項ニ從ヒ上告スト云フニ在リ

對手人被告伊太郎ハ上告ノ趣旨ニ於ケル其効ナキ旨ヲ答辯セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ之ヲ審檢スルニ

明治五年第二十八號公布銃砲取締規則第五則ニ(免許ノ銃類和銃四文目八分五以下各國商標銃但云々右微銃所持ノ者ハ其姓名及數等詳細附記シ其管屬へ届出其銃ヨリ内務省へ差出可申萬一云々)トアルニ因リ和銃四文目八分五以下ノモノヲ所持スルニ於テハ管轄廳へ届出サルヘカラサルヤ勿論ナリトス若シ其届出ヲ爲サズ尙ニ所持スル者ハ明治五年第二十八號布告(銃砲取締規則ニ違ヒ銃砲彈藥類ヲ密ニ所持シ且取扱候前ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五拾錢ノ過料申付候事)トアルニ照シ處分スヘキモノナルニ原裁判官ハ被告カ堂刃五分ノ和銃

銃電燈ヲ私カニ所持シ居タル事實ヲ認メナカラ前掲ノ如ク無罪ト言渡シタルハ原檢察官上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ則リ原裁判官電ノ内上告ニ係ル部分ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ言渡ヲ爲ス左ノ如シ

濱田伊太郎

原裁判官カ認メタル被告カ私カニ和銃電燈ヲ所持シ居タルハ明治五年第二十八號公布銃砲取締規則第五則ニ違背シタル者ニ付明治五年第二十八號公布及ヒ明治十四年第七拾二號公布第五條ニ照シ和銃電燈取上ケ五拾錢ノ過料ニ處スル者也

明治廿二年二月廿八日

車稅規則

● 參照

○ 同指令

八二五 車稅規則取扱心得書ノ件(兵庫縣)同 明治二十二年二月九日

第一條 客年十一月大藏省第六二五三號訓示車稅規則取扱心得書第九項ニ車類ヲ變更シ税金ニ増減ヲ生シタルトキハ該期ヨリ其増減ニ係ル金額ヲ徵收スヘキ筋ニ相成居リ之ヲ例スルニ二月某日人力車一人乗ヲ二人乗トシ荷積馬車ヲ馬車一匹立ニ爲スモノ、如キハ既ニ原車ニ對シテハ稼續ノ部分ニ於テ税金徵收済ナルヲ以テ更ニ増減ニ係ル五十錢ヲ追徵スヘキ筋ニ可有之付テハ稅吏調理ニ於ケル追徵ノ税金ハ隨時收入ノ部ニ加ヘ備考ニ其事由ヲ詳記シ置可候哉

第二條 前條ニ反シ車類ヲ變更若クハ修繕シ税金ノ減額ヲ來シタルトキハ該期ハ車籍簿帳ニ其事由ヲ記入スルニ止メ翌期ヨリ相當ノ税金ヲ徵收スヘキハ勿論付テハ税金調理ニ於テハ翌期へ稼續稅表備考面ヘ其事由ヲ記シ

シノ部

置クヘキ哉

第三條 車類ヲ修繕シ税金ニ差異ナキ者ハ更ニ檢印ヲ要セサルモ之ヲ變更シタルトキ又ハ修繕シ税金ニ差異ヲ生シタルトキハ更ニ檢印ヲ請ハシムルハ勿論其變更車ニシテ税金ノ差異ナキモノトイヘトモ車籍臺帳ニ其事由ヲ記シ變更ノ迹ヲ明ニシ税金關連ニ於テモ同上ノ心得ヲ以テスヘキ歟

大藏省指令 明治二十一年二月二十一日
同ノ通

但シ第一條稅表ノ備考ハ菓子增稅ノ例ニ準シ記載スヘシ第二條第三條ハ備考ヲ記スニ及ハス

八二六 車輛檢印ノ件(奈良縣)伺 明治二十三年一月十四日

縣下吉野郡ノ山間ニ於テ木材運搬ノ爲メ松木ノ小口ヲ挽切車輪ト爲シ樫ノ丸木ヲ軸トナシタルモノヲ作リ山林伐採ノ際使用スルモノ數多アリ其形狀用途固ヨリ車輛ニ外ナラズト雖モ木材ヲ伐採スルニ當リ臨時ニ之ヲ製シ一時ノ便ヲ充テシ後ハ其儘山間ニ抛棄スルモノニシテ且之ヲ使用スル峻険險路ニ於テ粗雜ノ取扱ヲ爲スモノナレハ一週日ヲ出テスシテ破壞シ甚キハ一日ヲ保タサルモノモアルニヨリ車稅規則ニ據リ新調ノ都度其車體ニ檢印ヲ受クルコトハ到底行ハレ難キ事實ニ有之故ニ該車ニ限リ檢印押捺ノ體札ヲ下付シ使用ノ都度必ス之ヲ携帶セシメ候續取扱度候條特ニ御開置相成度

大藏省指令 明治二十三年一月二十四日
申出ノ通取扱ヒ苦シカラズ

八二七 船車携帶並ニ船ノ流失ニ係ル件(滋賀縣收稅長)問合 明治二十三年二月七日

船車ヲ携帶セラレ或ハ流失船ヲ届出タルモノハ是迄未納車稅ハ登記致來候得共携帶或ハ流失等ノ船車ニ對シ課

七四ノ二則

稅スルハ其當ヲ得サル様被存候就テハ自今右等ノ者ハ届出ノ時々船車籍ヲ削除シ他日發願ノ時ニ於テ更ニ課稅ノ手續ヲ爲シ可然哉

前項果シテ然リトセハ從來未納車稅ニ登記シアル分ハ携帶又ハ流失届出ノ當時ニ溯リ此際渾テ船車籍ヲ削除シ可然哉

大藏省主稅局回答 明治二十三年二月十九日
御見込ノ通ニテ可然存候

○判決例

八二八 明治廿一年乙第四〇九號

高知縣平民人力車營業 小 申 友 次

車稅規則第三則ニ規定スルカ如ク車類ニ受ケタル檢印ハ其届出ヲ爲シタル車ノミニ對シ効ヲ有スルモノニシテ其檢印ハ他ニ濫用シ得ヘキモノニアラス故ニ甲車ニ受ケタル檢印ヲ私擅ニ切取リ乙車ニ釘付等ヲ爲シ使用スルカ如キ即チ甲車ニ付キ車稅ナシト雖モ乙車ニ付テハ無届使用ノ責タル免ルヘキハサルハ勿論車稅ナシトハ決テ云フヲ得サルモノトス今原判文ニ就キ其認定シタル事實ニ依レハ被告於テ義ニ二人乗人力車ヲ關聯シ檢印ヲ受ケ使用中其車ノ脚ニ報所ヲ生シ使用シ能ハサルニ違リタルヲ以テ其車ニ受ケタル檢印ヲ切取リ他ノ廢車ニ釘付シテ使用シタルヤ明カナリ然ラハ則チ其釘付シテ使用シタル所爲ハ車稅規則第六則ノ科罰タル免ルヘキハサルヤ前辯明ニ依リ明瞭ナルニ原裁判茲ニ出テス無罪ヲ言渡シタルハ上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル不注ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原由アルモノト判定ス

以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ注リ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スルヘキ如シ

小 申 友 次

原裁判官ヲ認ムル處ニ依レハ被告友次ニ於テ無届ノ二人乗人力車ヲ明治二十一年二月ヨリ同年三月五日迄使用

シノ部

四百二十一

七四ノ二則

レタルヤ明瞭ナリトス
 之ヲ法律ニ照スニ刑法第五條ニ基キ車税規則第一則第四項同第二則同第三則同第四則同第六則及明治十四年第七十二號公布第三條ニ照シ脱税爲常關ノ五倍罰金ニ處スヘキモノニ該當ス
 因テ被告友次ヲ罰金五圓ニ處スルモノ也
 明治二十一年七月五日

八二九 明治廿一年乙第五百四號

廣島縣平民人力車營業 石井千代治
 抑モ車税規則第一則ニ掲ケアル車類ヲ新關シタル時ハ同第二則ニ從ヒ其都府區戶長ニ届出檢印ヲ申交ケサルヘカラサルハ勿論ナレモ已ニ檢印ヲ受ケタル車類ヲ賣買スルニ際シテハ車籍轉移ノ届出ヲ爲サレハ帳簿上依然トシテ賣主ノ名義ヲ存シ納税ノ義務モ尙ハ賣主ニアルハ其買主於テ假令ヒ之ヲ使用若クハ營業スルモ脱税ニ係ラザレハ無届無檢印ノ車類ヲ使用又ハ營業シ脱税ヲ謀リタルモノト云フヲ得ス然レモ該車類タルヤ既ニ破解ニ屬シ其檢印ヲ消除シ使用スヘカラサルモノヲ賣買シ買主ニ於テ其正當ナル手續ヲ爲サス無届無檢印ノ儘使用又ハ營業セル場合ニ在テハ買主即チ該車ヲ使用シ居タル者脱税ノ責ニ任セサルヘカラサルモノトス今原判文ヲ檢スルニ被告ハ明治廿一年八月廿四日中松原喜代助ヨリ一人乘人力車一輛ヲ買入レ同月中綿木幸七郎ヘ賣渡ス迄無届ニテ云々トノミアリテ松原喜代助ヨリ買入タル該車ハ無届無檢印ノ車類ナリシヤ將タ檢印アル車類ナルヤヲ明示シアラサルニ依リ被告ニ對シ車税規則第六則ヲ適用處斷シタルハ果シテ相當ナルヤ否ヲ釐查スルニ由ナキモノトス
 明治二十一年九月二十日

八三〇 明治廿二年乙第三百十二號

香川縣平民鐵治職 岡田與吉

七四ノ
 三六則ノ

七四ノ
 二六則ノ

大審院ニ於テ治罪法第四百廿五條ノ式ヲ履行シ本案事件ヲ審按スルニ級キニ明治十三年大藏省シ第三十五號達ヲ以テ自轉車營業者ニ對シ人力車同機課税シタルモ其後明治十六年同省第五十四號達ニ依リ前シ第三十五號達ハ廢止セラレタルナリ左レハ車税規則第一則諸車類例記中ニ自轉車ノ項目ヲ掲ケアラサル限リハ假令ヒ自轉車ヲ無届營業スルモ車税規則ノ支配外ニ屬スルモノト爲サレハカラス故ニ本案被告カ所爲ニ對シテハ法律上罰スヘキ正條ナキモノニレテ無罪ヲ言渡サレハカラスルニ原裁判茲ニ出テス車税規則第六則ニ依リ罰金ヲ科シタルハ本院檢察長非常上告趣旨ノ如ク所謂法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタル不注ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百三十五條ニ從ヒ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ヌ左ノ如レ
 岡田與吉
 右與吉ニ對スル事實ノ理由ハ原判文上ニ認ルル所ニ據リ其所爲ハ法律上罰スヘキ正條ナキモノニ付治罪法第三百五十八條ニ基キ無罪ヲ言渡スモノナリ
 明治廿二年五月十三日

(一五七)新舊公債證書發行條例 (本例中ニ改正則除アルモ金庫公債證書發行條例中ニ掲ケタルハ略ス)

(一五八)集會條例 (集會社法制定ニ付本例ハ廢止ニ屬ス)

參照

關係法令

八三一 內閣訓令 明治二十二年一月二十四日
 各官廳
 凡ソ官吏タル者ハ自令其職務外ト雖モ公眾ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演說シ又ハ之ヲ叙述スルコトヲ得但各長官ノ監督ニ從屬スヘシ

シノ部

七五 一四九

七六 一六八

法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

○勅令

八三二 法律第三十一號 明治二十二年十二月十四日

七六ノ
一
七六ノ
一
朕集會條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第三十一號 (官報十二月十六日)

明治十三年四月布告第十二號集會條例中左ノ通改正ス
第七條 政治ニ關スル事項ヲ討論論議スル集會ニ現役及召集中ニ係ル豫備後備ノ陸海軍軍人警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業者工藝ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

○判決例

八三三 明治廿一年乙第五百四十七號

長崎縣士族 南部 重 遠

七六ノ
一
一
集會條例第十六條第二項ニ學術會ニシテ政治ニ關スル事項ヲ討論論議スルコトアルハ云々ノ注文アルヲ以テ學術ノ討論ヲ爲スニ當リ初クモ政治ニ關スル事項ニ涉ルモノニ在テハ集會條例第十條ノ制裁ヲ免カル、ヲ得ス本案原裁判所ノ認メタル事實ニ據ルニ被告ハ學術演說ヲ爲スニ當リ佛國ニ於テ政略其度ヲ誤リシ所以ヲ論述シ而シテ斯ノ如キ掛念ハ我國否亞西亞朝鮮ニハ無之歟ト論述シタルヤ明白ニシテ則其演說タル政談ニ涉ルモノナリトス何トナレハ外國ノ政治ヲ説キ來テ我國ニ論及スルモノニ在テハ政治ニ關スル討論ト云フヘキモノナレハナリ然レハ原裁判所其事實ヲ認メ之レニ集會條例第十條ヲ適用處斷シタルハ正當ニシテ違律ノ錯誤ニアラス又タ證據ノ採擇ハ原裁判官ニ任從シタルノ職權ニシテ其證據上ノ成分ニ對シテハ上告ヲ爲スヲ得サルヲ以テ司法警察官ノ筆記中被告人ノ承認セサル條件アリトモ之レヲ以テ上告ノ原由ト爲スヲ得ス因テ上告ノ旨趣ハ治罪法第四百十條各項ノ規定ニ適當セサルモノトス

明治二十一年十月廿九日

八三四 明治廿二年乙第四百五十四號

三重縣平民著述業 内山立三郎

外二名

七六ノ
一
一
凡ソ非政談演說ヲ爲スニ當リ政談演說ニ關スル事項ヲ書面ニ記載シ之レヲ朗讀シテ聽衆ニ聞知セシムル如キハ演說ヲ爲スト異ラサルヲ以テ其名稱ノ如何ヲ問ハス政談演說ヲ爲ス者ト論斷セサルヲ得ス而シテ原判文ニ掲載シタル所ニ據ルニ被告内山立三郎ハ其說ク所ハ政治ニ涉ラサルヲ得ス云々然レハ政談演說ノ禁止ヲ受ケタルヲ以テ此席ニテ公ニ述フルコトヲ得ス然レハ近來津方ニ於テ一ノ團體ヲ起サントシテ其主義等ヲ起草セリト說出シテ之レヲ朗讀シタルモノニシテ其政談ニ涉ル事項ヲ記載シタル文章ト自ラ認メテ之レヲ朗讀シタルノ事實明カニシテ其文章中如何ナル字句ヲ政談ニ涉ルモノトマテ詳示セサルモ被告内山立三郎ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ論議シタル書面ヲ朗讀シタルモノナルノ事實明白ナルヲ以テ事實理由ヲ缺キタル裁判ナリト云フヲ得ス

明治廿二年十一月五日

(一五九) 酒造稅則 明治二十二年九月二十八日

法律第二十四號

朕北海道ノ内從來酒造稅則ヲ施行セサル地方ニ之ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第二十四號 (官報 九月三十日)

北海道ノ内明治十三年九月第四十號布告酒造稅則ヲ施行セサル地方ニ本年十月一日ヨリ本則

シノ部

ヲ施行ス但其稅率ハ當分左ノ通定ム

酒造免許稅

酒造場一箇所ニ付

金貳拾圓

酒類造石稅

一類一石ニ付

金貳圓

二類一石ニ付

金三圓

三類一石ニ付

金四圓

稅則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

○

(一六〇)酒造稅則中改正 明治二十三年七月八日
法律第四十九號

股酒造稅則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第四十九號 (宣稱 七月九日)

明治十三年九月第四十號布告酒造稅則中左ノ通改正シ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第一條ニ左ノ一項ヲ加フ

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ納稅保證ノ爲管廳ニ於テ相當ト認ムル所ノ保證物ヲ差出

スカ若ハ實進ヲ有スル保證人ヲ立ツルニアラサレハ前項ノ免許ヲ與ヘサルヘシ

一 第二十九條第三十條第三十一條第三十二條第三十三條ノ處罰ヲ受ケ滿三年ヲ經過セ

サル者

七七

四八三五ノ一
四五六七七八

四八三六

二 酒類造石稅ノ滯納處分ヲ受ケ滿三年ヲ經過セサル者

三 所有不動産ノ價額造石稅四分ノ一ニ滿タサル者

保證物ノ種類及保證人ニ要スル條件ハ大藏大臣之ヲ定ム

第九條 造石稅ハ左ノ四期ニ納ムヘシ

第一期 四月十五日限

十月一日ヨリ一月三十一日迄検査済石數ニ係ル稅額ノ半數

第二期 八月十五日限

二月一日ヨリ五月三十一日迄検査済石數ニ係ル稅額ノ半數

第三期 十一月十五日限

六月一日ヨリ九月三十日迄検査済石數ニ係ル稅額ノ全數並ニ第一期第二期ニ係ル殘納

額ノ半數

第四期 一月十五日限

前納額ノ殘數

第十一條 營業免許後不動産ヲ賣渡讓渡及抵當トシ其現在スル價額造石稅四分ノ一ニ滿タ

サル場合ニ於テハ第一條第二項ニ依リ更ニ保證物ヲ差出スカ若ハ保證人ヲ立テシムヘ

シ

前項ノ保證物ヲ差出サス若ハ保證人ヲ立サルトキハ第九條ノ納期ニ拘ハラヌ検査済酒類

ニ係ル造石稅ヲ納ムシムヘシ

四八三五ノ一
一二條

シノ部

第八三五ノ一七
第八三六
第八三五ノ一六

第十六條 検査酒類納税以前ニ於テ腐敗シ若ハ天災其他避クヘカラサル事故ニ依リ廢棄
ニ屬シタルトキハ直ニ管廳ニ申出テ検査ヲ受ケ其造石税ノ免除ヲ請フコトヲ得
第十七條 前條検査ノ上再ヒ酒類ニ製成スル者ハ其石數ニ應シ造石税ヲ納ムヘシ
第二十條 第三項ヲ削除ス

●參照

○關係法令

八三五 大藏省令第二十號 明治二十三年
八月二十日

明治十三年九月第四十號布告酒造税則施行細則左ノ通相定メ明治二十三年十月一日
ヨリ施行ス

九四四
九四一

但明治十七年八月第六十四號當省達及明治二十二年十月第十四號省令ハ同日ヨリ
廢止ス

酒造税則施行細則

第一條 税則第一條一項ニ從ヒ製造免許ヲ受ケントスルモノハ其願書ニ造石見込高
ヲ記シ其酒造場ノ倉庫又ハ建物ノ棟數トニ拘ハラス總テ其一區域ヲ以テ一箇所ト
シ之ニ關スル地所建物ノ坪數ヲ圖面ニ製シ願書ニ添ヘ管廳ニ差出スヘシ但一區域
外ノ倉庫建物ト雖トモ検査酒類又ハ酒造用諸器械ヲ藏置スルニ止マルモノハ
管廳ノ許可ヲ受ケ酒造場ノ附屬ト爲スコトヲ得

税則第一條二項ニ依リ保證物又ハ保證人ヲ要スルモノハ願出ノ際保證物又ハ保證
人ヲ定メ認可ヲ受ケヘシ
免許ヲ受ケタル後造石見込高ヲ増加シ又ハ土地建物等ニ異動ヲ生シタルトキハ其
時々届出ヘシ
免許ヲ受ケタル者ニシテ翌期ニ引續キ營業ヲ爲サントスルモノハ其年十月一日迄
ニ願書ニ鑑札ヲ添ヘ管廳ニ差出シ免許ノ證印ヲ受ケヘシ
税則第一條二項二ノ年數ハ處罰ハ宣告ノ日滞納處分ハ完結ノ日ヨリ免許願出ノ
日迄滿二年トス
第二條 酒造場ヲ移轉セントスルトキハ免許鑑札ヲ添ヘ管廳ニ申出鑑札ノ書換ヲ請
フヘシ
他ノ管轄地ヘ移轉セントスルトキハ免許鑑札ヲ添ヘ管廳ニ申出添書ヲ受ケ之ヲ移
轉地ノ管廳ニ差出シ鑑札ノ書換ヲ請フヘシ
第三條 免許鑑札ヲ買賣讓與セントスルトキハ雙方連署ノ書面ニ鑑札ヲ添ヘ管廳ニ
申出鑑札ノ書換ヲ請フヘシ若シ他管廳ニ交渉スルトキハ前條ノ手續ニ依ルヘシ
第四條 税則第一條二項ニ依リ徵スヘキ保證物ノ種類左ノ如シ
有利公債證書
大藏省證券
日本銀行株券

シノ部

正金銀行株券

國立銀行株券

政府ノ保護ヲ受クル會社株券債券
府縣郡市町村ノ公債證券

土地建物

第五條 前條保證物ノ保證價格ハ左ノ割合ニ依テ定ム

一 公債證券ハ明治二十三年勅令第四號第三條ノ價格ニ依ル

二 大藏省證券ハ其券面ノ金額ニ依ル

三 銀行會社株券債券府縣郡市町村ノ公債證券ハ價格十分ノ八

四 土地建物ハ價格十分ノ六

第六條 稅則第一條二項三ノ所有不動産ノ價格及ヒ保證物トシテ差出スヘキ株券債券公債證券不動産ノ價格ハ各地現賣買ノ價格ヲ標準トシテ地方長官之ヲ定ム

前項ニ依リ定メタル價格ニ付異議アルトキハ地方廳及ヒ其所有者ヨリ各二名ノ評

價人ヲ撰ミ價格ヲ評定セシメ其評定價格ノ平均ニ依リ之ヲ定ム

第七條 稅則第一條二項ニ依リ立ル所ノ保證人ハ不動産ヲ有シ又ハ所得稅ヲ納ムル

丁年以上ノ男子ニシテ地方長官ニ於テ相當ト認ムルモノニ限ル

第八條 保證物ハ土地建物ヲ除クノ外管應ニ於テ之ヲ保管スヘシ

第九條 當初ノ造石見込高ニ依リ其營業ヲ免許シタルノ後更ニ増石スルトキハ之ニ

相當スル保證物ヲ徵シ又ハ保證人ヲ立テシムヘシ

第十條 保證ヲ徵セスシテ營業ヲ許可シタルモノ其造石數ヲ増加シタルタメ其所有

不動産價格造石稅四分ノ一ヲ下リタルトキハ保證物ヲ徵シ又ハ保證人ヲ立テシム

ヘシ

第十一條 稅則第十一條營業免許後不動産ヲ賣渡讓渡及抵當ト爲ス場合ニ於テハ其

不動産ノ位置番號名稱種類段別又ハ坪數及土地臺帳記入ノ地價地租ヲ詳記シテ管

廳ニ届出ツヘシ

第十二條 酒造用容器ハ左ニ掲クル方法ニ依リ其容積ヲ量リ所轄租稅検査員派出所

ニ申出検査ヲ受クヘシ但容器ニハ番號烙印及石數ノ記載ヲ受クヘシ

酒造桶類丈量法

口徑口頭ヨリ一寸第一胴徑口徑ヨリ全深四分第二胴徑口底徑第三胴徑第二胴徑ヨ

ノ下リタル箇所第一胴徑ノ下リタル箇所第二胴徑ノ中央第三胴徑ノ全深四分

タル箇所底徑ノ箇所ハ何レモ内測リニテ縱橫 \oplus 圖ノ如ク度リ此縱橫徑ヲ和シ之ヲ

二ニテ除シ以テ定ム深サハ其酒桶ノ前後左右中心等執レモ底面ヨリ口徑迄ノ間ヲ

丈量シ之ヲ和シ五ニテ除シ以テ定ムヘシ

但尺度ハ執レモ曲尺ヲ用ヒ分位ニ止メ厘以下切捨ツヘシ

算則

(一) 第二胴徑以上ノ分

口徑ト第一胴徑ノ和ヲ自乘シ甲トス

シノ部

第一胴徑ト第二胴徑ノ和ヲ自乗シ乙トス
口徑ト第二胴徑ノ和ハ第一胴徑ヲ乘シ丙トス

甲乙ノ和ヨリ丙ヲ減シ殘數ニ深サ及〇、〇四〇三八四四乗率ノ一位ヲ石位
トシ丈母尺度ハ分
位ニ止メ尺位
ヲ一位トス
ヲ乘シ之ヲ四ニテ除シ其容量ヲ得ル

但石數ハ合位ニ止メ以下切捨ツヘシ

(二) 第二胴徑以下ノ分

第二胴徑ト第三胴徑ノ和ヲ自乗シ甲トス

第三胴徑ト底徑ノ和ヲ自乗シ乙トス

第二胴徑ト底徑ノ和ハ第三胴徑ヲ乘シ丙トス

甲乙ノ和ヨリ丙ヲ減シ殘數ニ深サ及〇、〇四〇三八四四ヲ乘シ之ヲ四ニテ
除シ其容量ヲ得ル

右(一)(二)ヲ合算シ滿量桶ノ石數ヲ得ル

第十三條 酒造用容器ヲ修繕シタルトキハ使用以前管廳ノ検査ヲ受クルモノトス

第十四條 甕類及胴張桶其他第十一條ノ丈量法及算則ニ依リ實量ヲ得難シト認ムル
モノハ便宜適實ノ方法ヲ以テ之ヲ測定スヘシ

第十五條 稅則第十條ノ検査ヲ受クヘキ酒類ハ其容器ノ口頭ヨリ一寸ヲ減シ容レ置
クヘシ其入實容器測定ノ全數ニ充タル端數ハ左ノ算則ニ依ルヘシ
入實第一胴徑ヨリ以上ニアルトキハ其容積面ノ直徑ヲ底徑ト假定スルニハ口徑ヨ

リ第一胴徑ヲ減シ空積ノ深サヲ乘シ四倍シ全深
ニテ除シ之ヲ口徑ヨリ減シテ假定ノ底徑トス

假定ノ底徑ト口徑トノ和ヲ自乗シ甲トス

假定ノ底徑ト口徑トヲ相乘シ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ空積ノ深サ及〇、〇四〇三八四四ヲ乘シ得ル數ヲ桶面記載ノ石
數ヨリ減シ現在ノ石數ヲ得ル

入實第一胴徑ヨリ以下ニアルトキハ其容積面ノ直徑ヲ口徑ト假定スルニハ第一胴
徑ヨリ第二胴徑ヲ減シ之ニ容積面ヨリ第二胴徑マテノ入實深ヲ乘
シ四倍シ全深ニテ除シタルモノニ第二胴徑ヲ加ヘ假定ノ口徑トス

假定ノ口徑ト第二胴徑トノ和ヲ自乗シ甲トス

假定ノ口徑ト第二胴徑トヲ相乘シ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ容積面ヨリ第二胴徑マテノ入實深サ及〇、〇四〇三八四四ヲ乘
シタルモノニ第二胴徑以下ノ石數ヲ加ヘ現在ノ石數ヲ得ル

入實第三胴徑以上若クハ以下ニアルトキハ前項ニ準據スヘシ

第十六條 稅則第十七條ニ依リ酒類ヲ變製セントスルトキハ更ニ其變製スヘキ酒類
ノ種目及石數ヲ届出テ製成ノ上尙検査ヲ受クルモノトス

第十七條 検査未済ノ酒類腐敗其他ノ事故ニ依リ減量若クハ廢棄ニ屬シタルトキハ
直ニ所轄租稅検査員派出所ニ届出検査ヲ受クヘシ

第十八條 稅則第十八條造石稅免除酒類ハ一期中製造石高ヲ翌期十月中ニ届出ツヘ
シ

第十九條 検査済酒類及古酒買入酒等ヲ粕漉ニスルトキハ其時々届出検査ヲ受ケ尙
製成ノ上検査ヲ受クルモノトス但此ノ場合ニ於テ増石スルモノハ其石數ニ課税ス
ルモノトス

第二十條 濁酒白酒ハ醗ノ儘其他ノ酒類ハ製成ノ上(洋引ヲ要スルモ)造石數ノ検査
ヲ受クヘシ(二十三年九月大藏省令
第二十三號ヲ以テ改正)

第二十一條 造石税納期以前免許鑑札ヲ賣買讓與シ又ハ廢業スルモノ、検査済酒類
ニ係ル造石税ハ其節之ヲ完納スヘシ

第二十二條 營業人ハ左ノ帳簿ヲ調製スヘシ
酒造原品受拂帳
仕込帳
酒粕目方帳
蒸溜帳
變製酒類原品受拂帳
酒類倉出帳
酒類賣上帳
酒類買入帳

第二十三條 此細則ニ關スル帳簿記入方其他書式等ノ手續ハ地方長官之ヲ定ム
附則

第二十四條 第十二條ハ此細則實施以後新調修繕ニ係ル分ヨリ施行ス
第二十五條 第十五條ノ場合ニ於テ舊丈量ノ容器ニ係ルモノハ左ノ算則ニ依ルヘ
シ

入實胴徑ヨリ以上ニアルトキハ其容積面ノ直徑ヲ底徑ト假定ス此底徑ヲ求ムルニ
減シ空積ノ深サヲ乘シニ倍シ全深ニテ除
シ之ヲ口徑ヨリ減シテ假定ノ底徑トス
假定ノ底徑ト口徑トノ和ヲ自乘シ甲トス
假定ノ底徑ト口徑トヲ相乘シテ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ空積ノ深サ及ヒ〇、〇四〇三八四乘率ノ一位ヲ石位トシ丈量
尺度ハ分位ニ止メ尺位ヲ一
位トス以テ乘シ得ル數ヲ桶面記載ノ石數ヨリ減シ現在ノ石數ヲ得ル
下準之
入實胴徑ヨリ以下ニアルトキハ其容積面ノ直徑ヲ口徑ト假定ス此口徑ヲ求ムルニ
モノハ其胴徑ヲ假定ノ口徑トシ入實胴徑ニ倍シテ除シ之レニ底徑ヲ加ヘテ假定ノ口徑トス
レ現在ノ深サヲ乘シニ倍シ全深ニテ除シ之レニ底徑ヲ加ヘテ假定ノ口徑トス
假定ノ口徑ト底徑トノ和ヲ自乘シ甲トス
假定ノ口徑ト底徑トヲ相乘シテ乙トス

右甲ヨリ乙ヲ減シ現在ノ深サ及ヒ〇、〇四〇三八四ヲ乘シ現在ノ石數ヲ得ル
〔参照〕明治十七年八月(三十日)第六十四號大藏省達ハ酒造税則取扱心得書ナリ
明治二十二年十月(二十五日)第十四號大藏省令ハ酒造税則施行細則ナリ

〇伺指令
八三六 酒造税則中改正ノ件(廣島縣收稅長)問合 明治二十三年
七月二十五日

明治二十三年七月八日法律第四十九號ヲ以テ酒造稅則中改正相成候ニ付取扱心得書御訓令相成候儘トハ存候得共先以テ左ノ各項及御問合候也

- 一 稅則第九條ノ納期ハ二十三年度即二十三年十月一日以後釀造ニ係ル酒類ノ納期ニシテ二十二年度ノ造石稅ニハ適用セサル儀ト心得可然哉
 - 二 同第十六條ニ檢査酒類納稅以前ニ於テ腐敗若クハ云々トアリ右納稅以前トハ一期中製造總石數ノ稅金完納期即一月十五日以前ヲ指シタルモノト心得可然哉
- 大藏省主稅局回答 明治二十三年 八月一日
兩條トモ御見込ノ通ニテ可然候存候

○判決例

八三七 明治二十一年乙第二二三號

京都府平民酒造營業人

宮下忠次郎

酒造稅則第三十八條ニ所謂營業者トハ免許ヲ得タル營業者ヲ指稱スルモノナルヲ以テ免許ヲ得タル營業者タル以上ハ勿論ナルト否ト問ハス無論營業者ト稱シ得ヘキモノナリ故ニ被告ハ勿論者ナルニモセヨ免許ヲ得タル營業者ナル以上ハ該條ニ所謂營業者中ニ入ルヘキモノナレハ其雇人ニ於テ酒造稅則ヲ犯シタルハ被告人ニ於テ雇人ノ爲シタル所爲ヲ知ラサルニモセヨ其賣タル免ルニ能ハサルニ付被告ヲ所謂シタルハ相當ニシテ決テ不法ト云フヲ得ヌ况ニ酒造稅則第三十七條ニ規定スルカ如ク勿論者ト雖モ刑法ノ宥恕減輕ヲ得サルモノナルニ於テオヤ

明治二十一年四月二十一日

八三八 明治二十一年乙第二二〇〇號

岡山縣平民酒造營業人

赤木城造

原告文ヲ閱スルニ被告ハ酒造營業人ニシテ雇人即チ社民高田利一郎ハ明治二十一年二月五日付第十七號牌摺ノ爲メ掛樽ノ際清酒ノ滓一石弱ヲ無届ノ儘混和シ云々トアリ由是觀之ハ被告事件ノ事實ハ酒滓ヲ摺ニ混入シタルノミニシテ酒造ノ方法ヲ變更シタルモノニアラス即チ種目ヲ變換シ又ハ見込石數ニ増減等アルトクシテ止タ檢査未済ノ酒類ニ檢査既済ノ酒滓ヲ混和シタルノ所爲ニ過キサルモノトス然ラハ則チ酒造稅則第十三條ニ依リ總石數ノ稅額ヲ納ムルニ止マルモノニシテ之ヲ稅則第二十六條但書ニ違背シタルモノト爲スヲ得ヌ何トナレハ稅則第二十六條但書ハ種目變換見込石數ノ増減等ヲ指シキリ規定シタルモノニシテ酒造ノ混同等ヲ指シ出ヘキノ規定ニアラサレハナリ故ニ原告所爲ニ於テ被告所爲ハ仕込第十七號牌摺ノ際清酒ノ滓ヲ混和シタルモノナリト認メナカラ之ヲ稅則第二十六條但書ニ違犯シタルモノトシ同則第三十五條ヲ適用シタルハ疑律ニ錯誤アル裁判ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原告判ノ疑律ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決スルノ如シ

赤木城造

原告判所カ認メタル事實ニ依リ被告カ所爲ハ法律上罪トシ罰スヘキモノニ非サルヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ則リ無罪ヲ宣渡スモノ也

明治二十一年四月十四日

八三九 明治二十二年乙第二十號

長崎縣酒造營業人

高石爲七

酒造稅則第三十二條ノ罪タルヲ免許ヲ受ケタル酒造場内ニ於テ製造シタル酒類ヲ隠蔽シタル場合ニ制裁スルノ正條タレハ右第三十二條ノ罪アリト判定センニハ宜ク其隱蔽シタル酒類タル何レノ場所ニ於テ製造シタルモノナルヤノ事實理由ハ必ス明示ナサハルヲ得ヌ其所以ニ於ケル若シ免許ヲ得タル酒造場外ニ於テ製造シタルヲ隠蔽スルカ如キハ恰モ無免許者カ酒類ヲ密造隠蔽シタルト同ク單ニ同第二十九條ノ一罪ニ止リ隠蔽ノ所爲ハ問フヘキモ

ノニアラサレハナリ是酒造ヲ爲シ得ル權タルヤ免許場内ニ限リ場外ニ於テハ其酒造ノ權ナキ酒造稅則第一條ニ
 酒造場一箇所毎々トノ明文ニ依リ判然タリトス今原判文ヲ閱スルニ被告ニ於テ應又ハ腕等ヲ布施菊次外二名ノ
 既又ハ倉庫等ニ隠蔽シタルノ事實ハ判然タリト雖其隠蔽酒タル果テ被告カ免許ヲ得タル酒造場内ニ於テ製造シ
 タルモノニ係ルカ否其點ニ至テハ毫モ分明ナラサルハ理由不備ノ裁判ナリト云ハサルヲ得又酒造稅則第二十條
 第二項ノ違犯者アリトスルニハ其許可ヲ得ス酒造場外ニ移シタル諸器械タル同條第一項ニ基キ届出タルモノニシ
 テ且ツ造石稅ノ未タ完納以前タルノ事實アルヲ要スルニ付其事實ヲ明示シタル上ニアラサレハ未以テ同條第二項
 ノ違犯者ト爲シ同第三十五條第二項ニ照シ罰スルヲ得サルニ原判文ニハ單ニ(又應八石一斗三升五合ヲ三十九
 號桶壹個ニ容レ布施菊次カ既ノ隠蔽シ云々前項三十九號桶ハ管轄ノ許可ヲ得シテ酒造場外ニ移シタルモノ
 ナリトノミ明示シテ此所爲ヲ右第三十五條第二項ニ照シ罰スルハ不法ナリトス若シ被告カ酒造場外ニ
 移シタル桶タル右第二十條第一項ニ基キ未タ届出テサルモノトセンカ個ハ隠蔽罪中ニ包含スヘキモノニシテ別ニ
 一罪トシ間接スルヲ得サルヤ本院檢事カ附帶上告論旨ノ如クナリトス然ルニ原裁判ハ右等必要ノ事實理由ヲ明
 示シアルヲナケレハ疑律ノ當否ヲ鑑定スルニ由ナク破毀スヘキモノト認ムルヲ以テ上告論旨ニ對シテハ別ニ辯明
 ヲ與ヘス

以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ注リ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ受ケシメン爲メ
 佐賀縣裁判所ニ移スモノ也

明治二十二年一月三十一日

八四〇 明治二十二年乙第五十五號

佐賀縣平民酒造營業

井崎 作一

外一名

押組合營業ノ性質タルヤ特リ利益ノミ共ニスルモノニアラス其因テ生スル處ノ損害ヲモ尚ホ共ニセサルヲ得サル
 ヤ一般ノ通理ナルヲ以テ從テ酒造稅則違犯ノ場合モ假令一方ニ於テ之ヲ知ラサルニモセヨ之カ罰則タル共ニ免ル

三七七ノ
三二條

一ヲ得サルモノトス今原判文ニ就キ其認メタル事實ニ依レハ被告兩名ニ於テ組合ヲ以テ酒造營業中伊吉ハ酒造一
 切ノ事ヲ作一ニ委任シアリタルニ作一已ニ酒造場隱蔽シタルヤ明白ナレハ其責タル伊吉ニ於テモ尚ホ免ル一ヲ
 得サルハ勿論然ニ委任中ニ係ル所爲ナルヲ以テ假令其隱蔽ノ一ハ伊吉ニ於テ知セサルモ共ニ其責罰ヲ負フヘキ
 當然ナリトス又刑ナルモノハ分割セサルヲ以テ原則トナスモノナレハ二人以上ニテ共ニ罪ヲ犯セハ各別ニ其刑ヲ
 科スヘキモノナルヤ刑法第四百條ニ依リ明白タリ然レハ酒造稅則違犯ノ場合ニ於テモ二人以上ニテ爲シタル時ハ
 其刑ヲ分割有擔スヘキモノニアラサル一判然タリ因テ上告第三三條モ亦其効ナキモノトス

明治二十二年二月九日

八四一 明治二十二年乙第七十九號

熊本縣平民

島村 原七

上告論旨ノ如ク自家用料ノ爲メ製造シタル酒類ヲ他ノ物品ト交換スルガ又ハ勢力實ニ對シ交付スル等ノ場合ニ在
 テハ酒造稅則附則第七條ノ違犯者ナリト云ハサルヲ得サル勿論ナリト雖モ今原裁判言渡書ニ掲ケタル事實ニ依レ
 ハ上告論旨ノ如キ事實ハ認定セサル處ナルヲ以テ此論旨ハ採用スルニ由ナシ何トナレハ上告論旨ノ如キ事實ナル
 ヤ否ヤハ事實認定ノ上ナラザラハ之ヲ知ル一能ハサルモ本院ハ之カ隠蔽ヲナス處ニアラサレハナリ要スルニ上告論
 旨ハ事實ノ認定ト探証ノ當否トヲ非難スルニ外ナラサレハ上告ノ原由ナキモノト認定ス

明治二十二年二月廿八日

八四二 明治二十二年乙第四十四號

鳥取縣平民農業

谷 口カノ

大審院ニ於テ治罪法第四百廿五條ノ式ヲ履行シ之ヲ審按スルニ酒造稅則附則第一條ニ自家用料酒ヲ醸造セント欲

シノ部

四百三十九

七八ノ

七八ノ
七條

一三二
 ○條
 スルモノハ管轄廳ニ届出テ免許證札ヲ受クヘキ旨ヲ規定シアレハ若シ該條ニ違背シ自家用料酒ヲ醸造シタル場合
 ハ其酒類ノ何種タルヲ問ハズ同第十條ニ依リ處斷スヘキモノニシテ同第三條ハ免許證札ヲ所持スル者ニ對シ制裁
 スルノ法條ナリトス今原判文認ムル所ニ據ルニ被告ハ免許證札ヲ受ケスシテ酒ヲ醸造シ又之ヲ清酒ニ製シ尚ホ酒
 既ヲ醸造シタルモノニテ已ニ前第一條ニ違犯セシ上ハ單ニ同第十條ニ依リ處斷スルニ止メ其第三條違背ノ所爲ヲ
 別罪トナシ論斷スヘキモノニアラス然ルニ原裁判言渡ノ此ニ出テスシテ第一條第三條ニ違背スルモノトシ各自ニ
 科罰シタルハ上管轄廳ノ如ク不當ナルノミナラス假令第一條ニ違背シタル所爲ノ二期間ニ洗ルモ同第十條ニ於
 テ既稅高ヲ以テ罰金額ヲ算出セシテ單ニ三圓以上三十圓以下ニ處スルノ法條ナレハ即チ意思ノ繼續スルモノト
 ナシ連續犯罪ヲ以テ論シ一罪トナシ科罰スヘキモノナルニ二期ノ所爲即チ二罪トシ罰金ヲ併科シタルハ擬律錯誤
 ヲ免カレサル不法ノ裁判ナリトス因テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ裁判言渡ヲ爲
 ス左ノ如シ

谷口カノ

右「カノ」カ所爲ノ事實ハ原裁判所ノ認ムル處ニ據リ前説明ノ理由ナルヲ以テ酒造稅則改正附則第一條第十條ニ
 照シ罰金三圓ニ處シ清酒一斗酒既八升ハ變入ノ儘之ヲ沒收ス但シ酒粕其他還付ノ旨渡ハ原裁判ノ通り

明治二十二年二月九日

八四三 明治二十二年乙第九十三號

群馬縣平民農業

上原孫四郎

七八ノ一條

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ式ヲ履行シ之レヲ審被スルニ原判文上「被告ハ上原房吉宅ニ於テ大麥一斗
 餉二升ヲ以テ醸成シタル醗ニ麹品ヲ加ヘ宮下代五郎ノ携帶セシ器械ニテ蒸溜シシメ蒸溜酒上ノ分壹升下二升程ヲ
 得内覽會試勺現在上ハ自飲下ハ肥料等ニ爲シタルモノ云々」ト被告カ其住居セル一家外ニ於テ酒類ヲ製造シタル
 事實ヲ揭ケ而シテ「其所爲管轄廳ノ許可ヲ經ス自家用料酒類ヲ製造シタルモノ云々」ト被告カ製造シタル酒類ハ自家

一三二

用科ノ爲メニシテ管轄廳ノ許可ヲ得ス之レヲ製造シタルモノト認定シタルノ事實明白ナレハ單ニ法律語ヲ掲ケシニ
 過キストノ上管第一條管ハ其理由ナキモノトス又自家用料酒類トハ飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シ及ヒ其他ノ用ニ
 供スルモノヲ云フニアレハ清酒味淋醗酎白酒銘酒ノ類ノミニ限ラス粉クモ酒ト稱スヘキモノハ西洋酒ナリトモ總
 テ管轄廳ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之レヲ製造スルヲ得ス本案原裁判所カ認定シタル事實ハ蒸溜酒ヲ製造シタリ
 ト云フニアレハ其製法ノ和洋ヲ問ハズ酒造稅則附則ノ制裁ヲ免カレサルモノトス因テ上告第二第三ノ首題ハ共ニ
 其理ナキモノトス凡ソ刑ハ分割シテ科罰スヘキモノニアラサルノミナラス原裁判所カ認メタル事實ハ被告ハ大麥
 一斗餉二升ヲ以テ云々ト被告一己カ製造セシメタル所爲ヲ認メアレハ原告外十一人ヲ集合一休トシタリト論旨
 ハ判文ノ誤解ニ歸スルモノトス且ツ十一人云々ハ人名ノ累記ニシテ而シテ其原告外十一人云々ハ製造方ヲ依頼シ
 タル手續ヲ掲ケタルニ過キサレハ其略記ハ本按事件ニ影響ナキモノトス因テ上告第四點モ相立タヌ又治罪法第四
 百十條第四項ノ後段ニ法律ニ於テ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之レヲ認
 可セサル時トアルヲ以テ檢察官ニ於テ被告事件ノ証憑トシテ公廷ニ提供シタル關書等ノ關聯ヲ認メタル場合ノ如
 キ法律ニ於テ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルモノニ在テハ異議ノ申立ヲ爲シ其認可ナカリシ時ニアラサレハ之レ
 ヲ指シ上告ノ理由ト爲ヌヲ得ヌ乃チ被告ハ異議ノ申立ヲ爲シタルニアラサレハ上告第五ノ前段ハ其理由ナシトス
 又酒類ノ鑑定ヲ爲スト否トハ原裁判官職權内ノ處分ナレハ是亦上告ノ理由ト爲ヌヲ得ヌ因テ其後段ノ論旨モ亦相
 立タサルモノトス

明治二十二年三月廿三日

八四四 明治二十二年乙第八十三號

長崎縣平民酒造營業人

辻川長平

シノ部

四百四十一

七七八ノ
二九條以下

治罪法第三百三十三條ニ(裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ云々)トアルハ單ニ其故障タル期限内ノモノナルヤ又ハ期限ヲ經過スルモ正當ノ事由ニ出テタルモノナルヤ否ヲ審査シ而テ其受理スヘキ故障ナルヤ否何ヲ判決スヘキニ止リ被告事件ノ事實如何ヲ審査シテ受理スヘキ故障ナルヤ否又ハ故障申立ノ趣旨如何ニ因テ之ヲ判決スヘキノ精神ニハアラサルナリ如何トナレハ大庭裁判ヲ受ケタルモノニ對シ故障ヲ醉ス所以ノモノハ一時失フタル辯護ノ權ヲ得セシムルニ在ルヲ以テ故障ヲ受理シ對審ヲ爲シタル上ニアラサルヨリハ其主タル辯護ノ權ヲ得ルヲ能ハサルヤ勿論ナレハナリ本案故障判決書ヲ閱スルニ(前故障ヲ爲シタルニ依リ辻川長平カ酒造刑罰違犯事件ノ訴訟書類及裁判書渡書ニ據リ取調ヲ爲シタル處該裁判ハ辻川長平カ明治廿二年三月七日租稅檢査員ニ對シ申立タル事實ニ據リ裁判ヲ爲シタルモノニシテ敢テ越權ノ處分アルニアラス因テ辻川長平ノ故障ハ帝ニ苦情ヲ申立ル而已ニテ故障ノ原因ナキニ依リ受理セサル者也)トアツテ被告カ故障ノ趣旨如何ニノミ拘泥シ被告カ故障ヲ受理セスト判決シタルハ越權ノ裁判ナルヲ以テ破毀ノ原因アルモノトス既ニ此點ニ依リ破毀ノ原因アルモノト認メタル上ハ他ノ上告點ニ對シ一々辨明ヲ與ヘス以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ注リ原裁判書渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ受ケシメンカ爲メ佐賀縣裁判所ニ移スモノ也

明治二十二年四月二十九日

八四五 明治二十二年乙第百九十五號

高知縣平民權屋職 小健 熊 職

七七八ノ
一〇

酒造稅則附則第七條ハ自家用料酒製造ノ免許證ヲ受ケ製造シタル處ノ酒類ハ之ヲ販賣シ能ハストノ禁止注ナリ故ニ此禁止注ニ戻リタルハ其點ノミ同第十條ニ照シ罰金ニ處シ其賣代金ヲ追徵スルニ止リ他ノ酒類等器等ヲ沒收スヘキモノニアラス何トナレハ同第七條ノ禁止注ヲ犯シタル所爲ヲ罰スルモノナレハ其犯則ニ關係ナキ正當ニ製造シテ所持スル酒類等ヲ沒收スヘカラサルハ勿論ニシテ同第十條末項ノ仍ホ其製造酒類及器器ヲ沒收ストアルハ同第三條同第四條同第五條同第六條等ノ違犯者ニ適用スヘキ注條ナルヲ以テナリ本按原裁判書渡ヲ閱スル

ニ被告カ自家用料酒製造免許證ヲ受ケ製造シタル酒類三斗五升三合ノ内一升代價八錢ノ割合ヲ以テ五升ヲ被告カ家應ニ於テ承野金吾ニ賣渡シタルニ在ルヤ明白ナレハ此所爲ニ對シテハ酒造稅則附則第七條同第十條同第十二條并ニ本則第三十八條ヲ適用シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ五升ニ對スル賣代金ヲ追徵スルニ止リ現在スル殘酒三斗三合ハ沒收スヘキモノニアラサルヤ上告論旨ノ如クナリトス然ルニ原裁判茲ニ出テテ其殘酒三斗三合ハ其容器桶二個ト共ニ沒收スルノ旨渡ヲ爲シタルハ既律ニ錯誤アル失當ノ裁判ナルヲ以テ此點ハ破毀ノ原因アルモノト判定ス

以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ注リ原裁判中酒類三斗三合並ニ容器桶二個ハ之ヲ沒收スト旨渡タル部分ヲ破毀シテ之ヲ取消シ該酒及容器ハ治罪法第三百八條ニ依リ被告人ニ還付スルモノナリ

明治二十二年五月十八日

八四六 明治二十二年乙第三百六十三號

鳥取縣平民酒造營業人 道祖尾 仙吉

酒造稅則第二十二條ニ(他ノ委託ヲ受ケ酒類ヲ代造シ云々許サス)トハ酒造營業人於テ他ノ酒造營業人又ハ其酒造營業人ニアラサル者ヨリ委託ヲ受ケテ代造スルヲ禁ズルノ注條タルヤ勿論ナリ今原裁判書渡ヲ閱スルニ(被告仙吉ハ酒造營業人ニシテ酒類小賣營業人井上方藏ノ依頼ニ應シ云々四斗入支米二十俵ヲ受取酒五石三斗ヲ代造シ云々支米二十二俵外ニ云々酒稅金トシテ四十圓トヲ受取酒十石ヲ代造シ云々)トアル文詞ニ依リハ被告ハ被告ニ於テ右第二十二條ニ背キ井上方藏ノ依頼ニ應シテ代造シテ同人カ無免許營業ノ所爲ヲ補助シタルカ如クシト雖其次段ニ(右二十俵ノ代金ニ利子ヲ附シ合テ金四十二圓四十八錢ヲ以テ代價トシ云々)右代造シタル酒五石三斗云々右二十二俵ノ代金ニ利子ヲ附シ合テ金四十圓九十二錢ト酒稅金四十圓トヲ合シテ代價トナシ云々其代造ノ酒酒十石ヲ力藏ニ渡シタル事實ト判定ス)トノ文詞ニ依リハ代造ニアラスシテ全ク相當ノ代價ヲ以テ賣却シタルカ如クニシテ孰レカ事實ナルヤ若シ代造ヲ事實ナリトセンカ該第二十二條ニ違フタルモノトシ同第三十六條ニ依リ

シノ部

三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處スルニ止リ酒類ノ没收ハ勿論賣捌代價ノ追徴ヲモナスコトヲ得ヌ何トナレハ代造シタル酒類ハ被告人ノ所有物ニアラサレハ其所有主ニアラサル者ニ對シ没收スルノ旨渡ヲナスコト能ハサルハ勿論代造ニ賣捌代價ノアルヘキ道理アラサレハナリ之レニ及シ純然タル賣買ナリトナシ酒類ノ賣買ハ酒造稅則ノ條セサル處ナルヲ以テ隨テ之カ制裁ノアルヘキ理由ナシ到底原裁判ハ必要ナル事實ノ理由ニ離解アルヲ以テ之レカ當否ヲ知ルニ由ナキ事實ノ裁判ナルニ依リ破毀ノ理由アルモノトス既ニ此點ニ基キ破毀ノ理由アリト認メタル上ハ他ノ上管點ニ對シテ一々辨明ヲ與ヘヌ

以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ松江輕罪裁判所ヘ移スモノナリ

明治二十二年九月廿一日

八四七 明治廿二年乙第三百二十四號

千葉縣平民酒造營業人

藤田彌三郎

外一名

七七八ノ
七九三ノ

又該論旨中長シキ鑑札名義ノミ彌三郎ニシテ其實稅金等ハ由三郎カ出金シ同人ニ於テ營業ヲナシタリトスルモ直ニ稅則第三十條第二十九條ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラス云々トアレレ抑酒造稅則第三十條ニ所謂鑑札貸借トハ單ニ鑑札ヲ貸與シタルヲ云フニアラスシテ鑑札名義ヲ貸與シ其鑑札主ノ名義ヲ以テ他人ノ營業ヲ爲ス者ヲ云フニアリテ本案原裁判官カ認メタル事實ハ則鑑札貸借ニ外ナラストス

明治廿二年十月十九日

八四八 明治二十二年乙第四百三十六號

七七八ノ

酒造稅則附則第六條ニ(自家用料ノ酒類ハ其住居セル一家外ニ於テ之ヲ製造シ又ハ他ノ委託ヲ受ケ之ヲ製造スル

宮城縣平民酒類受小賣營業

千田慶次郎

四五六ノ

ヲ得ヌ)トアルハ自家用料ノ酒類タル住居スル一家内ニ於テノ製造スルノ許可ヲ得タルニ在ルヤ同第五條ニ照シ明白ナルヲ以テ之レカ許可ヲ得タル者ハ其住居セル一家外ニ於テハ製造スルコトハ許サレモノナリ又自家用料酒製造ノ許可ヲ得タルハ自家ノ用ニ供スル爲メニシテ他人ノ爲メニアラス故ニ他人ノ委託ヲ受ケ則チ他人ノ爲メニスルヲ許サレノ精神ニ在ルヤ勿論ニシテ専ラ免許者ノミヲ支配スルノ正條タリトス然レ同附則ハ重セニ稅則セントスル其旨ヲ支配スルノ法律ニシテ之カ取稅者等ヲ補助スル者ノ所爲ヲ罰スヘキモノニアラス故ニ酒類受小賣營業者ニシテ自己ノ用ニ供スル酒類ヲ製造シタルニ於テハ附則第四條ノ違犯トシ同第十條ノ制裁ヲ受クヘキ當然ナリト雖モ其酒類タル自己ノ用ニ供スルニアラス他人ノ委託ヲ受ケ即チ他人ノ取稅セントスルヲ補助シテ代造シタル事實アリトスルモ此場合ニ在テハ其委託者ヲ罰スルニ止リ受託者タルモノ、如キハ同條ノ間フ處ニアラストス今原裁判官言渡書ヲ閱スルニ被告ハ酒類受小賣營業者ニシテ菅原爲治ノ委託ヲ受ケ同人ノ自用ニ供スル酒ヲ製造シタルヤ明白ナレレ被告ハ自家用料酒免許者ニアラス又被告ノ用ニ供スルノ目的ヲ以テ製造シタルニアラス被告ハ爲治ノ取稅セントシタルヲ補助シタルニ過キスシテ之ヲ罰スルノ正條アラサレハ原裁判官ニ於テ其事實ヲ認メテ以テ無罪ノ旨渡ヲ爲シタルハ相當ノ擬律ニシテ錯誤ナラサレハ上告論旨ハ總テ其効之レアラサルモノトス

明治二十二年十一月廿五日

八四九 明治二十二年乙第四百四十號

宮城縣平民賣屋營業

大沼所左衛門

七七八ノ
七九三ノ

又理由ノ不備トハ犯罪構成上ニ必要條クヘガラサル事實ノ理由ヲ明示セサル場合アルヲ云フ今原判文ヲ閱スルニ(被告ハ自家用料酒製造ノ免許ヲ受ケ製造シタル酒類ヲ云々酒類ニ製造セントシ酒類ニ掛ケ清酒八升樽ヲ云々)トアツテ之レニ依ルトキハ被告ハ酒類受小賣營業者ニシテ酒造稅則附則第三條ニ違フタルノ罪ヲ組成スルニ必要ナル理由充分ナレハ之ヲ指シテ不注ノ裁判ト云フヲ得ヌ因テ上告第一點ノ後段モ亦相立タサルモノトス自家用料

ノ部

酒製造ノ免許證ヲ受ケタル者ト雖モ酒類ヲ製造スルハ酒造稅則附則第三條ノ許サ、ル處ナレハ若シ之レニ戻
 リ酒類ヲ製造シタルニ於テハ其法律ニ戻リタル點スラ處罰スレハ足ルモノナルヲ以テ從テ其罪トナル物件ノミ沒
 收スヘキモノニシテ他ノ罪トナラサル部分ハ沒收スヘキモノニアラス本案被告ノ所爲タル以上ノ如ク免許ヲ得テ
 製造シタル酒類ノ内其一部分ヲ酒類ニ變製シ即チ該第三條ニ戻リタルモノナレハ其正條ニ戻リタル酒類ノミ沒收
 スヘキモノニシテ他ノ部分タル酒類ノ如キハ沒收スヘキモノニアラサルヤ上管第ニ點ノ如クナリ然ルヲ原裁判官
 ハ其實ヲ認メナカラ之マ沒收スルノ旨渡ラ爲シタルハ法律ノ錯誤ナルニ付此部分ハ破毀ノ原由アルモノトス
 夫レ斯ノ如ク酒類壹斗五升ハ法律上沒收スヘカラサルモノニ係レハ附帶上管論旨ノ如キハ其効ナシ何トナレハ已
 ニ樽ニ掛ケ酒類製造中ニ係ルヤ否ノ理由ニ至テハ敢テ必要ニアラサレハナリ

明治二十二年十一月廿五日

八五〇 明治二十二年乙第四百號

東京府平民酒類營業 井ノ口三作

酒造稅則第十五條ニ(検査酒ノ酒類ヲ他ノ酒類ニ變製スル時ハ既ニ検査酒ノ石收ニ係ル遺石稅ヲ納メ更ニ變製ノ
 石收ニ就テ遺石稅ヲ納ムヘシ但變製ノ部ハ必ス管轄ノ届出ヲ檢査受クヘシ且製成ノ上ハ第十條ノ手續ニ據リ檢
 査受クヘシトアリ又酒造稅則附則第三十二項ニ(稅則第十五條検査酒ノ酒類ヲ變製稅則第二條ノ酒
 ヲ二類ニ二類ヲ三類ニ變製スルノ類)スルトキハ該條ニ據ルヘシト雖モ一酒類中ノ變製「酒類ヲ酒類ニ味淋ヲ銘
 酒ニ變製スルノ類」ニ係ルトキハ單ニ其變製シタルモノニ就テ課稅ノ石收ヲ査定スヘシトアルニ依ルトキハ檢
 査既滿ノ酒類ト雖モ之ヲ混和シテ他ノ酒類ニ變製シ其酒類タル同種類ナルニ於テハ稅額ヲ確定スル爲メ更ニ石收
 ノ査定ヲ受クルニ止ルモ種類異ナルモノヲ混和シ他ノ酒類ニ變製スルトキハ先ツ一旦既ニ検査酒ニナリタル稅額
 ヲ納メ更ニ變製酒ニ就テ遺石稅ヲ納ムヘキモノニシテ即チ二個ノ稅額ヲ課セル、モノナルヤ明カナリ而シテ斯ノ
 如キ一ヲ爲シ得ヘキハ單ニ酒造稅則第二十九條ノ制裁タルモノニシテ他人ノ擅ニ爲シ得ヘカラサル處ナレハ若シ他人ニ於
 テ擅ニ之ヲ爲シタルトキハ酒造稅則第二十九條ノ制裁タル到底免ルヲ得サルモノトス今原判文ヲ閱スルニ(被

七七) 二九條

告三作ハ酒類營業業者ニシテ酒造免許證ヲ受ケ居ラサルニ云々燒酎若干味淋若干ヲ混和シテ三類酒ニ石三斗
 ヲ製造シ云々)トアツテ之レニ依ルトキハ第二條三所附二類酒即燒酎ヲ三類酒ノ味淋ニ調和シタルモノニシテ稅
 額ノ少ナキモノヲ稅額ノ多キモノト調和シ他ノ酒類ニ變製シタルヤ明カナルノミナラス原裁判官カ心証ニ供シタ
 ル證據ニ徵スルモ被告ハ直シ酒即チ第三類酒ニ變製シタルヲ判然タリ然ラハ則チ斯ノ如キ一ヲ酒造營業業者ニ於テ
 爲シタルトキハ更ニ三類中ノ直シ酒ニ就テノ稅額ヲ納ムヘキモノナルニ被告ハ無證札ニテ之ヲ爲シタルモノニ付
 酒造稅則第二十九條ノ制裁ハ免ル一能ハサルヲ以テ該條ニ相當スルモノト爲シ原裁判官カ其實ヲ認メ始審裁判
 ヲ認可シタルハ相當ニシテ不注ニアラス其他製造シテ判示シタルカ如キモ被告ハ燒酎ト味淋トヲ混和直シ酒ト
 爲シタル事實ヲ認メテ明揭シタルモノナレハ是亦架空ノ判定ト云フヲ得サレハ勢々上管論旨ハ總テ相立タサルモ
 ノトス

明治二十二年十一月廿一日

警廳營業稅則



參照

八五一 明治廿一年乙第三百二十九號

山形縣士族 石黒八郎

凡ソ稅率ハ其營業者ヨリ其稅額ヲ徵收ス可キ爲メノ取締規則ニシテ專ラ其營業者ヲ支配スヘキモノナレハ該規則
 ヲ以テ營業者ニアラサル者ヲモ制裁スルヲ得ズ本件原判官ノ認メタル事實ハ被告石黒八郎ハ佐藤千代吉ニ於テ警
 廳ヲ無免許ニテ製造スル情ヲ知テ小量及半切桶等ヲ貸與ヘタリト云フニ在レハ千代吉ハ營業ノ目的ニ出シモノト
 スルモ被告八郎ハ無免許ニテ警廳營業ヲ爲シタル者ニアラサルヲ以テ警廳營業稅則ノ制裁ス可キモノニアラサル

七九) 一〇條

ハ勿論既罰ハ家屋居人ノ所爲ヲ管轄者ヲ罰スヘントノ特別ノ在ルアリテ刑法ノ總則ニ從フヘキモノニアラス然ルニ原裁判官ハ被告人ヲ千代吉ノ從犯トシ管轄管業規則ヲ適用處斷シタルハ無罪ナルノ事實ヲ認メ有罪ノ判決ヲ爲シタルモノニシテ疑獄ノ餘地ナリトス又被告人ニ於テ無罪タルヘキ上ハ半切桶ヲ沒收ス可キ限ニアラス因テ之ヲ沒收シタルモノ亦疑獄ノ餘地ナリトス但係被告人ノ所爲ヲ管轄管業ノ目的ニ出テ管轄ヲ製造シ被告ハ其情ヲ知テ小量及ヒ半切桶ヲ使取シタルモノトスルモ無罪タルヘキモノナルヲ以テ千代吉ノ所爲ハ管業ノ目的ニ出シヤ否ヲ確カスルノ必要アラサレハ上管轄及ヒ原裁判官ノ附帶上告ニ對シ聲明ヲ爲スヲ要セサルモノトス右ノ理由ナルヲ以テ本院檢察官附帶上告ノ旨趣ハ治罪法第四百十條第十項ニ當ル上告ノ理由ニ適當ナルモノト判定シ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ノ疑獄ヲ被覆シ直チニ裁判官權ヲ爲ス左ノ如シ

石黒 八郎

原裁判官ノ判定シタル被告人ノ所爲ハ法律上罪トナラサルモノトス因テ治罪法第三百五十八條ニ照シ無罪ヲ宣渡スモノナリ

但半切桶壹個ハ治罪法第三百八條ニ依リ被告人へ還付ス

明治二十一年三月廿二日

八五二 明治二十一年乙第三〇〇號

青森縣平民管轄管業規則 平野 彌助

上管轄管業規則第一條ニ依リ原判決ヲ管轄スルニ其文中ニ明治二十年三月ヨリ同年九月迄ノ間ニ於テ管轄ヲ製造シ云々又明治二十一年二月二日米三斗九升水三斗ヲ以テ同管轄管業規則ヲ製造シ云々ト認メアリテ其末段ニ至リ其所爲ハ明治二十年二月二日度ノ兩期ニ跨ルヲ以テ云々トアル其年度ハ要スルニ上管轄管業ノ如ク其當ヲ得サルモノトス如何トナレハ管轄管業規則第二條ニ管業免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トストアリ即チ管業免許ノ年度ハ其年十月一日ヨリ起算スルヲ以テ法律トスレハ則明治二十年三月ヨリ同年九月迄ハ明治十九年度

七九〇
二一〇

ノ一期内ニ屬シ明治二十一年二月二日ハ明治二十年度ノ一期内ニ屬スレハナリ而テ其第二項ハ稅則第一條ニ一期管業稅トシテ金五拾圓ヲ納ムヘントアレハ前段聲明スル如ク其所爲二期ニ係ルヲ以テ每一期一罪ヲ構造シタルモノトシ同稅則第二條第十四條ニ照レ前後各自三百圓宛ノ罰金ニ處シタルハ固ヨリ當然ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ依リ原判決疑獄中明治二十年二十一年度トアル部分ヲ破毀シ明治十九年同二十年度ト更正スルモノ也

明治二十一年五月二十四日

八五三 明治廿一年乙第六四九號

山形縣平民管轄管業規則 早坂 與三郎

管轄管業規則第一條ニ凡ソ管轄ヲ製造シテ管業セント欲スル者ハ其管轄ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受ケ一期管業稅トシテ左ノ通納ムヘントアリテ此條ニ依リハ管轄製造ノ業ヲ管轄マントスル者ハ先ツ其趣ヲ管轄ニ願出テ免許證札ヲ受ケタル上ニアラサルヨリハ之カ管轄ヲ製造シ能ハサルモノナリ故ニ此條ニ背キ免許證札ヲ受ケス製造シタルニ於テハ未タ販賣セサルモ管業ノ目的ヲ以テ製造シタル上ハ右第一條ノ管轄者タルヲ勿論ナレハ從テ同第十條ノ制裁ハ免ルヘント得サルモノトス今原裁判官管轄管業規則ニ(被告人與三郎ハ其筋ノ免許ヲ請ケスシテ管轄カニ不正ノ利ヲ得ント決意シ明治二十一年十一月二十日 舊曆十月十七日 己レノ家宅ニ於テ蒸米二斗九升水二斗四升ヲ以テ管轄四斗ヲ醸造シ因テ之ヲ販賣セント構ヘタル事實ナリト認メタリ)トアル事實ニ依リ片ハ被告ノ目的販賣管業ニアリナカラ免許證札ヲ受ケス管轄ヲ製造シ販賣セント構ヘタル際ニアツテ發見セラレタルニ在ルヤ明白ナレハ假令未タ之ヲ販賣セサルモ右第一條ノ管轄者タル免ルヘント得サレハ同第十條ノ制裁ヲ受ケヘキモノナルヤ前聲明ニ依リ明ナリ殊ニ其製造タルヲ試モノ爲メナリトハ原裁判官ノ認メサル事實ナルニ其認メサル事實ヲ管轄管業規則ニ過キサレハ上管轄管業規則及ヒ擴張ノ論旨トモ相立タサルモノトス又刑法第五條第二項ニ(若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ處罰ヲ掲ケタル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ)トアルヲ以テ別ニ總則ヲ掲ケサル

シノ部

七九〇
二一〇

モノハ刑法ノ刑則ヲ適用スヘキハ勿論ナリト雖モ警備警察規則ノ如キハ特ニ其第十三條ニ沒收又ハ追徴等ノ規定アリトモ同第十條ニ於テハ沒收等ノ規定之レアラザレハ同條ヲ以テ制裁スヘキモノニ對シテハ其物品等ヲ沒收スヘカザルノ注意ナルヲ以テ刑法ノ刑則中ニ規定アル附加刑タル沒收例等ハ適用スヘキモノニアラザルモノトス故ニ同規則第一條ノ違犯者ニ對シテハ同規則第十條ニ依リ營業稅二倍ノ罰金ヲ科スルニ止リ其製造シタル物品又ハ其製造ノ用ニ供レタル物品等ハ沒收スルノ明文ナキヲ以テ之ヲ沒收スルコトヲ得サルモノナルヤ上告論旨後段ノ如クナリ然ルニ原裁判ノ違ニ出テ沒收スルノ明文ナキニモ拘ハラズ被告人カ製造シタル警備四斗桶入ノ儘ト半切桶壹個並ニ權秤壹個トハ刑法第五條ニ基キ同第四十三條同第四十四條ニ依リ之ヲ沒收スルノ言渡ヲナシタルハ擬罰ニ對照アル失當ノ裁判ナルヲ以テ此部分ハ破毀ノ原由アルモノト判定ス

以上顯明スル理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ依リ原裁判言渡中沒收ノ部分ヲ破毀シ禁押タル警備四斗桶入ノ儘及半切桶壹個各壹個ハ治罪法第三百八條ニ依リ被告人ニ還付スルモノ也

明治二十二年一月廿四日

質屋取締條例

參照

○判決例

八五四 明治廿二年乙第二百廿七號

質屋取締條例第五條二十五年未滿ノ者白癡癩者及雇人(雇主ノ家ニ)ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ストアルハ罪ニ此等ノ者ノ質入主トナリタル場合ヲ規定セルモノニシテ此等ノ者カ質物ノ使ヒ人トナリタル場合モ該條ニ包含スルノ旨意ニアラスト何トナレハ質屋營業者ニ於テ其質入主ノ規則ニ抵觸セザルモノナルヲ詳知シ且ツ質入品ノ確實ナリト思料セル時ハ質物使ヒ人ノ誰タルヲ問フ要セザレハナリ而シテ質物持參人カ其實質入主ナルニ他人名義ヲ

岡山縣平民質屋營業 播磨源次郎

八〇ノ五條

詐稱シ物品ヲ質入スルノ事實ヲ知リ故ラニ之ヲ質取リタルヤ否ノ如キハ事實ニ屬シ此等ノ點ハ法律上專ラ原判官ノ判定ニ任從スヘキモノナレハ則原判官ハ諸般ノ證據ニ心証ヲ資リ被告ハ田中亮村ヨリ屢々質物ヲ取リ其身元ヲ詳知シ居ルヲ以テ同人長男健太郎カ右亮村ノ使ト稱シ質物ヲ持參セルヲ質取置キ其帳簿ニハ亮村ノ任所氏名ヲ記レ顯印セルモ取次人ナル健太郎カ任所氏名ヲ記載セザルモノト判定シ右所爲ハ質屋取締條例ニ違犯セスト爲シタルハ不注ト云フヲ得サルナリ然リ而シテ岡山縣明治十九年甲第五十八號布達第八條中質物持參人ニ一時ノ使ヒタルト代理ノ任ヲ受ケタルモノト區別セザル限リハ其質物ヲ持參セルモノハ總テ取次人トシテ其任所氏名ヲ記載セシムルノ律意ナリト解釋セザルヘカラス左レハ原判官ニ於テ前掲事實ノ所爲ニ對シ質屋取締條例ヲ適用スヘキモノニアラザルモ岡山縣明治十九年甲第五十八號布達第八條ニ違背スル所爲ナリトシテ同第十五條刑法第四百廿七條第八項ニ據リ科料金ニ處シタルハ適當ノ裁判ニシテ之ヲ換律ニ錯誤アリトハ云フヲ得サルモノトス

明治二十二年五月廿七日

八五五 明治廿二年乙第二百四十二號

本署被告カ所爲タルヤ原判官ニ認ムル所ノ事實ニ據レハ質屋營業人ニシテ十五歳未滿ナルノミナラス其身元詳カナラザル上野喜代松ヨリ縮木綿二丈余ヲ質物ニ取リ之ヲ濠帳ニ記載シ置カサルモノナレハ則質屋取締條例第四條第十回條ニ違反シ一所爲トナシ罰金ニ處スヘキモノナリ其理由ハ質屋人ノ或者ハ身元不詳者ニシテ或者ハ十五歳未滿ノ者ナルニ共ニ雇人ヲ立テシテ各自ニ質物ヲ取リタルノ時ハ二個ノ所爲トナシ所斷スヘキハ勿論ナリト雖モ本案ノ如キ十五歳未滿ナル其者ノ身元不詳ナル上野喜代松ヨリ質取リタルニ過キサル如キハ一個ノ所爲ニシテ之ヲ二個ノ所爲ナリト云フヲ得サルモノトス而シテ同條例第三條ハ正當ニ營業セル場合ニ於テ其質出入ノ專柄ヲ記載スヘントノ法律ニシテ既ニ條例第四條第五條等ニ違背シ質物ヲ取置キタル事項迄ヲ記入スヘントノ條規ニアラサルノミナラス其第三條規定ノ濠帳ニ不正ノ所爲ヲ記載セザルカ如キハ犯情自然ノ結果ニ出ツルモノナレハ此場

三重縣平民質屋營業 森島茂三郎

八〇ノ三四五條

合ニ於テ別ニ一罪ヲ組成スルモノトシ同條例第十六條ヲ適用シテ刑ヲ併科スヘキノ律意ニアラス故ニ原判文上ニ認メタル事實ニ對シ質屋取締條例第十四條ヲ適用シ單ニ罰金三圓ニ處シタルハ相當ノ裁判ニシテ上告論旨ハ相立少サルモノト判定ス

明治廿二年八月十六日

八五六 明治廿二年乙第三百四十九號

岡山縣平民質屋商 若林 熾 平

四條

質屋取締條例第四條ニ身元詳ナラサルモノヨリ質物ヲ取ルヲ得ス但身元詳ナル者證人タル時ハ此限ニアラストアリ本條例ニ於テ身元不詳者ヨリ質物ヲ取ルヲ得サル旨ヲ規定シアレハ同第十八條ニ基キ地方官ニ便宜規定ヲ許容サレタル其施行細則中特ニ取次人ヲ以テ質物ヲ取置ク場合ハ假令ヒ質入本人カ身元不詳者ナリト直ニ取次人ヲ證人ト看做シ質物ヲ取置クモ條例ノ間フ所ニアラスト規定スヘキ理由ナケレハ本案被告カ論訴スル明治十九年岡山縣甲第五十八號布達質屋取締條例施行細則第八條ノ主旨ハ質入主身元詳カニシテ取次人ヲ以テ入質スル場合ノ爲メニ設ケタルニアルヤ論ヲ俟タス然ラハ原裁判所ニ於テ被告カ身元不詳者ナル戸田圓次ヨリ衣類五點ヲ質取リタル節假令ヒ大久保シナハ身元詳カナルモ單ニ取次人ニ過キスレテ證人ニ立テタルモノト認メサル上ハ此事實ニ對シ條例第四條ノ違犯トナシ同第十四條及刑法第九十條等ヲ適用處斷シタルハ至當ノ裁判ニシテ前項上告趣旨ハ到底相立タルモノトス依テ消罪法第四百廿七條三則リ上告ハ之ヲ棄却ス

明治廿二年八月廿二日

(一六一) 證券印稅規則 明治二十三年四月三日

法律第三十號

朕證券印稅規則中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第三十號 (官報 四月五日)

證券印稅規則第九條ニ左ノ一項ヲ追加ス

一 切手、手形類ノ裏面ニ記載シタル受取書

參照

○ 同指令

八五七 證券印紙賣捌ノ件 (群馬縣) 同 明治二十一年六月六日

登記手收料ハ本月一日以降證券印紙ヲ以テ代納スヘキ事ト相成候ニ就テハ爾後登記請願者ハ其都度必ス證券印紙賣捌所ニ就テ該印紙購求セサル可ラス然ルニ既往ノ實況ニヨレハ請願者未タ登記ノ法ニ慣レズ其名刺ニ記載シタル登記料金額往々不足スル等ノ儀有之候ニ付登記官吏ハ先ツ以テ之カ調査ヲ遂ケ其不足スルモノハ其都度增加ナシメ登記所ニ出張スル國庫金出納所ニ現金ヲ納メ其納切符ヲ登記所ニ納ムルヲ認メタル上該事件ノ登記ニ着手スルモノ、如レ故ニ爾後ト雖モ名刺ニ貼用シタル印紙額面ノ過不足スル等ハ往々可有之勢ヒ請願者ハ再三印紙賣捌所ニ往復スルノ煩ナキ能ハス隨テ官民ノ不便不尠候ト存候間當該登記所ニ於テ差支ナキ以上ハ證券印紙賣捌人ニ限リ登記所人民控所ニ出張シ其需用ノ印紙ヲ賣捌カシムルノ特令ヲ仰キ度右ハモシ公然差許サルハトキハ需用者ノ不便ナルノミナラス印紙賣捌人其他ノモノ常ニ人民控所ニ出入シ密カニ該印紙ヲ賣却又ハ貸與スル等ノ弊ヲ醸スニ至ルヘク取締上却テ苦慮罷在候儀ニ付取口公許相成候様致度

大藏省指令 明治二十一年六月九日

同ノ趣開屆

八五八 印紙賣捌ノ件 (靜岡縣) 同 明治二十一年六月二十三日

シノ部

八一九條

七八一ノ
七條

本月十二日付官報第千四百八十四號ニ登載有之候舊馬場同證券印紙賣捌ノ件ニ對スル御指合ノ趣ニ依ルトキハ
登記所ニ於テ差支ナキ以上ハ該印紙ニ限リ登記所人民總所ニ出張シ之ヲ賣捌カシムルヲ得候處登記事務治安裁
判所ニ於テ取扱候處所ニ限リ既懸用印紙ヲモ併セテ賣捌カシメハ一層人民ノ便利トナルノミナラス該印紙ヲ密
賣スルノ憂ナキニ至リ候儀ニ付御差支無之候ハ、御許可相成度
大藏省指令 明治二十一年
六月二十七日
同ノ趣

七八二ノ
二條

八五九一印紙貼用ノ件(銀行集會所)願 明治二十一年
九月六日
當座貸越金及コルレスボンデンス(約定書)ニ印紙貼用ノ儀ニ就テハ去ル十七年五月證券印紙規則御公布相成候
以來同盟銀行中ニ於テ再三評議有之候ハ該規則第二條第一類第三項ニ屬スヘントシ或ハ第二類第七項ナルヘシ
ト論議不定ノ折柄十八年九月中日本銀行ヨリ御省へ當座貸約約定書ハ其取引ノ極度金額ヲ豫約スル証書ニシテ殊
ニ其金額ヲ授受スルハ印紙既滿ノ小切手ヲ以テ引出スモノニ付規則第二條第一類ニ據リ可然哉又ハ云々又「コ
ルレスボンデンス」約定書ハ送金爲替代金取立及融通等各種取引金額ノ極度ヲ定ムルモ其約束ノ當時該金額ヲ
取引スルニ無之所謂豫約ノ證書ナレハ規則第二條第一類ニ據リ印紙ヲ貼用シ而シテ實際取引ノ都度其手形證書
等ハ相當印紙ヲ貼用シ可然哉又ハ云々トノ同ニ對シ各項目前段申出之趣ト御指合有之候處承知致候ヨリ當集會
所同盟銀行中過半並各地方銀行ニ至ル迄大抵此御指合ヲ標準ト致居候處實際ニ當リ往々差支相生候其一ニテ例
スレハ當座貸約締約相成其根抵當不動産ナルトキハ登記法ニ據リ之カ登記ヲ爲サハルヘカラス然ルニ登記官ノ
見解ニヨリ或ハ一類ニテ相滿トコトアリ或ハ第二類印紙ヲ要セラル、コトモ之アリ又頃日名古屋地方同業者ノ
事情ヲ詳カニスルニ若貸越コルレスボンデンス「共亦日本銀行へ御指合ノ御指合ヲ標準トシテ取扱來リシ處其
貸越根抵當品不動産ナルトキハ二類印紙ヲ貼用スルニ非レハ登記官ニ於テ受理ナキヲ以テ此種ニ限リ第二類印
紙ヲ貼用致居候由ニ御座候又「コルレスボンデンス」締約ニ依リ甲乙約定書ヲ交換スルニ當リ甲銀行ハ一類印紙

七八一ノ
一九條

即書印紙ヲ貼用シテ之ヲシニ送付シ銀行ハ二類即相當印紙ヲ貼用シテ之ヲ甲ニ送リ雙方ニ約定書ヲ勝手ノ
後印紙ノ見解ニ付往復ノ勞ヲ費スコト往々聞知致候右ノ如ク官民共ニ其取扱區々相成候テハ取引上差支不尠候
ニ付其邊從可仕一定ノ方向其御筋ヨリ銀行者一般へ御訓示被成下候儀仕度
大藏省演示 明治二十一年
九月二十日
貸借スヘキ金額ヲ明記シタル證券ハ現金取引ノ始何ニ拘ハラズ證券印紙規則第二條第二類第七項ニ據リ相當印
紙貼用スヘキモノトス
八六〇一證券印紙規則ノ件(群馬縣)伺 明治二十二年
七月二日
町村吏員ノ擔任管掌スル事務ニ關シ財產ノ授受及取約ヲ爲ストキ用フル凡テノ證券帳簿ハ町村役場ノ名義ヲ以
テスルモノト否トヲ問ハズ證券印紙規則第九條ニ依リ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セサルヤ町村制施行ニ付舊町村
吏員トハ大ニ其趣ヲ異ニシ聊カ疑義ニ涉リ決裁候條何分ノ御指揮相成度
大藏省指令 明治二十二年
七月八日
同ノ件ハ渾テ證券印紙規則ニ依リ相當印紙ヲ貼用セシムヘシ

七八一ノ
一九條

八六一一證券印紙規則ノ件(京都府)伺 明治二十二年
七月二十三日(内務大藏兩省宛)
市町村ニ於テ管掌スル金額ノ授受ハ舊リ市町村費ニ限ラス國稅地方稅ヨリ各種ノ寄託金ニ至ル迄其取扱ノ處從
前ノ區役所ノ長役場ニ於テスルト致テ異ナル處ナキモ制度改正後ハ之ヲ官廳視スルヲ得サルニヨリ隨テ金額ノ
授受及取約ノ證明等ニ用フル證券帳簿ノ類ハ總テ明治十七年五月第十一號布告證券印紙規則ニ依ルヘキカ如シ
ト雖トモ畢竟スルニ現時ノ市町村役者ハ其組織コソ異ナレ其職務ニ於テハ從來ノ區役所ノ長役場ト大差ナキモ
ノニ付實際上下等ノ取扱ハ無論規則第九條ヲ適用スヘキ筋ニ候哉

シノ部

追テ本文ノ件ヲ規則第九條ヲ適用セザルモノトスルモ庶下京都市ノ如キハ特別ノ制ニヨルモノニ付該區役所ノ事務ハ獨リ市ニ屬スル事務ニ限ラス廣ク國及ヒ府ノ事務ヲ取扱ハシムルヲ以テ是等ハ特ニ本文見解ノ如ク相心得可然哉

大藏省指令 明治二十二年 八月七日

本年七月二十三日附ヲ以テ證券印稅規則ノ備ニ付同ノ件ハ渾テ同規則ニ依リ相當印紙ヲ貼用スヘシ但本省主管ニ付本省限リ指令ス

○判決例

八六二 明治二十一年乙第五百七十二號

島根縣平民宿屋營業

岡本熊四郎

外九名

證券印稅規則第二條第一類第二十項ニ所謂金錢諸物品ヲ取帳トハ其金錢物品渡人自ラ之ヲ關製シ受取人ニ對シ金錢諸物品渡シタルアルヲ證明センカ爲メ受取人ノ捺印ヲ要シ又ハ金錢諸物品預ケ人於テ自ラ關製シ預リ人ニ對シ預ケタル金錢諸物品アルヲ證明センカ爲メ預リ人ノ捺印ヲ受ケ而テ其帳簿ハ尚ホ之ヲ金錢又ハ諸物品ノ渡主或ハ預ケ主タル者ノ手許ニ保存スルモノニアリトス今原判文ヲ閱スルニ(被告熊四郎外九名ハ云々一人ニ付毎日金三錢宛出金シ之ヲ積立預リ人ヲ選定シ預リ人ハ右集金ヲ自宅ニテ之ヲ受取リ貯蓄ノ上抽籤ヲ以テ配賦スル約定ニテ帳簿ヲ製シ預リ人ニ於テ金額及姓名ヲ記シ印ヲ捺シタルハ則チ金錢判取帳)云々トアルニ依レハ被告等十名ニ於テ日々金三錢宛出金シ互ニ預リ人トナリテ貯蓄シ而テ其貯金ハ抽籤シテ其當籤者ニ配賦スルノ契約ハ其出金ノ授受ヲ證明センカ爲メ一冊ノ帳簿ヲ關製シ互ニ預リ人トナリタル場合ニ於テ其帳簿ニ金額及姓名ヲ記載シ印シテ預リ人之ヲ保存スルモノナレハ右ニ所謂金錢判取帳ニアラスシテ同則第二條第一類第二十項ニ所謂高價記載アル諸般ノ契約證書ナリ然リト雖モ其附込タル金額ハ幾千ナルヤ其金額ノ明示ナケレハ未タ以テ據

律ノ當否ヲ知ルニ由ナキ不注ノ裁判ニ付破毀ノ原由アルモノトス

明治二十一年十一月十七日

八六三 明治廿一年乙第九百四十六號

大坂府平民柳行李職

小森廣兵衛

同府平民同職

葛籠九兵衛

本案被告等カ上告ノ旨趣タル前項ノ如ク原裁判所ハ實際通帳ナルヲ判取帳ト誤認シ處斷シタルハ不注ナリト云フニアルニモ七ヨ實際判取帳ノ効用ヲ爲スモノナルニ已ニ一度用ヒタル實錢印紙ヲ再用シ結局無印紙ノ儘判取帳ヲ使アルニモ七ヨ實際判取帳ノ効用ヲ爲スモノナルニ已ニ一度用ヒタル實錢印紙ヲ再用シ結局無印紙ノ儘判取帳ヲ使ルヲ認可セシハ固ヨリ相當ニシテ到底上告旨趣ハ相立タサルモノナリト雖モ前項說明ノ如ク本案被告廣兵衛カ使用セシ帳簿ハ通帳ニアラスシテ判取帳簿ナル上ハ被告九兵衛於テ單ニ該帳簿ニ物品等ノ請取ヲ印シタル迄ニテ之ヲ九兵衛方ニ保存シ置クヘキ帳簿ニアラサレハ被告雙方間ニ帳簿ヲ授受シタルトハ云フヲ得ス之ヲ換言セハ判取帳ハ其他用者ニ於テ他日ノ用ニ供スル爲メ物品等ヲ受取リシモノ、證印ヲ取置クモノニテ該帳簿ヲ交付スヘキ性質ノモノニアラスサレハ該規則第十九條ノ制裁ス可キ所爲ニアラス然ルニ原裁判所於テ被告九兵衛ハ判取帳簿ニ受取ヲ記シ且證印ヲ捺シ置ク(云々ト認メナカラ仍ホ被告廣兵衛ニ對シ適施セル注條ニ依リ九兵衛モ共ニ科罰シタル初審裁判會渡ヲ認可セシハ本院檢事附帶上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス仍テ被告廣兵衛カ上告旨趣ハ治罪法第四百二十七條ニ則リ之ヲ棄却シ被告九兵衛ニ對スル旨渡ニ付テハ同法第四百廿九條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス左ノ如シ

葛籠九兵衛

シノ部

右九兵衛カ被告事實ハ原裁判所於テ認ムル所ニ據リ前説明ノ理由ナルヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ從ヒ無罪ヲ言渡ヌモノナリ

明治二十一年一月十九日

八六四 明治二十一年乙第五百二十一號

靜岡縣平民酒造營業人 原 政 吉
同縣平民御賣商 寺内 美 作

第八二條

證券印稅規則第一條凡ソ財産ノ授受及契約ノ證明ニ用フル證券帳簿ハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス第二條第二類左ニ掲グル所ノ證券ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ云々其第五項諸物品賣買証文トアリテ令原判官カ其判文上認ムル所ニ據レハ被告兩名ハ清酒賣買證即チ金高一千三十一圓ヲ記載セル證券ヲ授受シ而シテ該證券タルヤ清酒賣買ヲ證明スル爲メニ造成シタルモノナルヲ以テ前第二條第二類ニ照シ總金額ニ相當スル印稅三十二錢ヲ貼用スヘキモノトス已ニ清酒賣買ヲ證明スルヲ以テ契約主要ノ點トナシ清酒賣買ニ對スル總金額ヲ記載シ證券ヲ造成セシ上ハ該金額ノ内若干ハ即時ニ收受シ殘金ハ他日ニ受取ルヘキ一ヲ記載アルモ是只夕證券總金額ノ辨濟方法ヲ示シタルニ過キスシテ原判官ニ於テ諸般ノ證據ニ心證ヲ資リ本案清酒賣買契約書主要ノ點ハ清酒賣買ニ對スル金高一千三十一圓ヲ證明スルニアリテ其殘金額辨濟ノ點ニアラスト認定セシモノナレハ被告カ前項論旨及原檢察官カ結局被告ノ論旨ト同一ナル辨曉ハ共ニ其理由ナシト雖モ本件清酒賣買證書ニハ印稅三錢ヲ貼用シアレハ前同則第十九條ニ依リ其不足額即チ稅金三十錢ノ二十倍各罰金六圓ニ處スヘキモノナルニ原判官於テ前第十九條ヲ適用シナカラ茲ニ出テサルハ擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ニシテ被告カ上告後段論旨ハ適法ノ原由アルモノトス因テ治罪法第四百二十九條ニ則リ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

原 政 吉

寺 田 善 作

右被告兩名カ所爲ノ事實ハ原判文上認ムル所ニ據リ之ヲ法律ニ照スニ被告政吉カ清酒賣買證ト題スル金高一千三十一圓ノ證券ニ印稅三十二錢ヲ貼用スヘキニ印稅三錢ノミヲ貼用シテ善作ニ交付シ善作カ之ヲ受取リタルハ共ニ證券印稅規則第一條第二類ニ違背スルモノニテ其第十九條ニ依リ稅額高三十錢ノ二十倍即チ各罰金六圓ニ處スヘキニ該當ス因テ罰金六圓宛ニ處スルモノナリ

明治二十一年十月四日

八六五 明治二十一年乙第三百十五號

山口縣平民酒造營業人 小林 源 太郎

抑モ雇人ナルモノハ營業上雇主ニ代リ其業務ヲ取扱フモノニシテ其雇人カ業務上雇主ノ爲メニ行フ處ハ雇主親カ行フ處ト相異ラサレハ其雇人カ業務上ノ行爲ヨリ生スル所ノ責任ヲ負擔スルハ雇主ニアリテ雇人ニアラサルハ勿論證券印稅規則第五條ニ印紙ハ證券ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ云々貼用シ云々ノ明文アルモノナリ而シテ本案原判文ニハ前掲ノ如ク被告源太郎ハ一時雇主ノ不在ナリシニ依リ便宜且代テ之ヲ調製任渡シタル迄ニシテ爾來其通帳ヲ使用セルハ雇主信一ト三浦禮藏トノ間ニアリテ被告カ一己ノ爲メニ使用セシ者ニアラサル云々ノ事實ヲ認メアレハ此場合ニ在テハ帳簿主タル雇主信一ヲ罰スヘキモノニシテ其雇人タル被告源太郎ヘ其責罰ヲ受クヘキモノニアラストス故ニ原判官於テ被告ニ對シ無罪ヲ言渡タルハ相當ニシテ毫モ違法ノ裁判ニアラストス茲ヲ以テ原裁判ハ擬律ノ錯誤ナリトノ上告趣旨ハ適法ノ原由之レアラサルモノトス

明治二十一年五月三十一日

八六六 明治二十一年乙第四百十六號

三重縣平民穀物酒類仲買商 楠 枝 齊 吉

シノ部

四百五十九

八二ノ
二類
一四條

明治十七年第十一號布告證券印稅規則第二條第一類第二類ノ區別タルヤ一ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ一年以内
壹冊ニ付其稅ヲ規定シ一ハ年限ノ長短ニ依ラス附込金高ノ多寡ニ隨ヒ其稅ヲ定メタルモノナレハ同第十條第十二
條第十四條等ニ第二類ノ帳簿云々トアル第二類帳簿ノ文字ハ即チ明文ノ如ク同則第二條ノ第二類ノ諸帳簿ノミヲ
云フモノニシテ其第一類ノ諸帳簿ヲモ包含シタルモノニアラサルナリ何トナレハ右各條ニ第二類帳簿付込見積金
高トアリ而テ帳簿ニ見積金高ヲ記載シ其金高多寡ニ從ヒ印稅ニ差異ヲ生スルモノハ特リ第二類ノ帳簿ノミニシテ
第一類ノ帳簿ニアルヘキモノニアラザレハナリ而テ使用期限トアルハ第一類ノ一年以内云々トアルヲ指シタルモ
ノニアラスシテ使用者ニ於テ自カラ第二類帳簿初丁ニ記載シタル期限ヲ指シタルトハ明治十七年大藏省第五十六
號告示證券印稅貼用様式ニ關シテ明瞭ナリ尙ホ右告示ニ依テ觀レハ第一類ノ帳簿モ亦其初丁ニ紙數ヲ記載スルモ
ノナレハ抑モ第一類ノ帳簿ハ年限ノ長短ニ依テ印稅ニ差異ヲ生スルモノナレハ特ニ其紙數ノ盡キタル時ニ於テ更
ニ紙數ヲ增加スルコトヲ得サルノ制裁アルニアラザレハ其使用期限内ニ紙數ヲ增加スルモ敢テ妨ケナキモノト爲サ
ルヘカラス故ニ本件ハ到底罪トナル可キモノニアラスト雖モ證券印稅規則第十四條ニ依リ無罪ヲ言渡シタルハ
擬御辯駁ノ裁判ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判スル左ノ如シ
原裁判所カ認メタル事實ニ依リ被告カ所爲ハ法律上罪トシ罰ス可キモノニアラサルヲ以テ治罪法第三百五十八
條ニ依リ無罪ヲ言渡スモノナリ
明治二十一年七月五日
楠枝齊吉

八六七 明治廿二年乙第十四號

八二ノ
七條

凡ソ營業上ニ付テノ規則ハ其營業ニ對スル取締法ニシテ營業者ヲシテ遵守セシムルモノナリ然ハ則本件ノ如キモ
愛知縣士族雜察 立井 信

營業者ニ於テ其代理者ニ賣捌ガシメタルモノナルヤ將タ代理者ニ於テ自己ヲ利スル爲メノ所爲ニ出タルモノナル
ヤヲ審明セサルヘカラス何トナレハ果シテ代理者タル被告ニ於テ自儘ニ己レノ利ヲ計リ賣捌キタル時ハ之ヲ處罰
スヘキモ若シ否ヲシテ營業者カ之ヲ爲サシメタル場合ニ在テハ營業者其責ニ任セサルヘカラスモノナレハナ
リ今ヤ原判文ヲ查閱スルニ被告ハ名古屋始審裁判所所扣所ニ於テ受任賣捌人ノ資格ヲ以テ賣捌キタルモノトミア
リテ其賣捌キヲ爲シタルハ營業人ノ指揮ニ出テタルモノナルヤ又ハ被告ニ於テ自己ノ利ヲ計リ賣捌キタルモノナ
ルヤヲ明察セサルモノナレハ其實實ノ如何ヲ知ルニ由ナキ裁判ニシテ即チ治罪法第四百十條第九項ニ該當スル破
毀ノ原由アルモノトス
明治廿二年一月三十一日

八六八 明治廿二年乙第六百三十號

證券印稅規則第七條民事訴訟用印紙規則第十條等ハ特ニ印紙賣捌免許人ハ勿論何人ト雖モ官許賣捌所外ニ在テ印
紙類ヲ賣捌クコトヲ許サ、ルノ律意ナリト解釋スヘキハ當然ナリ何トナレハ若シ上告論旨ノ如ク單ニ賣捌權アル者
ニ於テ賣捌所外ニ在テ販賣シタル場合ノミヲ制裁スル法律條ナリトセン乎官許ヲ得シテ私ニ印紙類ヲ賣捌ク者巨
多アルモ之ヲ處罰スルヲ得サルニ至ルヲ以テナリ左レハ前說明ノ如ク解釋スルノ至當ナルハ勿論ニシテ則本按被
告和吉代吉於テ通關シテ官許賣捌所外ニ在テ販賣用印紙及ヒ證券印紙ヲ販賣セシ所爲ヲ認メレ以上ハ民事訴訟用
印紙規則第十一條證券印稅規則第五條ヲ適用處斷スヘキモノナルハ論ヲ俟タサルナリ然リ而シテ被告信次郎温彦吉ニ
外タルノ情ヲ知リテ之ヲ買取タル者ハ前販賣用印紙規則第十一條末項ノ制裁スル所ニシテ被告信次郎温彦吉ニ
對シテハ別ニ和吉代吉ノ兩名カ通關賣費ノ情ヲ知テセリトノ理由ヲ付スルヲ要セス只和吉代吉等カ賣捌所外ニ
在テ印紙ヲ賣捌キ居ルノ情ヲ知リテ之ヲ買取タル理由ヲ付スルヲ以テ足ルモノナレハ原判官ハ其職權ニ依リ諸

栃木縣平民宿屋營業 島村代吉 外四名

シノ部

般ノ證據證據ニ心証ヲ資リ以テ判文上被告ノ所爲ニ於ケル事實ノ理由ヲ付シ前ニ掲ケタル法條ヲ適用處斷セシ
ハ相當ナリトス

明治廿二年二月七日

八六九 明治二十二年乙第二二三號

德島縣平民漁業兼酒類請賣商 森 文 次

八二ノ類

治罪法第三百四條ニ規定スルカ如ク裁判所ニ於テ有罪ナルノ旨渡ヲナスニハ犯罪構成上必要ナル事實ノ理由ハ必
ズ明示ナサ、ルヲ得ズ故ニ本案ノ如ク風裁判官ニ於テ被告ハ營業ニ關スル請取書ヲ通報ト爲シ無印紙ノ僞使用シ
タルノ事實アリト認定センニハ其使用年間計帳シタル金高ハ何程ナルヤ本案ノ罪ヲ斷スルニ緊要ナルヲ以テ其記
載金高ハ必ズ明示ナサ、ルヲ得サルモノトス何トナレハ證券印稅規則第二條第一類中ニ(左ニ掲ケル所ノ證券ハ
金高五圓以上ノモノニ限リ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ)トアルニ依レハ營業ニ關スル請取書同壹錢右諸證券ヲ通報
ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ)トアルニ依レハ營業ニ關スル請取書ヲ通報トナス
場合金高五圓未満ナルニ於テハ別ニ印紙ヲ貼用スルニ及ハサルヲ以テ從テ無印紙ノ僞使用シタル逆之ヲ違犯者ナ
リトハ云フヲ得サルニ付記載シタル金高ノ五圓以上ナルヤ否ヤノ事實ハ緊要ナレハナリ然ルニ此必要ナル金高ヲ
明示セズ加之判取帳ト通報トハ其帳簿ノ性質ヲ異ニスルモノナルニ因リ通報ト認ムルニ於テハ被告カ調製シテ何
人ニ渡シタルヤヲ明示セサルヘカラス若シ被告カ帳簿ヲ調製シ置キ金錢物品等ヲ他ニ交付スル場合ニ方リ其受取
人ニ記載調印セシメタルモノナルニ於テハ其性質ノ判取帳タル論ヲ俟タザレハ其帳簿ノ性質及使用等ヲ審明スヘ
キ善ナルニ原裁判官ニ出テテ被告ニ營業ニ關スル請取書ヲ通報ト爲スルハ云々トノミ掲ケ右必要ナル事實ノ理由ヲ
明示セサルハ理由ニ不備アル不法ノ裁判ニ付破毀ノ理由アルモノトス既ニ此點ニ基キ原裁判ノ破毀ヲ認メタルニ
依リ上告諭旨ニ對シテハ別ニ辨明ヲ取ヘス
明治二十二年三月二十一日

八七〇 明治二十二年乙第二二六號

香川縣平民仲買商 海田時治 外一名

八二ノ類

證券印稅規則第一條ニ(凡ソ財産ノ授受及ヒ契約ノ證明ニ用フル證券帳簿ハ此規則ニ循ヒ印紙ヲ貼用スヘシ)又同
第十九條ニ(印紙ヲ貼用スヘキ證券帳簿ニ之ヲ貼用セズ若クハ貼用不足スルモノ云々其證券帳簿ヲ受取タルモノ
亦同)又同第二十一條ニ(此規則ヲ犯シタル證券帳簿ニ請入證人トシテ加印シタルモノハ各正犯ニ係ル材料罰金
ノ半額ニ相當スル材料又ハ罰金ニ處ス)トアリ因是觀之證券帳簿ノ受取主又ハ請入或ハ保證人ハ其證券帳簿ニ相
當印紙ノ貼不貼ヲ調査スルノ責タルモノト得サルヤ勿論ナリト雖モ現ニ其貼用シアル印紙ハ再貼用ニ係ルニ非
サルヤ否ヲ調査セサルヲ得サルノ責任ハ之レアラサルモノトス故ニ其責任ノアラサル限リハ之カ再貼用タルト
知ラスシテ受取リ又ハ保證人トナリタルトテ違法ノ所爲ナリトシ處罰スルト得サルナリト本案原判文ヲ閱スルニ
被告時治ニ於テ岡田多市郎ヨリ金百拾圓ノ賣約約定書ヲ受取ルニ當リ其貼用シアル印紙ノ同人カ再貼用シタルモ
ノナルト又被告勸兵衛カ之カ保證人トナルニ該リ是亦岡田多市郎ノ再貼用ニ係ル印紙ナルトハ俱ニ知リタルニア
ラサルモ六錢ノ印紙ヲ貼用スヘキニ壹錢ノミ貼用シアルヲ知テ受取リ又ハ保證人ニナリタルヤ明白ナレハ此事實
ニ對シテハ宜ク右第十九條同第二十一條ニ依リ不足印紙ノモノト爲シ處罰スヘキニ原裁判官ニ出テテ無印紙ノ
ト爲シ處斷シタルハ上告諭旨ノ如ク違法ニ錯誤アル失當ノ裁判ニ付破毀ノ理由アルモノト判定ス
以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ法リ原裁判官渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決スルト左ノ如シ

海田時治 中山勸兵衛

原裁判官カ認定スル處ニ依レハ被告時治ニ於テ六錢印紙貼用スヘキ金百拾圓記載ノ賣約約定書ニ一錢印紙貼
用ノ儘ニテ岡田多市郎ヨリ受取リ又被告勸兵衛ハ之レカ保證人トナリタルヤ明瞭ナリトス

シノ部

之ヲ法律ニ照スニ證券印稅規則第二條第三項第十一項同第十九條同第二十一條ニ依リ被告時治ハ股稅高五錢ノ二十倍科料ニ被告勳兵衛ハ其半額ニ相當スル科料ニ處スヘキモノニ該當ス
因テ被告時治ハ科料金壹圓ニ被告勳兵衛ハ科料金五十錢ニ處スルモノ也
明治廿二年六月廿二日

八七一 明治廿二年乙第四百七十六號

神奈川縣平民質屋兼酒造營業 金子 鶴 藏

證券印稅規則第二條第一類第二十項ニ所謂金錢諸物品判取帳トハ其金品ノ渡主自ラ之ヲ調製シ置キ金品ヲ渡シタル其證明ノ爲メ受取人ノ署名捺印ヲ要シ而シテ其帳簿ハ金品渡主ノ手許ニ保存スルモノヲ云フニ在リ本案原裁判所カ認定シタル事實ニ據ルニ被告入ハ金錢受取帳ヲ調製シ雇人ヲシテ得意先キヨリ其賣却シタル酒類代價ヲ受取ラシムル程度右得意先キヨリ其拂渡シタル金額ヲ該帳簿ニ記載押印セシメテ所持シタルモノト云フニアレハ判取帳トハ全ク其性質ヲ異ニスルモノナルヤ明白ナレハ被告入ノ所爲ハ證券印稅規則第二條第一類第廿項ニ適當スヘキモノニアラス且該帳簿ハ其記入ヲ爲サシムル者ト之レガ記入ヲ爲ス者トノ間ニ於テ權利義務ノ存スル者ニモアラサレハ被告入ノ備忘録ト云フニ過キシテ之レニ印紙ヲ貼用スヘキノ規則アラサルヲ以テ原裁判所カ無罪ノ旨渡ラシタルハ適法ノ處分ニシテ上告ノ旨趣ハ適法ノ原由無キモノトス
明治廿二年十二月廿三日

(一六二) 商標條例 明治二十一年十二月十八日 勅令第八十六號

股商標條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
勅令第八十六號 (官報十二月二十日)
商標條例

八二ノ一
一六二ノ一
三六七ノ一
三三三ノ一

第一條 自己ノ商品ヲ表彰スル爲メ商標ヲ使用セント欲スル者ハ此條例ニ依リ其商標ノ登錄ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得

商標ハ特別著明ナル圖形字體又ハ其結合ヲ以テ要部ト爲スヘシ

第二條 左ニ掲グル商標ハ登錄ヲ受クルコトヲ得サルモノトス
一 風俗ヲ害スヘキモノ

二 商品普通ノ名稱若クハ内外國ノ國旗章ノミヲ以テ要部ト爲スモノ

三 他人ノ登錄商標又ハ登錄出願以前ヨリ他人ノ使用スル商標ト同一若クハ類似ニシテ同一商品ニ使用セントスルモノ

第三條 商標ノ登錄ヲ受ケント欲スル者ハ一商標毎ニ明細書及見本ヲ添へ農商務大臣ニ出願スヘシ但し其願書明細書及見本ハ特許局ニ差出スヘシ

第四條 商標ノ登錄ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其商標ヲ審査セシメ登錄ヲ許スヘシト査定シタルモノハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ商標原簿ニ登錄シ其登錄證下付ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條 登錄證ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及見本ヲ添へ之ヲ下付スルモノトス

第六條 商標專用ノ年限ハ二十年ト爲シ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス

第七條 商標ノ專用ハ農商務大臣ノ定ムル商品類別ニ於テ出願人ノ指定シタル商品ニ限ルモノトス

八二ノ一
一六二ノ一
四二四ノ一
一六二ノ九
一六二ノ一四
一六二ノ一四
一六二ノ一四

シノ部

六條
八二ノ三ノ二
項六二ノ三
四條八七二
ノ一三條
八二ノ七條
一六二ノ三四
條八七二ノ一
三條八二ノ二
條六二ノ二
三條八七二ノ
一四條
一〇ノ一
條以下八七
八二ノ八條
一六二ノ四
一七條八七二
ノ一三條
八二ノ一三
條六二ノ七
二四條八七
二ノ一四條

第八條 二人以上同一又ハ類似ノ商標ヲ同一商品ニ使用セントシテ登録ヲ出願スル者アルトキハ願書日附ノ先ナルモノヲ登録ス其日附同キモノハ共ニ之ヲ登録セサルモノトス但其出願ヲ取消ス者アリテ出願者一人トナリタルトキハ此限ニ在ラス

第九條 商標ノ登録ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相續者ニ屬スルモノトス

第十條 登録ヲ受ケタル商標ト雖モ第二條ニ該ルコトヲ發見セラレタルモノ又ハ第八條ニ違ヒ登録ヲ受ケタルコトヲ發見セラレタルモノハ其登録ヲ無効トス

第十一條 商標ノ審査査定審判ニ關スル事項ハ總テ特許條例ヲ適用ス

第十二條 登録商標主其營業ヲ賣與讓與シ又ハ他人ト其營業ヲ共ニスル場合ニ限り其商標專用權ヲ賣與讓與シ若クハ共有トナスコトヲ得此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ノ登録ヲ受ケヘシ登録ヲ受ケサル契約ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第十三條 登録ヲ受ケタル商標ト雖モ左ノ場合ニ於テハ登録ノ効ヲ失フモノトス

一 登録商標主相當ノ事故ナリシテ商標登録ノ日附ヨリ六箇月ヲ經テ其商標ヲ使用セサルトキ

二 登録商標主相當ノ事故ナクシテ其商標ノ使用ヲ一箇年間中止シタルトキ

三 登録商標主其商標ヲ使用スル營業ヲ廢止シタルトキ

四 登録商標主其商標ヲ使用スル商品ノ數量産地品質等ニ關シ不實ノ事項ヲ附記シタルトキ

八二ノ一〇
條六二ノ四
條八七二ノ一
條六二ノ二
條八七二ノ
一四條
一〇ノ一
條以下八七
八二ノ八條
一六二ノ四
一七條八七二
ノ一三條
八二ノ一三
條六二ノ七
二四條八七
二ノ一四條

第十四條 登録商標主其專用年限満期ノ後其商標ヲ續用セント欲スル者ハ更ニ其登録ヲ出願スルコトヲ得

第十五條 登録商標主其登録證ヲ毀損若クハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ再下付ヲ出願スルコトヲ得

第十六條 登録商標主其明細書若クハ見本ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ登録ノ効力ヲ全スル爲メ改訂明細書若クハ見本ヲ添へ登録證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其商標ノ要部ニ變更ヲ生スルモノハ此限ニ在ラス

第十七條 商標ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

一 商標ノ登録ヲ出願スルトキ 金壹圓

二 登録商標ノ賣與讓與又ハ共有契約ノ登録ヲ請求スルトキ 金二圓

三 登録證ノ再下付ヲ出願スルトキ 證書一枚毎ニ 金壹圓

四 登録證ノ改訂ヲ出願スルトキ 一商標ニ付商品一類毎ニ 金貳圓

五 審判ヲ請求スルトキ 一商標ニ付商品一類毎ニ 金貳圓

一事件毎ニ

金七圓

第十八條 商標登録證又ハ其改訂登録證又ハ其續用登録證ヲ受クル者ハ其商標ヲ使用スル

物品一類毎ニ登録料金拾圓ヲ納ムヘシ

第十九條 特許局ハ時々商標公報ヲ印刷シ衆庶ノ縦覽ニ供スヘシ其請求者アルトキハ相當

代價ヲ以テ之ヲ拂下クルコトヲ得

第二十條 登録商標ニ關スル書類ノ原本ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ得此場

合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ

第二十一條 登録商標ノ専用權ヲ侵シタル者ハ其商標主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第二十二條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス

第二十三條 他人ノ登録商標ナルコトヲ知り之ト同一又ハ類似ノ商標ヲ同一商品ニ使用シ

テ之ヲ販賣シタル者又ハ情ヲ知り其商品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重

禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

詐欺ノ所爲ヲ以テ登録證ヲ受ケタル者又ハ登録ヲ受ケサル商標ニ登録ノ文字ヲ記シタル

者又ハ情ヲ知り其商品ヲ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テハ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカラサルモノハ商

品ヲ破毀セシム

第二十五條 第二十三條第一項ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ販賣ヲ差止ムル

八二ノ一
二九ノ一
二六ノ一
一六ノ一
一八ノ一
一七ノ一
一六ノ一
一五ノ一
一四ノ一
一三ノ一
一二ノ一
一一ノ一
一〇ノ一
九ノ一
八ノ一
七ノ一
六ノ一
五ノ一
四ノ一
三ノ一
二ノ一
一ノ一

八二ノ一
二九ノ一
二六ノ一
一六ノ一
一八ノ一
一七ノ一
一六ノ一
一五ノ一
一四ノ一
一三ノ一
一二ノ一
一一ノ一
一〇ノ一
九ノ一
八ノ一
七ノ一
六ノ一
五ノ一
四ノ一
三ノ一
二ノ一
一ノ一

八二ノ一
二九ノ一
二六ノ一
一六ノ一
一八ノ一
一七ノ一
一六ノ一
一五ノ一
一四ノ一
一三ノ一
一二ノ一
一一ノ一
一〇ノ一
九ノ一
八ノ一
七ノ一
六ノ一
五ノ一
四ノ一
三ノ一
二ノ一
一ノ一

八二ノ一
二九ノ一
二六ノ一
一六ノ一
一八ノ一
一七ノ一
一六ノ一
一五ノ一
一四ノ一
一三ノ一
一二ノ一
一一ノ一
一〇ノ一
九ノ一
八ノ一
七ノ一
六ノ一
五ノ一
四ノ一
三ノ一
二ノ一
一ノ一

コトヲ得

第二十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十八條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

參照

○關係法令

八七二 農商務省令第三號 明治二十二年

商標條例施行細則ヲ定ムルコト別冊ノ如シ但明治十七年六月太政官第十三號布達商標

登録願手續ハ明治二十二年二月一日ヨリ廢止ス

(別冊)

商標條例施行細則

第一條 商標條例ニ依リ差出ヌ願書ハ第一號ヨリ第五號ニ至ル書式ニ從ヒ之ヲ認メ

同條例第十七條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 明細書ニハ明細書文例ニ準シ商標ノ見本一箇ヲ掲ケ左ノ諸件ヲ記載シテ別

ニ商標ノ見本一箇ヲ添フヘシ

一 商標全部構造ノ詳細説明

二 商標ノ要部

シノ部

三 商標ヲ使用スル商品ノ類別及名稱

四 商標使用ノ方法

第三條 商標登錄願書ハ其商標ヲ使用スヘキ商品類別一類毎ニ各別ニ差出スヘシ

第四條 商標登錄願書明細書及見本ヲ受理シタルトキハ特許局長ハ出願人ニ領收書

ヲ送付シ願書ノ日附ヨリ二十日ヲ經タル後願書日附ノ順ニ從ヒ審査官ヲシテ其審

査ニ着手セシムヘシ

第五條 商標條例第十六條ニ依リ商標登錄證ノ改訂ヲ願出ルトキハ其事由ヲ記載シ

タル願書ニ改訂明細書一通若クハ見本二箇ヲ添へ現商標登錄證並ニ附屬ノ明細書

ト共ニ差出スヘシ

前項ノ出願ヲ許可スルトキハ特許局長ハ此細則第九條及第十條ノ手續ニ依リ改訂

商標登錄證ヲ送付スヘシ

第六條 審査官ニ於テ願書明細書見本等ニ關シ訂正又ハ照會ヲ要スルトキハ特許局

長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ訂正書訂正見本又ハ回

答書ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出サハルトキハ出願ヲ無効トス(二十三年八月

九號ヲ以テ改正)農商務省令第

第七條 出願人其出願中ニ係ル願書明細書見本等ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキ

ハ商標ノ要部ニ變更ヲ生セサルモノニ限り其訂正ヲ請求スルコトヲ得但査定書若

クハ登錄通知書ヲ發シタル後及審判中ニ係ルモノ、訂正ハ特許局長ニ於テ必要ト

認メタルモノ、外之ヲ許サス

第八條 再審査及審判ニ關スル事項ハ總テ特許條例施行細則ヲ適用ス

第九條 商標ノ登錄ヲ許可スルトキハ特許局長ハ登錄料納付用紙ヲ添へテ登錄通知

書ヲ出願人ニ送付スヘシ

出願人前項ノ通知書ヲ受ケタルトキハ登錄料納付用紙ニ商標條例第十八條ノ登錄

料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ明細書一通見本一箇及商標ノ印版ヲ添へ通知

書ノ日附ヨリ九十日以内ニ差出スヘシ此期限内ニ差出サハルトキハ出願ヲ無効ト

ス

第十條 出願人登錄料ヲ納付シタルトキハ特許局長ハ其納付ノ日ヲ以テ商標原簿ニ

登錄シ其旨ヲ出願人ニ通知シ十五日以内ニ商標登錄證ヲ送付スヘシ

第十一條 商標登錄證ハ第六號書式ニ依リ調製シ商標原簿登錄ノ日ヲ以テ其日附ト

爲シ改訂商標登錄證ハ第七號書式ニ依リ調製シ許可ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス

商標條例第十五條ノ場合ニ於テ商標登錄證ヲ下付スルトキハ特許局長ハ其事由並

ニ下付ノ年月日ヲ裏書シ之ニ署名スヘシ(二十三年八月農商務省令第九號ヲ以テ改正)

第十二條 商標條例第十二條ニ依リ賣與讓與又ハ共有ノ登錄ヲ請求スルトキハ第

八號書式ニ從ヒ請求書ヲ認メ同條例第十七條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ

貼用シ約定書ヲ添へテ差出スヘシ(二十三年八月農商務省令第九號ヲ以テ改正)

前項ノ請求アルトキハ特許局長ハ其約定書ヲ契約原簿ニ登錄シ約定書ニ登錄濟ノ

證印ヲ捺シテ之ヲ請求人ニ送付スヘシ

第十三條 商標專用權ヲ相續シタルトキ又ハ登錄商標主氏名ヲ變換シ若クハ其商標ノ使用ヲ廢止シタルトキハ三十日以内ニ其旨ヲ届出ツヘシ

第十四條 商標ノ登錄又ハ商標登錄證ノ改訂ヲ許可シタルトキ又ハ商標ノ登錄ヲ無効トシタルトキ其他登錄商標ニ關シ必要ノ場合ニ於テハ特許局長ハ官報並ニ商標公報ヲ以テ之ヲ廣告スヘシ

第十五條 特許局ニ差出シタル商標ノ印版不用ニ屬シタルトキハ特許局長ハ其請取方ヲ差出人ニ通知スヘシ差出人其通知書ノ日附ヨリ九十日以内ニ請取方ヲ爲サ、ルトキハ特許局長ニ於テ適宜處分スヘモノトス

特許局ニ差出シタル商標ノ印版ハ保管中亡失毀損スルモ辨償ノ責ニ任セス(二十年農商務省令第十號ヲ以テ追加)

第十六條 商標條例第七條ノ商品類別ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一類 化學品及藥劑

酸類、鹽類、アルカリ、漂白粉、護膜、膠、燐、石鹼、酒精、グリセリン、キナエン、モルヒネ、

丁機劑、舍利別、煎劑、丸藥膏藥、藥油、麝香、丁子、食鹽、石灰、艾等

第二類 染料及顔料

藍玉、靛藍、紫根、紅、朱、丹、綠青、燒青、洋靛、白粉、胡粉、藤黃等

第三類 塗料

漆、假漆、油漆、油、漆、油、靴墨等

第四類 香料及燻料

香油、髮膏、香袋、香水、炷香、線香、燻香等

第五類 金屬及其半加工品

銑鐵、鍛鐵、鋼鐵、條鐵、鐵葉、鐵板、鐵線、銅、銅板、銅線、鉛、鉛板、亞鉛、亞鉛板、錫、合金等

第六類 金屬ノ製品

鑄物、打物、彫鏤品及編物等

第七類 利器及尖刃器

鎌、鋤、鋤、鋤、針、釘、剪刀、小刀、剃刀、庖丁、齧嘴等

第八類 貴金屬及其製品(アルミニウム、金、ニッケル、銀ノ製品モ之ニ屬ス)

黃金、銀、四分子、紫銅其他貴金屬ノ合金、鍍品、彫鏤品、モール等

第九類 珠玉及其彫鏤品

珊瑚珠、眞珠、瑪瑙、水晶、黃玉、碧玉等及其模造品

第十類 礦物類(但石炭ハ第五十一類ニ屬ス)

第十一類 石材及其製品並彫鏤品

版石、大理石、磁石、石器等及其模造品

第十二類 漆喰類

漆喰、セメント、石膏等

第十三類 陶磁器類

諸種ノ陶磁器、土器、埴埴、瓦、煉化石等

第十四類 七寶燒

第十五類 玻璃及其製品

玻璃壘、玻璃管、彩色玻璃等

第十六類 機械類

紡績機、裁縫機、製糖機、印刷機、其他諸製造機械、汽機、汽爐等

第十七類 農工器具

犁、鋤、鍬、唐箕、耙、釘拔、鐵錘、繩墨等

第十八類 學術上ノ器械

理化學、醫術及測量等ノ器械

第十九類 度量權衡

第二十類 運送用ノ車類

荷車、馬車、人力車、自轉車等

第二十一類 樂器

琴、三味線、胡弓、笛等

第二十二類 時計及其附屬品

第二十三類 銃砲、彈丸、火藥、烟火等

第二十四類 蠶種紙繭

第二十五類 眞綿及木棉綿

第二十六類 生絲、絹絲及天蠶絲(琴絲、金絲、銀絲モ之ニ屬ス)

第二十七類 綿絲

第二十八類 毛絲

第二十九類 麻絲

第三十類 絹織物

第三十一類 木綿織物

第三十二類 毛織物

第三十三類 麻織物

第三十四類 絹、綿、麻、毛外ノ織物及各種ノ交織物

第三十五類 絲類ノ編物及組物

レース、打紐、網等

第三十六類 被服

諸種ノ衣服、織物製帽子、手套、足袋、織物製雨衣、袴、目利安等

第三十七類 釀造物及飲料

諸種ノ酒、酢、醬油、密柑水、曹達水、氷等

第三十八類 砂糖類

シノ部

諸種ノ砂糖、糖蜜、蜂蜜等

第三十九類 菓子及麵包類

干菓子、蒸菓子、掛ケ物、西洋菓子、飴、砂糖漬等

第四十類 茶及咖啡類

第四十一類 烟草類

第四十二類 穀、菜、種子及菓物類

五穀、蔬菜、菓、菜實、種子、根、球、翅種、マヤシ等

第四十三類 挽粉、澱粉及其製品

諸種ノ挽粉、澱粉、麩類、湯波、蒟蒻、凍豆腐、凍蒟蒻等

第四十四類 味噌、醬物及漬物類

第四十五類 貯藏食品

罐頭、鮑、乾鮑、海苔、昆布、佃煮、罐詰、雲丹、諸種ノ鹹製品等

第四十六類 牛乳製品

凝乳、乳油、乳餅、乳粉等

第四十七類 烟具及袋物

諸種ノ烟管、烟袋、烟管筒、懷中物等

第四十八類 紙及其製品

諸種ノ紙、色紙、短冊、摺紙、壁紙、油紙、漉紙、書簡筒、張文匣、一閑張、元結等

第四十九類 筆、墨類

筆、墨、朱墨、印肉、墨汁、石筆、鉛筆、ペン等

第五十類 皮革及其製品

馬具、革包、文匣、革帶、靴、唐弓、弦等

第五十一類 燃料類

諸種ノ炭、附木、摺附木、燈心等

第五十二類 油蠟類

諸種ノ油、蠟、蠟燭、脂肪等

第五十三類 肥料

干糞、餅粕、油粕、骨粉等

第五十四類 木竹材

第五十五類 木、竹、藤製品及其漆塗、蒔繪品類

指物、挽物、曲物、桶類、編物、組物等

第五十六類 角、甲、牙類ノ製品

第五十七類 藁及草ノ製品

疊表、蓆、編笠、繩、麥藁細工等

第五十八類 傘、杖及履物

諸種ノ傘、杖、下駄、草履、鼻緒等

- 第五十九類 扇子及團扇
 - 第六十類 提燈及ランプ類
 - 第六十一類 齒磨及洗粉
 - 第六十二類 刷子及鬚類
 - 第六十三類 玩具類
 - 花簪、鞠、裝、將、裝、人、形、獨、樂、楊、弓、押、繪、造、花、骨、牌、等
 - 第六十四類 錦繪及寫真類
 - 第六十五類 書籍新聞紙、雜誌類
 - 第六十六類 他類ニ屬セサル商品
- 第十七條 特許條例施行細則第四十四條第四十五條第四十六條第四十七條第四十八條及第五十條ハ此細則ニモ之ヲ適用ス
- (書式畧ス)

○判決例

八七三 明治二十一年乙第二一〇號

大阪府平民金物商 山中直七

商標條例第十六條ニ登錄商標ヲ偽造シテ使用云々トアルハ他人ノ登錄商標ヲ偽造シタル迄ニテハ未タ其罪ヲ完成セサルモ之ヲ使用セル場合ニ在テ該條ノ刑ヲ科スルノ旨意ナレハ其商標ヲ偽造シタルハ假令登錄許可ノ以前ニ在ルモ其使用即チ販賣ハ登錄許可ノ後ニ係ルニ於テハ偽造使用ノ條件ヲ具備シ前條ノ制裁ヲ免カレサルヤ勿論ナリ

然ルニ豫審判官ノ認メタル事實ニ依レハ本案被告カ井村ニ任友トアル印章ヲ偽造セシメ明治十七年十一月中ニシテ之ヲ丁銅ニ丁込ミタルハ同年十二月甲アリテ而テ明治十八年二月廿八日ヨリ同三月廿三日迄又明治二十年一月十八日ヨリ同二月十二日迄ノ年度ニ涉リ該偽造登錄商標ヲ打込ミタル丁銅ヲ販賣シ而テ民事原告人カ商標登錄ヲ得タルハ明治十八年六月五日ナリ然レハ被告カ明治二十年一月十八日以後ノ所爲タル前第十六條ノ犯罪ヲ構成スルハ勿論ナリトス然ルニ豫審判官ノ後段ニ至リ被告カ偽造シテ使用シタル印章ハ告訴人任友吉左衛門於テ明治十八年六月五日商標登錄ノ許可ヲ得タルモノニ係ルモ被告カ各印章ヲ偽造シ丁銅ニ打込ミタルハ總テ告訴人カ專用權ヲ得ルノ以前ニ係ルヲ以テ登錄商標ヲ偽造セシメト爲ス一ヲ得ストアリテ該商標ノ前段ニ於テハ告訴人カ專用權ヲ得タル後ニ至リ使用セシ事實ヲ認メ其後段ニハ專用權ヲ得ル以前ノ所爲ナルカ如ク爲シ輕スク免訴スト旨渡シタルハ事實理由ニ齟齬アル不注ノ旨渡ナルニ原會議局於テモ此不當ナル終結旨渡ヲ認可セシハ上告後段論旨ノ如ク被毀ノ原由アル不注ノ判決ナリトス

明治二十一年三月五日

八七四 明治二十一年乙第四一八號

大阪府平民金物商 山中直七

被告代官大岡實造カ商標條例第五條第十八條ノ解釋ニ關シ及ヒ惡意ノ有無ハ本件ニ必要ナル旨ノ擴張論旨アルモ商標條例第五條ハ商標登錄ヲ願出ルニ就テノ規定ニシテ已ニ商標登錄ヲ許可セラレタルモノアリテ之ヲ取消サレサル限リハ該登錄者タルヤ法律上相當ノ保護ヲ受テ他人其權利ヲ侵害スルヲ得サルモノナリ本案民事原告人任友吉左衛門カ商標登錄ヲ得タルハ明治十八年六月六日官報東段農商務省廣告中(第九二號并柘菱ニ任友ノ二字)云々ト登載シアリテ明治二十年一月二月中被告カ該ニ製造セシ丁銅ニ井村ニ任友ノ缺印ヲ打込ミアリシヲ支那人某ニ賣渡シタル當時ハ右任友ノ商標タルヤ任友吉左衛門カ既ニ登錄ヲ得タル以後ニ係ルモノナルヲ明瞭ナリ然レハ被告ハ該商標ノ他人ノ登錄ニ係リシ事實ヲ知ラスト云フヲ得ス何トナレハ明治十六年第二十三號大政官通告示達

宣布公法令 敵官報發行ニ付從前官省院廳ノ違犯告示ノ儀ハ官報ニ登載スルヲ以テ公式トシ別ニ違又ハ告示書ヲ發付スルニ不及トアリテ前商標省ノ廣告ハ即チ告示ナレハ法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシトスルヲ得ストノ刑注規則ノ制裁ヲ免カレハカササルモノナレハナリ況ンヤ原判文ニ認ムル事實ニ據レハ支那人某ヨリ任友吉左衛門ノ商標アル大丁銅五六万斤ノ法文ヲ受ケ云々トアリテ決シテ惡意ナシト云フヲ得サルニ於テオヤ而テ原判文ニ大府府川口十四番部支那人某ト記スル以上ハ其氏名ヲ掲ケサリシ理由ノ不備ナリト云フヲ得ス又商標條例第十八條ハ他人ノ偽造標識ニ係ル商標ヲ付シタル商標タルノ情ヲ知リテ販賣セルモノヲ科罰スル法注ニシテ本件被告カ所爲ノ如キニ適用スヘキモノニアラサレハ被告代理人カ據報論旨モ到底注ノ原由ナキモノトス

明治二十一年九月二十九日

八七五 明治二十二年乙第四四九號

東京府平民洋酒商

高橋林八郎

商標條例ノ所屬商標トハ其彩色標識等ノ如何ニ拘ハラズ專ラ標章自体ノ主要物形ヲ指スモノナリ故ニ苟クモ他人カ已ニ登録ヲ得テ使用スル商標即チ標章其物ニ同一又ハ模倣類似セシメタル商標ヲ同一商標ニ使用販賣スルニ於テハ該條例ノ制裁ヲ免カレハカササルハ勿論ナリトス而シテ本件ノ如キ被告カ發覺スル滋養麥酒ト名クル數百樽ニ貼用セル標章タルヤ果シテ梅花ニシテ民事原告人カ登録ヲ得タル商標ノ模倣標章ニ類似セサルヤ否ハ事實ノ論點ニ係ルヲ以テ此點ニ就テハ原判官ノ判定ニ任從セサルヘカラス因テ今原會議局ノ判決ヲ閱スルニ被告カ齊林堂ヨリ發覺シタル滋養麥酒ト名クル數百樽ニ貼用セル商標ハ梅花ニ似タルカ如クナレトモ其輪廓二重ノ細黒線ニシテ花弁五箇ニ号レ五箇ノ間各裂折狀ノ白線ヲ畫シテ輪廓ニ重ノ黒線花弁五箇アリ而シテ花弁輪廓ノ間代赭色ニテ裂折狀ノ白線五箇ノ間ヲ繪シテシタルヲ目撃シ且其登錄商標ナルヲ知リナカラ故ラニ類似ノ商標ヲ作リ云々ト其理由ヲ明示シテアリ又據報論旨ニハ被告ハ故ラニ民事原告人カ登録ヲ得テ使用スル梅花ノ商標ニ類似セル梅花ノ

商標ヲ作リ云々トアリテ前會議局ノ判決タルヤ徒ラニ輪廓線狀彩色ノ模倣等ヲ以テ直ニ他人登録ヲ得タル商標ニ類似セル商標ヲ作リタルモノト認メタルニアラサルヤ分明ナレハ假令ヒ梅花標章ハ名ノ同シカラサルカ如ク其物實モ亦タ特異ナリトスルモ標章主要物タル花形ニシテ一見其梅花ナルカ將ク梅花ナルカ判明セサルカ如キハ是レ梅花ノ實形ニアラスシテ則チ梅花ニ類似セル一個ノ花形ヲ作リ標章ト爲シタルモノト云ハサルヘカラス左レハ據報論旨ニハ梅花ノ標章ニ類似セル梅花ノ商標云々トナシ原會議局ハ更ニ事實ヲ覆審シテ被告ハ民事原告人カ登録ヲ得テ使用スル梅花ノ商標ニ類似セル梅花標章ノ標章ヲ作リタルモノト其必要ノ事實理由ヲ詳載シ以テ豫審對辯言渡ヲ認可シタルモノニテ其輪廓線狀彩色等ノ必要ナラサル理由ヲ付シアルモノニ必要ノ事實瞭然タルハ此波ノ判決矛盾セサルノミナラス原判官カ正當職權ニ因リ前掲載ノ如ク事實ノ論斷ヲ決定シタル上ハ孰キニ本院ノ與ヘタル辨明ニ抵觸セリトハ云フヲ得ヌ要スルニ原會議局カ認メタル事實理由上不備離斷ノ虞ナク其所爲ハ刑注第三條ニ從ヒ新商標條例ヲ比照シ輕キニ從ヒ處斷スヘキ輕罪ナリトシ豫審對辯言渡ヲ認可シタルハ相當ニシテ破毀スヘキ原由アラサルヲ以テ前項上會廳官及代官人カ擴張論旨モ共ニ相立タルモノトス

明治二十二年十二月十二日

(一六三) 獸醫免許規則 明治二十三年八月二十七日 法律第七十六號

朕獸醫免許規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム 法律第七十六號 (官報 八月二十八日)

獸醫免許規則

- 第一條 獸醫ノ開業ハ農商務大臣ヨリ獸醫免狀ヲ受ケタル者ニ限ル
- 第二條 獸醫免狀ヲ受ケタルコトヲ得ル者左ノ如シ
 - 一 獸醫免許試驗ニ合格シ其ノ證書ヲ有スル者

シノ部

一三ノ八
一四ノ三
一五ノ七
一六ノ一
一七ノ六
一八ノ二
一九ノ八
二〇ノ四
二一ノ〇
二二ノ六
二三ノ二
二四ノ七
二五ノ三
二六ノ八
二七ノ四
二八ノ〇
二九ノ六
三〇ノ二
三一ノ七
三二ノ三
三三ノ八
三四ノ四
三五ノ〇
三六ノ六
三七ノ二
三八ノ七
三九ノ三
四〇ノ八
四一ノ四
四二ノ〇
四三ノ六
四四ノ二
四五ノ七
四六ノ三
四七ノ八
四八ノ四
四九ノ〇
五〇ノ六

條一六三ノ三
八七六ノ二條

條一六三ノ二條
一六三ノ三條
五六七ノ八條
一〇二ノ二條
一〇二ノ四條
一〇二ノ七條
一〇二ノ九條
一〇二ノ一〇條
一〇二ノ一三條
一〇二ノ一四條
一〇二ノ一五條
一〇二ノ一六條
一〇二ノ一七條
一〇二ノ一八條
一〇二ノ一九條
一〇二ノ二〇條
一〇二ノ二一條
一〇二ノ二二條
一〇二ノ二三條
一〇二ノ二四條
一〇二ノ二五條
一〇二ノ二六條
一〇二ノ二七條
一〇二ノ二八條
一〇二ノ二九條
一〇二ノ三〇條
一〇二ノ三一條
一〇二ノ三二條
一〇二ノ三三條
一〇二ノ三四條
一〇二ノ三五條
一〇二ノ三六條
一〇二ノ三七條
一〇二ノ三八條
一〇二ノ三九條
一〇二ノ四〇條
一〇二ノ四一條
一〇二ノ四二條
一〇二ノ四三條
一〇二ノ四四條
一〇二ノ四五條
一〇二ノ四六條
一〇二ノ四七條
一〇二ノ四八條
一〇二ノ四九條
一〇二ノ五〇條
一〇二ノ五一條
一〇二ノ五二條
一〇二ノ五三條
一〇二ノ五四條
一〇二ノ五五條
一〇二ノ五六條
一〇二ノ五七條
一〇二ノ五八條
一〇二ノ五九條
一〇二ノ六〇條

一 官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 外國ニ於テ官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ト同等以上ノ學則ニ依リ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

第二條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ獸醫免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試驗及第證書又ハ卒業證書ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 獸醫免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登錄シ之ヲ公告スヘシ

第五條 獸醫廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 獸醫免狀ヲ受ケタル者ハ其ノ免狀下付ノトキ手数料トシテ金一圓ヲ納ムヘシ

第七條 獸醫免狀ヲ毀損亡失シ若ハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ヲ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ

書換ノ免狀ヲ受ケタル者ハ免狀下付ノトキ手数料トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ

第八條 獸醫學ニ關シ犯罪若ハ不正ノ行為アリタルトキハ農商務大臣ハ情狀ヲ參酌シ五日以上五十日以下ノ範圍内ニ於テ其ノ業ヲ停止シ情狀ノ最モ重キモノハ之ヲ禁止スルコトアルハシ

條一六三ノ一三
條一六三ノ一五條

條一六三ノ一四
條一六三ノ一五條
條一六三ノ一六條
條一六三ノ一七條
條一六三ノ一八條
條一六三ノ一九條
條一六三ノ二〇條
條一六三ノ二一條
條一六三ノ二二條
條一六三ノ二三條
條一六三ノ二四條
條一六三ノ二五條
條一六三ノ二六條
條一六三ノ二七條
條一六三ノ二八條
條一六三ノ二九條
條一六三ノ三〇條
條一六三ノ三一條
條一六三ノ三二條
條一六三ノ三三條
條一六三ノ三四條
條一六三ノ三五條
條一六三ノ三六條
條一六三ノ三七條
條一六三ノ三八條
條一六三ノ三九條
條一六三ノ四〇條
條一六三ノ四一條
條一六三ノ四二條
條一六三ノ四三條
條一六三ノ四四條
條一六三ノ四五條
條一六三ノ四六條
條一六三ノ四七條
條一六三ノ四八條
條一六三ノ四九條
條一六三ノ五〇條
條一六三ノ五一條
條一六三ノ五二條
條一六三ノ五三條
條一六三ノ五四條
條一六三ノ五五條
條一六三ノ五六條
條一六三ノ五七條
條一六三ノ五八條
條一六三ノ五九條
條一六三ノ六〇條

禁止ノ處分ヲ受ケタル者ハ十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ獸醫免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第九條 第八條ノ禁止ノ處分ヲ爲シタル者ト雖モ三年ヲ經過シタル後情狀ニ依リ其ノ禁止ヲ解クコトアルハシ

禁止ヲ解カレタル者ニシテ再ヒ獸醫免狀ヲ受ケント欲スル者ハ第三條及第六條ニ依ルヘシ

第十條 免狀ヲ受ケスシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 獸醫學停止中其ノ業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 獸醫正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ミタルトキハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十三條 獸醫免許試驗規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附 則

第十四條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ獸醫假免狀ヲ授與スルコトアルハシ

第十五條 第十四條ニ依リ獸醫假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十六條 明治十八年第十七號布達獸醫開業試驗規則其ノ他此ノ法律ニ抵觸スル規定ハ總テ廢止ス

●参照

○關係法令

八七六 農商務省訓令第四十四號 明治二十三年九月二日

北海道廳 府縣

明治二十二年八月法律第七十六號 獸醫假免許規則第十四條ノ獸醫假免許手續左ノ條項ニ依リ取扱フヘシ

但明治十九年^月十二 當省訓令第二十一號 假開業獸醫免許手續ハ廢止ス

獸醫假免許手續

第一條 獸醫假免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ左ノ事項ヲ取調本人ノ願書及履歷

書ヲ添ヘ具狀スヘシ

- 一 營業區域ノ廣袤及地勢ノ峻夷
- 一 區域内牛馬ノ頭數
- 一 營業年限

第二條 獸醫假免許區域内ニ於テ獸醫假免許規則第二條ノ資格ヲ以テ免狀ヲ得タル獸

醫ノ新ニ開業スル者アルトキハ免許年限中ト雖假免狀ヲ返納セシムルコトヲ得

第三條 獸醫假免狀下付ノ出願ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

○伺指令

八七七 獸醫ノ剪蹄ニ關スル件(長崎縣)伺 明治二十三年九月十九日

牛馬ノ蹄剪削等ハ從來獸醫ノ業ニ之レアリ候處本年四月法律第三十一號 蹄鐵工免許規則實施後ハ正格ノ開業

獸醫タリトモ蹄鐵工免狀ヲ有セサル者ハ人民ノ依頼ニ應ジ剪蹄ノ儀相成ラサル哉

農商務省指令 明治二十三年九月二十四日

伺ノ通

(一六四) 獸類傳染病豫防規則 明治二十二年五月十三日 農商務省令第六號

明治十九年省令第十一號 獸類傳染病豫防規則中左ノ通改正ス

第十四條中管内以下ニ告示シ且ノ五字ヲ及ニ但書告示ノ二字ヲ報告ニ改ム

第十六條中報告ヲ得タルトキハ以下農商務大臣ノ允許ヲ得テノ十一字ヲ刪除ス

第十七條中府縣知事ニ於テ以下農商務大臣ノ允許ヲ經タル後ノ十三字ヲ刪除ス

第十八條中府縣知事ハ以下農商務大臣ノ允許ヲ得タル後ノ十三字ヲ刪除ス

○

所得稅法

●参照

○關係法令

八七八 法律第十四號 明治二十二年四月二十二日

縣市制町村制施行地ノ所得稅ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第十四號 (官報四月二十三日)

シノ部

市制町村制施行ノ地ニ在テハ所得稅法第六條ノ屆書ハ町村ニ於テハ町村長ヲ經テ郡長ニ市ニ於テハ市長ヲ經テ府縣知事ニ之ヲ差出シ第七條第八條ノ調査委員ハ郡役所管轄内及市ニ東京市京都市大阪市ハ區ニ置キ其區域内ニ於テ之ヲ選舉シ第九條ノ調査委員ノ選舉人被選舉人ノ現任ハ調査委員會設置區域内トシ第十條ノ場合ニ於テハ府縣知事ハ市ニ東京市京都市大阪市ハ區ニ郡長ハ町村ニ若干名ノ選舉人ヲ定メ第十條ノ區長ノ職務ハ府縣知事之ヲ行ヒ調査委員會ノ決議ニ關シ意見アルトキハ第二條ニ依リ處分スヘシ又第十三條第十四條第十五條第二十三條ノ區長ノ職務ハ府縣知事之ヲ行フヘシ但第十五條ノ場合ニ於テハ府縣知事ハ部下ノ官吏ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

○同指令

八七九 所得稅納人轉居セシ者處分法ノ件(新潟縣)問合 明治二十一年二月二十二日
 所得稅ヲ納ムルモノ納期ニ至リ(例ハ三月一日ヨ)甲郡區ヨリ乙郡區ヘ轉居シタルトキ甲郡役所ニ於テハ既ニ徵稅令ヲ發シタル後ニ付假令本人轉居先ニ納稅度旨申出ルモ取扱上不都合ノ嫌トキニアラサルニ付甲郡區役所ニ於テ徵稅可爲致書ト存候得共疑ニニ涉リ候ニ付一應及御問合候
 大藏省主稅局同答 明治二十一年三月十日
 右ハ既ニ徵稅令發シタル者ニ限リ御見込ノ通り御取扱可然ト被存候

八八〇 所得稅不納者處分方ノ件(兵庫縣)伺 明治二十一年四月十日
 所得稅不納者處分法ノ條去月十七日付ヲ以テ内訓ノ旨モ有之候處他ノ負債ノ爲メ身代限リ處分ニ際會スルトキハ該税金ハ先取ノ權アルモノトシ郡區長ヨリ裁判官ヘ照會シ財產賣代價ノ内ヨリ請取可然哉
 大藏省指令 明治二十一年四月二十六日
 所得稅不納處分ノ件ハ伺ノ通り裁判所ヘ請取ス可シ

八八一 所得稅法第二十三條疑義ノ件(宮城縣)伺 明治二十一年九月十四日
 所得稅届出者中月俸計算ニ際年三百圓ノ所得ヲ得ルトナセシモノ納期前ニ於テ其年額二百圓ニ下レルモノアリ之ヲ稅法第二十三條ニ照ヒ未段ニ照セハ免稅スヘキモノ、如シト雖モ前段ニ據レハ所得金高十分ノ五以上ヲ減損シタルモノニアラサルハ申出ルヲ得サルニヨリ之ヲ免稅スヘカラストナストキハ十分ノ五以上ヲ減損シテ所得三百圓ヲ缺クモノニ對シ權備ヲ失フノ甚シキモノニ似タリ
 右ハ免稅範圍内ノモノト心得可然哉
 大藏省指令 明治二十一年九月二十日
 所得金高十分ノ五以上ヲ減損シタル場合ヲ除ク外ハ免稅申出ルヲ得ス

八八二 所得稅法ニ關スル件(愛知縣收稅長)問合 明治二十一年九月十七日
 所得稅法第二十三條ニ納期前ニ於テ十分ノ五以上ヲ減損シタルトキハ云々トアリ右ハ稅法上納期ハ九月トアルニ據リ則チ九月三十日迄ヲ指サレタルモノト信ス然ラハ假令九月ニ入ルモ未タ税金上納セサル前ノ減損ハ第二十三條ニ據リ不該且官吏等ニシテ單ニ俸給ノミヲ以テ納人トナルモノハ營業者一時損失ト異リ減損ノ月ヨ

リ至ク所得ノ見込ナキモノニ付總金高ニ對シテ十分五以上ノ減額ニアラサルモ左ノ如キ類ハ第二十三條ニ據リ

第一項ハ前後半年分トモ減額額ニ對シ納稅セシメ第二項ハ前後トモ免稅シ不苦哉

第一 三十五圓月給ノモノ八月二日非勤當初届出金高即チ本年確定高四百二十圓ナリ非勤ニ付減額額百十五圓

十七圓八圓ヲ差引三百四圓トナルノ類

第二 二十六圓月給ノモノ九月十五日二十一圓月給ニ減額當初届出金高則チ本年確定高三百十二圓ナリ減額ニ

付減額額十七圓五十一錢ヲ差引二百九十四圓トナルノ類

大藏省主稅局回答 明治二十一年 九月二十四日

前段ハ御見込ノ通リ後段管吏云々ハ減免ノ限ニ無之ト存ス

八八三 所得稅取扱ノ件(栃木縣)伺 明治二十二年 八月十三日

甲府縣市郡ノ所得稅調查委員會ニ於テ所得稅ノ調査ヲ了シ未タ稅法第十七條ノ違ヲナサヘル以前轉居届出ルモ

ノアルトキ之ヲ違未納ノ儘シ市郡ヘ引繼クトキハ市郡ニ於テ稅法第十七條ノ違ヲナシ稅法第十九條ノ申出モ

シ府縣ニ於テ處理セサルヲ得ス如斯スルトキハ市郡ハ調査上ノ事實ヲ知ラスシテ等級金額ヲ定メ又乙府縣ハ

甲府縣市郡現在ノ際届出ニ係ル所得ノ當否ヲ調査セサルヲ得ス右ハ實際爲シ得サル儘ニ付前述轉居ノ場合ト

雖モ稅法第十七條ノ違書ハ甲市郡ニ於テ之ヲ發シ稅法第十九條ノ申出モ甲府縣之ヲ處理スヘキ儘ト心得可然

哉

大藏省指令 明治二十二年 八月十七日

稅法第十七條ノ違書ハ市郡ニ於テ之ヲ發スル儘ト心得ヘシ

八八四 所得稅納付方並ニ公民權ノ件(靜岡縣)伺 明治二十二年 七月十日

第一條 所得稅法第一條但書ニ同居ノ家族ニ屬スルモノハ總テ戶主ノ所得ニ合算スルモノトスト有之戶主ニ所

得ナキモノニ就キテハ明文ナキヲ以テ一家ノ生計ヲ主擔スル非戶主ノミニ所得アル場合ハ非戶主ノ名義ヲ以

テ納付セシムル儘ニ可有之歟

第二條 所得稅納付ヨリ生スル町村制第七條第三ノ要件ハ戶主非戶主ヲ問ハス之ヲ納付スル名義ノモノニ具ハ

ルモノニ可有之歟若シ然リトセハ戶主ニ些少ノ所得アリ非戶主ノ所得數百圓ナルモノ之ヲ合算シテ戶主ノ名

義ヲ以テ納付スルトキハ非戶主ハ他ノ要件ヲ具フルモノト雖モ公民權ハ有セサル儘ニ可有之歟

大藏省指令 明治二十二年十月三十一日 (内務省通達)

第一條ハ所得稅法施行細則第一條三號ヲ取扱フヘシ

第二條ハ伺ノ通リ

新聞紙條例



判決例

八八五 明治廿一年乙第三百十四號

和歌山縣士族和歌山日々新聞幹事

同縣平民同新聞編輯人

東畑芳太郎

中松小翠

凡ソ新聞紙條例ノ如キハ畢竟一ノ取締ヲタレハ該條例規定ノ條項ニ違犯シタル時ハ其有意無意ヲ問ハス直ニ犯罪

ヲ構成スルモノニ付本案被告兩名於テ和歌山日々新聞編輯事務擔當中明治廿一年三月十七日發兌同新聞紙第二千

五百九十四號編輯欄内ニ和歌山縣會議長ノ請求ニ係ル正誤文ヲ掲クルニ當リ該欄ノ首部ニ掲ケスシテ其末段ニ登

載シ之ヲ發行シタル上ハ假令ヒ翌日ニ翌リ首部ニ掲載スヘキモノナル旨ヲ改正セルモ已ニ條例違犯ノ罪ヲ成立シ

タル後ニ係ルヲ以テ該改正タルヤ等モ効力ナキハ勿論無意犯トシテ其罪ヲ免カル、ヲ得サルモノナレハ上告第二
 附七ラレタル議案及各議員ノ意見並議案可否決ニ歸セシ模倣ノ全体若クハ概略ヲ記載シタルモノト爲スニハ會議ニ
 カラス然ルニ前段原判文ニ認ムル處ニ據レハ被告兩名於テ同新聞第二千五百九十三號雜報欄内ニ諸問件可決ト題
 シ「別項ニアル如ク昨日ノ常置委員會ニ附セラレシハ能野中邊道路改修工事ニ關スル事件ト外一件ナリシカ同會
 ニ於テ兩件共可決ナシタリ」トアリ右事實ノ如キハ前ニ說明セシ議事ノ概略ヲ記載シタルト云フヘキモノニアラ
 ス然レハ即チ第十八條ニ違反セリト論スヘカラサルハ勿論他ニ謂スヘキノ法律正條ナキモノナルニ原判官於テ該
 事實ニ對シ輕ク新聞紙條例第十八條第二十九條ヲ適用處斷シタル一部分ハ上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ニ係ル不
 法ノ裁判ナリトス因テ治罪法第四百三十一條一則リ原裁判ノ被告兩名カ第一事實ニ對シ言渡シタル一部ヲ破毀シ
 本院於テ直ニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

中松 小翠

東畑 芳太郎

右兩名カ和歌山日々新聞紙第二千五百九十三號雜報欄内ニ諸問件可決ト題シ記載シタル事實ハ原裁判官ノ認ム
 ル處ニ據リ該事實ノ所爲ニ對シテハ法律謂スヘキ正條ナキモノニ付治罪法第三百五十八條ニ依リ無罪ヲ言渡ス
 モノナリ

明治廿一年五月廿八日

〔八八六〕明治二十一年乙第百五十一號

八八八ノ
二條ノ五

萬新聞紙條例第二條ニ記載ノ種目トアル其訓注ニ政治法律農工商業等ノ類トアルハ其列ヲ揭示シタルニ過キス
 レテ各新聞紙ノ種目トスル處一ニ此三四ノ例ニ止マラス本件東北ノ煙草商ノ種目トシテ管テ發行届ヲ爲シタルハ

宮城縣平民 中村 眞龍

論說詩歌會報雜報寄書問答傳説ノ七種目ナリ然ルニ後チ之レニ敘理普說雜錄廣告ノ表記ヲ加ヘタルモノナ
 ルヤ既經書類上明白ナリ今上告ノ旨趣トスル所ハ其後チニ加ヘタル四ケノ表記ハ種目ト云フヘキモノニ非スト論
 告スルニアルモ其四ケノ表記ハ七種目中ノ小區分ニアラサルヤ否之ヲ制定スルハ事實ニシテ其事實ノ判定ハ原裁
 判官ノ職權ニ任從シタルモノナルヲ治罪法第四百十六條注文ノ如クナレハ其判定ヲ爲スニ當リ不法ノ處分アルニ
 アラサルヨリハ以テ上告ノ原由ト爲スヲ得ヌ要スルニ被告人カ論旨ノ旨趣ハ治罪法第四百十條ノ各項ニ適當スヘ
 キ上告ノ原由ニ之アラサルモノトス

明治二十一年三月廿九日

〔八八七〕明治二十一年乙第二十八號

佐賀縣士族新聞社主兼印刷人 石橋 要一郎
 同縣士族新聞編輯人 久保 利吉

今ヤ判文ヲ查スルニ被告等カ印刷ニ付シ世ニ公ニセント希圖シ佐賀新聞ヲ以テ廣告セシ日本商法草按ナル者ハ未
 タ式ニ依リ公布セザル官司ノ文書ナレハ之ヲ草按ト稱ス可キハ勿論ナリ而シテ該文書ノ目次ヲ摘載セシモノナレ
 ハ即チ其大意ヲ登錄セシモノナリ故ニ被告カ商法草按ナル者ハ已ニ脱稿上梓シタル一書ナレハ草按ニアラス云々
 其公文ノ趣旨ヲ盡シタルモノニ非ラス云々ノ上告論旨ノ如キハ要スルニ原判官カ正當ノ職權ヲ以テ爲セシ事實ノ
 判定ニ對シ徒ラニ苦情ヲ分疏スルニ外ナラサレハ治罪法第四百十條各項ニ規定セル上告適法ノ原由ナキモノト判
 定シ治罪法第四百二十七條ニ依リ本案上告ハ之ヲ棄却スルモノナリ

明治二十一年六月廿一日

〔八八八〕明治二十一年乙第六五一號

長崎縣平民活版印刷業 古岡 太一郎

シノ部

八八ノ
一八條

凡ソ新聞紙條例ノ新聞紙又ハ雜誌ト云フヲ得ヘキモノハ政治經濟統計官令其他附般ノ學術等時事ノ要説ヲ揭
ケ社會ノ現況ヲ播散シ之ヲ必報スル如キモノ云ヒニテ單ニ衆人ノ廣告ノミヲ蒐集シ之ヲ編纂シ配付スルカ如
キハ之ヲ新聞紙又ハ雜誌ト云フヲ得ヘキモノニ非ズ然レトモ依頼者ヨリ一定ノ廣告料ヲ受ケ其廣告ヲ蒐集編纂シ
發行シテ以テ營業トナス者ハ出版條例第一條中文書ヲ編纂シ頒布スル者ト云フニ適當スヘキモノナリトス而シテ
其所爲タル同條例第八條ノ社則規則引札體ノ番付普通ノ書式アル諸種ノ用紙又ハ證書ノ類ヲ自用ノ爲メ發行ス
ルモノトハ其性質ヲ異ニスルヲ以テ同條例第三條ニ據リ出版者ヲ爲サハルヘカラス即チ本按被告ハ衆人ノ廣告ヲ
編纂シ長崎知事志ト題シ之ヲ發行シナカラ其届出ヲ爲サハルモノナルヲ以テ出版條例ニ依リ處斷スヘキモノナリ
トス依テ被告カ無罪ナリトノ附帶上告趣旨ハ相立サルモ原控院力此等ノ事實ヲ認メナカラ新聞紙條例ヲ適用所
斷シタルハ原控院檢察長上告論旨ノ如ク疑律錯誤ノ裁判ナリトス

原裁判所カ認メタル事實ニ依リ被告カ所爲ハ出版條例第三條ニ違犯スルモノナルヲ以テ同第二十一條ニ照シ
罰金五圓ニ處スルモノナリ
明治二十二年一月二十六日
古岡六一郎

八八九 明治二十二年乙第五十六號

探證并事實ノ判定ハ原裁判官ノ特有職權ニシテ他ヨリ漫ニ容喙スルヲ得サルモノナリ今ヤ被告ハ本案事件ノ終審
裁判官ニ對シ前掲ノ如ク其不法ヲ駁フルモ此ニ原判文ヲ檢スルニ被告ハ明治二十一年八月三十一日發行ノ新報
知第二十號雜誌欄内本社ハ知ラヌト標題シタル項中三十八個ノ圖印ヲ置植シタルハ所管廳廳長始審裁判所依事

八八ノ
一二條

局ニ納付セシモ同日發行同新聞同欄標題項中六ヶ所ニアル三十八個ニ大谷派普通學校ノ款頭云々ノ
三十八個ノ活字ヲ置植シ之ヲ中田政明外一ヶ所ニ配付シナカラ前所管廳廳長并裁判所檢事局等へ納付セザリシモノ
云々ト掲載シアリテ事實ノ理由上別ニ不備離離ノ點アルヲ見サルノミナラス假令其紙數ノ多寡ニ拘ハラズ其筋へ
納付セシメテ之ヲ配送セシモノナレハ此所爲ニ對シ現行新聞紙條例第十二條第二十七條ヲ適用所斷シタルハ相當
ニシテ疑律ニ鑄罪アルモノニアラス左レハ被告ニ下付シタル言渡書原本三假令三十六個ト記載シアルモ違ハ三十
八個ノ謄寫ニ出テシモノナレハ之カ更正ヲ求ムルニ止マリ其他ノ上告論旨ハ要スルニ探證并事實判定ノ當否ヲ非
難スルニ外ナラスシテ上告違法ノ原由ナキモノトス
明治二十二年二月二十一日

八九〇 明治二十二年乙第三七五號

新聞紙條例第三條ニ規定スル發行ノ時期變更トハ過去ノ事ヲ指シタルモノニシテ其時期ヲ發行スルヲ以テ完成
スルモノニ付其ノ發行ノ日ヨリ一週日以内ニ届出ヘキヲ當然ナリトス本案原判文ニ就キ其認メタル事實ニ依レハ
被告ニ於テ明治二十二年七月二十七日ニ在リ已レ發行人トナリ第三活眼ト題スル政治雜誌ノ第一號ヲ明治二十二
年八月十日ニ發行スヘキ旨ノ届出ヲ爲シ置キタルモ同日之ヲ發行セヌ同月二十日ニ至リ初テ發行シ其翌二十一日
ニ發行時期ノ變更ヲ届出テタルモノニシテ即チ一週間内ニ届出タルモノナレハ此事實ニ對シ法律規則ニ違背セシ
廉之レナシトシ治罪法第三百五十八條ヲ適用シ無罪ヲ言渡シタルハ相當ノ疑律ニシテ錯誤ナラサルモノトス因テ
上告ノ趣旨ハ其効ナレトス
明治二十二年九月二十一日

八九一 明治二十二年乙第四七一號

シノ部

岐阜縣平民農 堀 三 作

八八八ノ
一三條二
項八八
五

上告第二條ニ申立ル所アリト雖モ抑モ新聞紙編輯人タルモノハ新聞紙條例ヲ遵守ス可キハ勿論ニシテ苟モ同條例ニ違フタルトキハ其制裁ヲ免レズ而シテ同條例ハ畢竟一ノ取締法ナレハ該條例規定ノ條項ニ違犯シタルトキハ意思如何ヲ問ハス直チニ犯罪ヲ構成スルモノナリ然ハ則被告於テ第三號飛日報ト稱スル新聞紙ノ編輯事務擔當中明治二十二年九月十八日發覺同新聞紙第四十七號ニ高富警察署長ノ請求ニ係ル正誤文ヲ掲クルニ當リ前同一欄内ノ首部ニ掲ケスシテ其欄外ニ登載シ已ニ之ヲ發行シタル以上ハ假令其欄外ニ掲載セシハ請求人ノ稱メニ依ルモノトスルモ到底被告ハ該條例第十三條違犯ノ罪ヲ免カレサルモノトス如何トナレハ他ノ請求アレハトテ該規定ヲ左右スルコト得サルモノナレハナリ要スルニ被告カ上告論旨ハ前二所謂ル承審官ノ職權内ナル採證ノ當否事實ノ判定ヲ非難スルニ過キサルモノニシテ上告適法ノ原由ナキモノトス

明治二十二年十二月十九日

出版條例

參照

○關係法令

八九二 內務省令第一號 明治二十三年三月二十五日
明治二十一年內務省令第一號及第三號中左ノ如ク改正追加シ本年四月一日ヨリ施行ス

內務省令第一號

第七條 版權登錄料並登錄證再度下付手数料ハ現金ヲ願書ニ添ヘ納付スヘシ
現金ハ爲替ヲ以テ納付スルコトヲ得此場合ニ於テハ內務省總務局圖書課宛東京郵便電信局支拂ノ郵便爲替券ヲ願書ニ添ヘ納付スヘシ

四五六四ノ七條

四五六五ノ三條

前項ノ版權登錄料並手数料ヲ納付スルトキハ版權登錄願又ハ登錄證再度下付願ノ外ニ第八書式ニ準シ納付書ヲ差出スヘシ
(書式略之)

內務省令第三號

第三條 第一ノ手数料並第二條ノ免許料ハ現金ヲ以テ納付スヘシ
現金ハ爲替ヲ以テ納付スルコトヲ得此場合ニ於テハ內務省總務局圖書課宛東京郵便電信局支拂ノ郵便爲替券ヲ以テ納付スヘシ
前項ノ手数料並免許料ヲ納付スルトキハ內務省令第一號第八書式ニ準シ納付書ヲ差出スヘシ

○判決例

八九三 明治二十一年乙第十八號

右秀造カ被告事件ニ付明治廿年十二月十九日浦和輕鐵裁判所熊谷支廳於テ被告ハ秩父新道開墾費不足額徵收ノ件ニ付該郡長ヨリ議案ヲ付シ町村聯合會ニ議決セシメタルヲ不法トナシ郡長鎌田沖太ニ對シ訴訟ヲ起サント不法ノ議決取消ノ訴訟ト題スル訴狀ヲ造リシモ猶未タ裁判廳ニ提出セサル中世人ニ起訴ノ理由ヲ示スノ念慮ヲ以テ內務省ニ届出テス其訴狀竊一千部ヲ朝野新聞社ニ託シ印刷セシメタル未町田嘉之助外二名ニ凡五百部ツ、ヲ配布シ廣ク衆人ニ分配セシメ又自ラ七十部ヲ數十人ニ分配シタルモノト判定シ明治十六年第二十一號布告出版條例則第一條改正條款ニ照シ現存ノ印本六百七十九部ヲ沒收スト旨渡シタル裁判ヲ不法トナシ被告ハ上告セリ其要旨抑モ被告カ印刷セシハ自己ノ權利ニ關スル不法議決取消ヲ求ル訴狀ニレテ自己ノ著作シタル圖書ニアラス代官人ノ著作セシモノナルハ誠ニ明瞭ナリ而シテ圖ヨリ賣物ニアラス只タ同志者ノ求メニ應シ印刷頒與セシ迄ナレハ條例第一條明文外ノモノタルハ勿論則第七條ニ法司圖書犯則ノ訴ヲ受タレハ云々トアルニモ拘ハラヌ法司ノ未タ

八九ノ一三條一七條

シノ部

既ヲ受ケヌ又々其論決ニ先チ該印刷物ハ十一月廿日ニ在テ大宮警察署ニ没收セラレタルハ頗ル不法ノ處分ト
考査シ茲ニ上告シテ破毀ヲ求ムト云フニアリ

御手人原被告吉田平三郎ハ上告其理由ナキ旨答辯セリ

大審院於テ治罪法第四百二十五條ノ式ヲ履行シ審理判決ヲ爲ス左ノ如シ

上告事件ヲ按ズルニ本案被告カ印刷ニ付シタルハ不法議決取償ヲ求ムル訴狀ニシテ自著ノ圖書ニアラスト云フト
雖モ被告モ被告名義ヲ以テ自己ノ意見ヲ廣ク公衆ニ開ク爲メ記述セル書類ヲ無届ニテ印刷ニ付シ之ヲ他人ニ頒與
シタル上ハ出版條例第一條ノ制裁ヲ免カルヘカラス如何トナレハ假令ヒ其文章ハ他人ノ作爲ニ係ルモ其書ニ
記名セルハ即チ被告カ名義ヲ用ヒ且ツ其書タルモ單ニ裁判所ニ提出スルニアラスシテ世ニ公ニスルノ目的ニ出テ
シモノナレハ原則官於テ正當權限ヲ以テ請救ノ證據ニ心証ヲ資リ無届ニテ圖書ヲ出版シタルモノト判定セシモノ
ナレハナリ然リ而シテ法明カ未タ斷テ受ケサル前ニ警察署カ之ヲ没收シタルハ違法ノ處置ナリト云フモ治罪法第二
百五條ニ第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察署モ亦タ假リニ之ヲ行フ得トアルニ因リ現行犯罪
アリト思料セシ時ハ犯斯ニ證據ノ證據物件等ヲ押收スルハ司法警察官カ當然ノ職務ナルノミナラス法明ノ命ニ因
リ印本等ヲ勾收スルハ出版條例第七條ノ規定ニ係レハ該官於テ一時之ヲ押收シタルハ固ヨリ相當ノ處置ニシ
テ著モ違法ノ處アルヲ見ヌ要スルニ上告論旨ハ治罪法第四百十條中ニ適合スルノ原由ナキモノトス

明治二十一年一月廿一日

八九四 明治二十一年乙第三九七號

島根縣平民 大國由太郎

若由太郎カ出版條例違犯被告事件ニ付明治二十一年五月廿四日今市治安裁判所ニ開キタル松江縣裁判所ニ於テ
審理ノ末被告ハ明治二十一年二月上旬ヨリ同年三月中旬迄ノ間ニ於テ普通ノ書式アル田租并ニ地方稅額收書機用
紙摺泊入用書用紙其他上納金受領證用紙等都合十三種ヲ需用者ノ依頼ニ應シ活版ニテ印刷シタルノ事實ハ明瞭ナ
リト雖モ右ハ未タ文書圖畫ト名稱スヘキ者ニ非サレハ法律上罰スヘキ正條ナキヲ以テ刑法第二條ニ依リ無罪ト言
渡シタリ

八九ノ
二七八

同裁判所檢事田澤太郎カ上告ヲ爲スノ要領出版條例第二條同第八條ニ依レハ凡ソ出版ニ付スル文書圖畫ハ其何ク
ルヲ問ハス悉ク本條例各條ニ依ルヘキモノ單ク第八條ノ文書ニ至テハ第三條第六條ニ據ルヲ要セサルト明示シタ
ルモノニシテ第八條ノ文書ト雖モ無論他ノ七條等ヲ違奉スヘキハ復タ疑ヲ容レサル處ナリ然ラハ則チ普通ノ書式
アル用紙類ヲ印刷シテ條例第七條ニ背キ印刷ノ年月日及ヒ印刷者ノ氏名住所ヲ記載セサル場合ニ於テハ警ヨリ
條例第二十二條ノ制裁ヲ免レサルハ理ノ當然ナリ是故ニ被告ノ所爲條例第七條ニ背キタルモノトシ其裁判ヲ請求
シタルニモ拘ハラズ原則官ハ被告ハ明治二十一年二月上旬ヨリ云々十三種ヲ需用者ノ依頼ニ應シ活版ニテ印刷
シタル事實ハ云々文書圖畫ト名稱スヘキ者ニアラスト言渡シタルモ何故ニ文書圖畫ト名稱スヘカラサルヤ又果テ
印刷ノ年月日及ヒ印刷者ノ氏名等ヲ記載セザリシヤ否ナキ事實ノ理由ヲ明示セス刑法第二條ヲ適用シ無罪ト言渡
シタルハ治罪法第四百十條第九項ニ該當ス因テ原裁判ノ破毀ヲ求ムト云フニ在リ

御手人被告由太郎ハ之レニ答辯セズ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ判決スルト左ノ如シ

出版條例第七條ニ其發行ト否トヲ問ハス印刷ノ年月日及ヒ印刷者ノ氏名住所ヲ記載シ云々ト命シタルハ同條例第
三條ノ用ヲ爲シ發行ヲ爲スモノ又ハ發行ヲ爲スニ於テハ本條例ヲ遵守スヘキモノニシテ實際發行ヲ爲サハルモノヲ
指シタル注意ナルヲ以テ第八條ニ依リ其届出ヲ要セサル書類ニハ其印刷者於テモ第七條ニ從ヒ年月日等ノ記載ヲ
要セサルモノトス本案原判文ヲ閱スルニ(被告ハ明治二十一年二月上旬ヨリ同年三月中旬迄ノ間ニ於テ普通ノ書
式アル田租並ニ地方稅額收書機用紙摺泊入用書用紙其他上納金受領證用紙等都合十三種ヲ需用者ノ依頼ニ應シ活
版ニテ印刷シタルノ事實ハ云々)トアリテ被告カ印刷シタルモノハ同條例第八條ニ所謂諸種ノ用紙ト云フヘキモ
ノナレハ同條例ニ因リ印刷ノ年月日等ノ記載ヲ要セサルモノトス故ニ此事實ニ對シ無罪ト言渡シタル原裁判ハ其
當ヲ得タルモノナリ以上ノ如ク被告カ所爲ハ法律上罰スヘキモノニアラサレハ判文上其印刷ノ年月日及ヒ氏名等

シノ部

ヲ記載セザリシヤ否ヤノ理由ヲ明示セサルモ之ヲ事實理由ノ不備ト爲シ破毀スルノ必要ナキモノトス
明治二十一年九月二十九日

八九五 明治二十一年乙第三七〇號

千葉縣平民 平柳重三 外一名

八九ノ三條

出版條例第八條ニ所謂引札ナルモノハ商店開業等ノ旨趣ヲ單純ニ報告スルモノニ止マリ其文中論文ト見ルヘキ文章ヲ掲載スルモノ、如キハ引札ト稱スルヲ得サルヤ勿論ナリトス本案原裁判官渡邊ニ明掲スル被告平柳重三カ出版三條九條ノ議員候補名會設立趣意書ノ如キハ單純ナル廣告引札等ノ類ニアラスシテ議員選舉ノ宿弊ヲ論シ之ヲ除カシカ爲メ該會ヲ設立セントノ旨趣ニ出タルモノニ付同條例第三條ノ規定ニ從ヒ其筋へ届出サルヲ得サル文章ナルヲ以テ被告重三カ第一論旨中及ヒ被告吉之助カ第一點ニ於テ同條例第八條範圍内ノモノナリトノ上告ハ相立タサルモノトス

明治二十一年九月二十九日

八九六 明治二十二年乙第七號

大坂府平民製本職 谷口光三

八九ノ三條
八九ノ二條
八九ノ一〇條

抑文書等ヲ出版シナカラ納本ヲナサズ發賣シタルノ所爲タルヤ舊出版條例ニ在テハ同第二十条ニ背キタルモノトシ同條例第一條ノ制裁ヲ覺クヘク新出版條例ニ在テハ同第三條ニ違フタルモノトシ同第二十一条ノ制裁ハ免ル、コトヲ得サルモノニシテ其所爲新出版條例中ニ之ヲ罰スルノ正條ナシト云フヲ得サルモノトス何トナレハ新出版條例第三條ニ規定スルカ如ク單ニ出版用書ニミ呈出シテ足ル、モノニアラス其用書ニ製本三部ヲ添へ之ヲ届出始テ該規定ノ手續ヲ盡シタルモノト云フヲ得ルモ其製本ヲ納メサレハ其届タル効ナクシテ之カ届出ヲナサハル

ト毫モ異ナルコトナケレハナリ今原裁判官渡邊ニ就キ其認メタル事實ニ依レハ被告光三ニ於テ諸神拜禮記ト題スル小冊子ヲ出版シナカラ單ニ其旨届出テタルノミニシテ之カ納本ヲナサハル以前ニ在テ發賣シタルニ在ルヤ明カナルヲ以テ宜シク新舊法ヲ比照シ之ヲ處斷スヘキニ新出版條例ニハ之ヲ罰スルノ正條ナシトシ無罪ヲ言渡シタルハ上告論旨ノ如ク擬律ニ錯誤アル不法ノ裁判ナリトス然レトモ刑法第三條第二項ニ基キ新舊法ヲ比照スルニ舊出版條例ニ在テハ同條例第二十條同條例第一條ニ依リ其刻版印本及ヒ賣得金ヲ沒收スヘク新出版條例ニ在テハ同條例第三條同第二十一条ニ依リ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處スヘキモノトナリ即チ舊法輕キヲ以テ其舊出版條例ニ依リ處斷スヘキモノナレトモ其刻版印本及ヒ賣得金ノ有無如何ノ明示ナケレハ直ニ擬律ヲ更正スルニ由ナキ理由不備ノ裁判ナルニ付破毀ノ原由アルモノト判定ス

明治二十二年五月二十五日

八九七 明治二十二年乙第三六七號

山口縣協同印刷會社員 林 猪 作

出版條例第七條ニ(文書圖畫ヲ印刷スル者)トハ其文書圖畫ノ印刷スルコトヲ擔當シ即チ引受タル其印刷ノコトニ關シ責任ヲ負フ者ノ謂タレハ假令印刷ノコトノミヲ引受ケ著作者等ト擔當ヲ共ニシ又ハ出版ノコトニ關シ協議ヲ受ケル等ノコトナキモ無論該條ニ包含スルヤ勿論ナリトス今原裁判官カ認定シタル事實ニ依レハ被告人ニ於テ新田孫一ナルモノ、依頼ニ應シ新板傳死歌ト題スル歌ノ印刷ヲ爲シナカラ之レニ印刷ノ年月日印刷者ノ氏名住所等ヲ記載セサルヤ明瞭ナルノミナラス原裁判官カ探査シタル證據ニ徴スルモ被告ハ現ニ引受ケタル印刷ノコトニ關シ責任ヲ負フハ勿論該印刷費ノ如キモ亦之ヲ受領シアルコト判然タレハ旁上告論旨ハ相立タサルモノトス

明治二十二年九月十日

八九八 明治二十二年乙第四五六號

シノ部

鳥取縣平民今日語發行兼印刷人

河邊半三郎

外一名

八九ノ
三三五
九條四五
六四

出版條例第二條但書ニ依レハ時々發行スル雜誌ノ類ニシテ專ラ學術技藝ニ關スル事項ヲ記載スルモノハ特ニ内務大臣ノ許可ヲ得タルニ於テハ出版條例ニ依リ出版スルコトヲ得ルモノニ付キ其許可ヲ得テ出版スルトキハ同第三條ニ基キ發行ノ日ヨリ到達シ得ヘキ日數ヲ除キ十日前ニ在テ製本三部ヲ添ヘ内務省ニ届出テサルヲ得サルヤ勿論ナリ何トナレハ該第三條ハ第二條但書ニ依テ出版スルモノト否ラサルモノトヲ問ハス其届出方ヲ一般ニ命シタル法律ナルノミナラス第二條但書ノ許可ヲ得ルハ單ニ新聞紙條例ニ依ルヘキヲ依ラスシテ出版條例ニ依リ出版スルノ手續ニ外ナラザレハナリ故ニ該第三條ニ規定スル届出方ノ手續ヲ省署セント欲セハ先ツ同第九條ニ基キ明治十一年一月内務省令第一號第四條ニ依リ内務大臣ノ許可ヲ受ケタル上ニアラザレハ能ハサルモノナルヲ以テ若シ其省署ノ許可ヲ得ステテ右第三條ノ手續ヲ履マス即チ發行ノ日ヨリ到達シ得ヘキ日數ヲ除キ十日前ニ在テ製本三部ヲ添ヘ届出テサルニ於テハ同第二十一條ノ實ハ到底免ルヘコトヲ得サルモノトス因テ原裁判官カ省署スルノ手續ヲ爲サスシテ製本ヲ添ヘ届出テサルノ事實ヲ認メ處斷シタルハ相當ナルヲ以テ上告第一點ハ其効ナキヤ勿論ナリ又同條例第五條ヲ按ズルニ其第三條ニ規定スル出版届ハ文書圖書ヲ發賣又ハ頒布スル者ノミニアラステ其文書ヲ著述シ又ハ編輯シ若クハ圖書ヲ作爲スル者モ連印ニテ差出スヘキモノナルヤ明瞭ナルノミナラス右内務省令第一號第四條ノ書式ニ照スモ益々判然タルニ付キ著作者ニ其實ナント云フヲ得ズ因テ原裁判官カ被告兩名ノ所爲ニ對シ刑罰第四條ヲ適用シ各正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科シタルハ相當ナレハ上告第二點モ亦相立タサルモノトス

明治二十二年十二月七日

醬油稅則



參照

○同指令

九一ノ
二條

八九九一醬油諸味ニ課稅ノ件(鹿兒島縣)開合 明治二十一年七月二日(電報)

二番三番諸味ニ課稅スヘキヤ

大藏省主稅局同答 明治二十一年七月三日

二番三番諸味ハ課稅ノ限ニアラス

九〇〇醬油稅則取扱上疑義ノ件(福島縣)伺

明治二十一年九月十二日

第一項 醬油稅則施行細則第十一條及ヒ烟草稅則施行細則第二十六條ニ代替替換期限ヲ定メラレタリ該期限ハ死亡代替ノミニ適用スヘキモノナルヤ果シテ然ラハ營業者戸籍上代替替換居ノ届ヲナスモ依然該營業ヲ繼續シ他日該繼札ヲ戸主(嗣子)ニ譲渡ス如キハ醬油稅則第七條烟草稅則第二十條ノ範圍外トシ替替下附可然哉

第二項 烟草稅則施行細則第十一條ノ見本ハ每種一箇ニ限ルカ如シ然ルニ管下ニ於テ毎月數回ノ市日ヲ定メアル市場ノ如キ開市ノ日ヤ平常ノ寒鄉俄然開市ヲ極メ滿市立錐ノ地ナキニ至ル故ニ烟草小賣店ノ如キモ來客店頭ヲ埋ルノ有様ナレハ一箇ノ見本ヲ以テ數客ニ充テ難ク爲メニ簡機ヲ失スルノ憾有之趣ニ相聞候右ハ各地各店ノ簡機ニ從ヒ兼テ簡機ヲ届出シムル等適宜取締ヲ立テ每種二箇以上ノ見本ヲ供セシムルモ不苦哉

大藏省指令 明治二十一年九月二十日

第一項ハ死亡生存ニ不拘醬油ハ細則第十一條ニ烟草ハ細則第二十六條ノ代替ニ準シ之ヲ取扱フヘシ第二項ハ豫定セル開市ノ日時ヲ限リ特別ヲ以テ之ヲ許ス

○判決例

九〇一明治廿一年乙第七十九號

凡ソ稅則ハ稅金徵收ノ取締方法ナレハ其稅則ニ明文ナキ事ニ於テハ稅則ヲ圖ルノ所爲アルニアラサルヨリ稅則

山口縣士族雜商 景田幹太郎

シノ部

一九

違犯トシ論スルヲ得ス本件被告ハノ所爲タル醬油營業廢止ノ際存在スル未製成ノ醬油ヲ醬油稅則第九條ノ規定ニ
違ヒ検査ヲ受ケ税金ヲ完納シ廢業後之ヲ製成販賣シタリト云フニアリテ脫稅ノ所爲ナキハ勿論未製成ニテ已ニ納
稅済トナリタル醬油ハ之ヲ製成販賣スルヲ禁スルノ法條ナシ且ツ醬油稅則第九條ノ規定ハ醬油ノ製造ト云フヘ
キモノニアラス乃チ未製成ノ醬油ヲ製成スト云フヘキモノナレハ本案被告人ノ所爲ハ該稅則上之ヲ罰スヘキノ正
條ナキモノナルニ原裁判茲ニ出テス醬油稅則第一條ノ違犯トシ處斷シタルハ擬律ノ錯誤ナリトス
右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

前ノ理由ニシテ被告人ノ所爲ハ法律上之ヲ罰スヘキ正條ナキヲ以テ治罪法第三百五十八條ニ依リ無罪
明治二十一年三月三十一日
景田幹太郎

九〇二 明治廿一年乙第三百九十五號

醬油稅則ヲ閱スルニ其第十六條ニ「醬油製造人ハ毎年一月三十一日迄ニ其年製造見込ノ石數并ニ其製造方法ヲ管
廳ニ届出ヘシ」トアリ而シテ原裁判官ノ認メタル第一ノ事實ハ明治二十年五月十一日検査ノ際下等醬油製造ノ番
水ヲ汲取リ居キタルハ即チ無届ニシテ下等醬油製造ニ着手シタルモノト云フニ在リ抑醬油ヲ製造スル者ハ前第十
六條ノ規定ニ從ヒ其年見込ノ石數及ヒ製造方法ヲ届出然ル後チ製造ニ着手スヘキ規定ニシテ是レ其ノ順序ナルニ
其届出ヲ爲サズ下等醬油製造ニ着手シタルモノナレハ未タ本製ニ至ラサルモ前第十六條ノ違犯ナルヤ勿論ナリト
ス因テ原裁判所カ其實質ニ對シ同則第二十九條ノ適用處斷シタルハ相當ノ裁判ニシテ上告第二論旨ハ適法ノ理由
ニアラス又辯護ノ證據ヲ取捨シ事實ヲ判定スルハ原裁判官ノ職權ニシテ其職權内ノ處分ニ對シテハ上告ヲ爲スヲ
得サルヲ以テ上告第一第三ノ論旨ハ共ニ適法ノ理由ト爲ス何トナレハ其論旨タル證據ノ採擇其當ヲ得サル
モノト論議スルニ外ナラサレハナリ以上ノ理由ナルヲ以テ本案上告ノ旨趣ハ治罪法第四百十條ノ各項ニ規定シタ

千葉縣平民服商會醬油營業 伊藤林作

五七〇
四五二
四一五
三九一
三六一
二九

ル上告ノ理由ニ適當セサルモノト判決ス
明治廿一年六月廿八日

九〇三 明治二十一年乙第四八八號

宮崎縣平民米穀商會 福永八十吉
醬油稅則第二十條ニ於テ醬油卸賣又ハ小賣ヲ以テ營業トナス者ニ自家用料ノ醬油ヲ製造スルニ許サレ所以
タル之ヲ許スニ於テハ買入醬油ト製造醬油ト混淆シ易ク從テ脫稅ノ恐レアルヲ以テニ在ルヤ明カナレハ自家用料
ノ醬油ヲ製造スル者ニ付テモ卸賣又ハ小賣ヲ許サレノ精神ニ在ルヤ勿論ナリト云ハサルヲ得ス因テ原裁判官ハ
右ノ事實ニ對シ醬油稅則第二十四條第二項ヲ適用處斷シタルハ相當ナリトス
明治二十一年九月廿七日

(一六五) 衆議院議員選舉法 明治二十二年二月十一日 法律第三號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ衆議院議員選舉法及附録ヲ裁可シ之ヲ公布セシメ併セテ帝國議會
ヲ召集スルノ年ヨリ本法ニ依リ選舉ヲ施行セシムヘキコトヲ命ス

衆議院議員選舉法

第一章 選舉區畫

第一條 衆議院ノ議員ハ各府縣ノ選舉區ニ於テ之ヲ選舉セシム其ノ選舉區及各選舉區ニ於
テ選舉スヘキ定員ハ此ノ法律ノ附録ヲ以テ之ヲ定ム

シノ部

一六五ノ三
六又條

一六五ノ二
三四五六七八
三〇條以下四九
〇四ノ三〇條
一六五ノ二
一八條九〇四
ノ三〇條

一六五ノ二
三四五六七八
三〇條以下四九
〇四ノ三〇條
一六五ノ二
一八條九〇四
ノ三〇條

一六五ノ二
三四五六七八
三〇條以下四九
〇四ノ三〇條
一六五ノ二
一八條九〇四
ノ三〇條

第二條 府縣知事ハ其ノ府縣ノ選舉區ノ選舉ヲ監督ス

一 選舉區ノ選舉ハ郡長又ハ市長其ノ選舉長トナリ之ヲ管理ス

第三條 一 選舉區ニシテ數郡市ニ涉ルトキハ府縣知事ハ其ノ郡長又ハ市長ノ一人ヲ命シ選

學長ヲラシムヘシ

第四條 一市ノ域内ニ於テ數選舉區アルトキハ府縣知事ハ區長ヲシテ其ノ選舉長ヲラシム

ヘシ

第五條 選舉ニ關ル費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第二章 選舉人ノ資格

第六條 選舉人ハ左ノ資格ヲ備フルコトヲ要ス

第一 日本臣民ノ男子ニシテ年齡滿二十五歲以上ノ者

第二 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居シ仍引

續キ住居スル者

第三 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ

納メ仍引續キ納ムル者

但シ所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ前滿三年以上之ヲ納メ仍引續キ納ムル

者ニ限ル

第七條 家督ニ由リ財產ヲ相續シタル者ハ其ノ財產ニ付前財產主ノ納稅額ヲ以テ其ノ納稅

資格ニ算入ス

第三章 被選人ノ資格

第八條 被選人タルコトヲ得ル者ハ日本臣民ノ男子滿三十歲以上ニシテ選舉人名簿調製ノ

期日ヨリ滿一年以上其ノ選舉府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者

タルヘシ

但シ所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ前滿三年以上之ヲ納メ仍引續キ納ムル者ニ限ル

第九條 宮内官裁判官會計検査官收稅官及警察官ハ被選人タルコトヲ得ス

前項ノ外ノ官吏ハ其ノ職務ニ妨ケケル限ハ職員ト相兼ヌルコトヲ得

第十條 府縣及郡ノ官吏ハ其ノ管轄區域内ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

第十一條 選舉ノ管理ニ關係スル市町村ノ吏員ハ其ノ選舉區ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

第十二條 神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコトヲ得ス

第十三條 府縣會ノ議員ニシテ衆議院ノ議員ニ選舉セラレ當選ヲ承諾シタルトキハ其ノ前

職ヲ辭スヘキモノトス

第四章 選舉人及被選人ニ通スル規定

第十四條 左ノ項ノ一ニ觸ル者ハ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

一 瘋癲白癡ノ者

二 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レザル者

三 公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ停止中ノ者

四 禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

一六五ノ二
三四五六七八
三〇條以下四九
〇四ノ三〇條
一六五ノ二
一八條九〇四
ノ三〇條

五 舊法ニ依リ一年以上ノ懲役若ハ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

六 賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

七 選舉ニ關ル犯罪ニ由リ選舉權及被選舉權ノ停止中ノ者

第十五條 陸海軍軍人ハ現役中選舉權ヲ行フコトヲ得ス及被選人タルコトヲ得ス其ノ休職停職ニ在ル者亦同シ

第十六條 華族ノ當主ハ衆議院議員ノ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

第十七條 刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ選舉權ヲ行フコトヲ得ス及被選人タルコトヲ得ス

第五章 選舉人名簿

第十八條 選舉長ハ毎年四月一日ヲ期トシ各町村長ヲシテ一ノ投票區域内ニ於テ選舉資格ヲ有スル者ヲ調査シ人名簿二本ヲ調製シ同月二十日マテニ其ノ一本ヲ差出サシムヘシ

選舉人名簿ハ選舉人ノ姓名官位職業身分住所生年月納ムル所ノ直接國稅ノ總額並ニ納稅地ヲ記載スヘシ

第十九條 市ニ於テハ左ノ方法ニ依リ選舉人名簿ヲ調製スヘシ

第一 一市又ハ市内ノ一區ヲ以テ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テハ選舉長其ノ人名簿ヲ調製スヘシ

第二 市内ニアル數區ヲ合シテ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テハ各區長ヲシテ其ノ區内

一六五ノ六

一六五ノ六

一六五ノ六

一六五ノ六

ノ人名簿ヲ調製シ選舉長ニ差出サシムヘシ

第三 郡市ヲ合シテ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テ郡長其ノ選舉長トナリタルトキハ市長ヲシテ其ノ人名簿ヲ調製シ之ヲ差出サシムヘシ

第四 第三ノ場合ニ於テ市長其ノ選舉長トナリタルトキハ市長其ノ市内ノ人名簿ヲ調製スヘシ

第二十條 選舉人其ノ住居スル投票區域ノ外ニ於テ直接國稅ヲ納ムルトキハ納稅地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ノ證明ヲ得テ選舉人名簿調製ノ期日マテニ其ノ投票ヲ管理スル町村長又ハ市長若ハ區長ニ差出スヘシ

第二十一條 選舉長ハ各町村長又ハ市長若ハ區長ヨリ差出シタル選舉人名簿ヲ合シ一選舉區ヲ以テ一冊トシ選舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ備置キ其ノ副本ヲ府縣知事ニ送致スヘシ

第二十二條 選舉長ハ毎年五月五日ヨリ十五日間一選舉區選舉人名簿ノ寫ヲ其ノ選舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ於テ縦覽セシムヘシ

第二十三條 凡テ選舉資格アル者選舉人名簿ニ於テ人名ノ脱漏又ハ誤載アルコトヲ發見シタルトキハ其理由書及證據ヲ具ヘテ縦覽期限内ニ選舉長ニ申立テ其ノ改正ヲ求ムルコトヲ得

縦覽期限ヲ經過シタル後前項ノ申立ヲ爲スモ其ノ効ナシ

第二十四條 選舉長ニ於テ脱漏ノ申立ヲ受ケタルトキハ其ノ理由及證據ヲ審査シ申立ヲ受

シノ部

一六五ノ一

一六五ノ一

一六五ノ一

一六五ノ一

一六五ノ一

一六五ノ二
三二四ノ二六三
九條

ケタル日ヨリ二十日以内ニ之ヲ判定スヘシ若其ノ申立ヲ以テ正當ナリト判定シタルトキハ直ニ其ノ人名ヲ記載シ其ノ由ヲ當人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第二十五條 選舉長ニ於テ誤職ノ申立ヲ受ケタルトキハ其ノ理由及證據ヲ審查シ必要ナル場合ニ於テハ申立人又ハ被告人ヲ召喚審問シ申立ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ之ヲ判定スヘシ若誤職ナリト判定シタルトキハ直ニ之ヲ削除シ其ノ由ヲ被告人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第二十六條 申立人又ハ被告人ニ於テ選舉長ノ判定ニ服セサルトキハ選舉長ヲ被告トシ判定ノ日ヨリ七日以内ニ始審裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十七條 始審裁判所ニ於テ前條ノ訴訟ヲ受取リタルトキハ他ノ訴訟ノ順序ニ拘ラス速ニ其ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ニ於ケル始審裁判所ノ裁判ハ控訴スルコトヲ許サス但シ大審院ニ上告スルコトヲ得

第二十九條 選舉人名簿ハ六月十五日ヲ以テ確定期限トシ次年ノ調製ノ日マテ之ヲ据置クヘシ但シ裁判言渡書ニ依リ改正スヘキモノハ選舉長ニ於テ其ノ言渡書ヲ受取リタル時ヨリ二十四時内ニ之ヲ改正シ其ノ由ヲ申立人又ハ被告人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第六章 選舉ノ期日及投票所

一六五ノ二
六二七ノ二九條
九〇四ノ二三
一六五ノ二
八二二ノ二四
五二七ノ二八三
七四一ノ四九
〇四ノ一四條

一六五ノ三
三三四以下
六七條

第三十條 選舉ノ投票ハ通常七月一日ニ之ヲ行フ但シ衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅令ヲ以テ臨時選舉ノ期日ヲ定メ少クトモ三十日以前ニ公布スヘシ

第三十一條 投票所ハ町村役場又ハ町村長ノ指定シタル場所ニ於テ之ヲ設ケ町村長之ヲ管理ス

第三十二條 一町村ニ於テ選舉人少數ニシテ一ノ投票所ヲ設クルニ足ラサルトキハ數町村ヲ合併スルコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ郡長ハ府縣知事ノ認可ヲ經テ合併ノ町村及投票所並ニ投票所管理ノ町村長ヲ指定スヘシ

第三十三條 町村長ハ其ノ管理スル投票區域内ニ於ケル選舉人中ヨリ立會人二名以上五名以下ヲ定メ遅クトモ選舉ノ期日ヨリ三日以前ニ之ヲ本人ニ通知シ選舉ノ當日投票所ニ參會セシムヘシ

第七章 投票

立會人ハ正當ノ事故ナクシテ其ノ職ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十四條 投票ハ午前七時ニ始メ午後六時ニ終ル

第三十五條 投票函ハ二重ノ蓋ヲ造リ二種ノ鑰ヲ設ケ其ノ一ハ町村長之ヲ管守シ其ノ一ハ立會人之ヲ管守スヘシ

第三十六條 町村長ハ投票ノ初ニ當リ立會人ト共ニ參會シタル選舉人ノ面前ニ於テ投票函ヲ開キ其ノ空虛ナルコトヲ示スヘシ

一六五ノ三
〇三五ノ八條
九〇四ノ二六
一六五ノ三
四三六ノ九
〇四ノ一五
六二一ノ三
五二一ノ七條

四 資格ナキ被選人ノ姓名ヲ記載スルモノ但シ連名投票ニ列記スル人員中資格アル者ニ付テハ其効アルモノトス

五 誤字又ハ汚染塗抹毀損ニ依リ記載スル所ノ選舉人又ハ被選人ノ姓名ヲ認知スヘカラサルモノ但シ通常ノ假名字ヲ用井又ハ誤字ニ係ルモ明ニ其ノ姓名ヲ認知スルコトヲ得ルモノハ此ノ限ニ在ラス

六 第三十八條第二項ニ規定シタル外他ノ文字ヲ記載シタルモノ但シ被選人ノ指名ヲ誤ラサル爲ニ其ノ官位職業身分住所ヲ附記シ又ハ敬稱ヲ用井タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五十二條 投票効力ノ有無ニ付疑義アルトキハ選舉委員ノ意見ヲ聞キ選舉長之ヲ決定ス此ノ決定ニ對シテハ選舉會場ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五十三條 無効ノ投票ハ抹線ヲ加ヘ其ノ由ヲ選舉明細書ニ記載シ一箇年間保存シ期限ヲ經過シタル後之ヲ燒棄ツヘシ

第五十四條 一投票ニシテ其ノ選舉スヘキ定員ヨリ多キ被選人ノ姓名ヲ記載シタルトキハ其ノ定員ニ超エタル人名ヲ末尾ヨリ除却スヘシ

連名投票ニシテ其ノ選舉スヘキ定員ニ足ラサルトキハ現ニ記載シタル者ノミヲ計算スヘシ但シ一人ノ姓名ヲ複記シタル者ハ一人トシテ之ヲ計算スヘシ

第五十五條 投票ハ六十日間郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ保存シ期限ヲ經過シタル後之ヲ燒棄ツヘシ

①一六五ノ五一
條九〇四ノ二
九條

①一六五ノ五
一五六條四九
〇四ノ三五條

①一六五ノ四
〇五一條

①一六五ノ四
八五六條

①一六五ノ四
六條以下

①一六五ノ四
八五六條

①一六五ノ五
八六〇條

①一六五ノ五
九六六條二六
〇四ノ二八條
〇六三六四條

①一六五ノ六
〇六三六四條

①一六五ノ六
一六二六四條
九〇四ノ二
七二八條

第五十六條 選舉ニ關リ訴訟又ハ告訴告發アルトキハ第五十三條第五十五條ノ期限ヲ經過スルモ裁判確定ニ至ルマテ其ノ投票ヲ保存スヘシ

第五十七條 選舉長ハ選舉明細書ヲ作り選舉點檢ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ選舉委員ト共ニ署名シ之ヲ保存スヘシ

第九章 當選人

第五十八條 投票總數ノ最多數ヲ得タル者ハ之ヲ當選人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 當選人定マリタルトキハ選舉長ハ直ニ其ノ姓名及投票ノ數ヲ府縣知事ニ届出ス

第六十條 府縣知事前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ各當選人ニ通知シ其ノ姓名ヲ管内ニ告示スヘシ

第六十一條 當選人當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ當選ヲ承諾スルヤ否ヲ府縣知事ニ届出スヘシ

第六十二條 一人ニシテ數選舉區ノ當選人トナリタル者當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ何レノ選舉區ノ當選ヲ承諾スル旨ヲ府縣知事ニ届出スヘシ

第六十三條 當選人其ノ府縣内ニ在ル者ハ十日以内其ノ府縣外ニ在ル者ハ二十日以内ニ當選承諾ノ届出ヲ爲サハルトキハ其ノ當選ヲ辭シタルモノト見做スヘシ

第六十四條 當選人ニシテ其ノ當選ヲ辭シ又ハ期限内ニ其ノ當選ノ承諾ヲ届出サルトキハ

府縣知事ハ選舉ノ期日ヲ定メ其ノ選舉長ニ命ジ再ヒ選舉ヲ行ハシムヘシ但シ第五十八條第二項ノ場合ニ於テ抽籤ニ依リ當選ヲ得タル者其ノ當選ヲ辭シ又ハ其ノ承諾ヲ届出サル

トキハ抽籤ニ依リ當選ヲ失ヒタル者ヲ以テ當選人ト定ムヘシ

第六十五條 各選舉區ノ當選人確定シタルトキハ府縣知事ハ當選證書ヲ付與シ及管内ニ告

示シ並ニ當選人ノ資格ヲ録シテ内務大臣ニ具申スヘシ

第十章 議員ノ任期及補選

第六十六條 議員ノ任期ハ四箇年トス但シ任期ヲ終リタル後仍選舉ニ應スルコトヲ得

第六十七條 議員ノ開員アルニ依リ内務大臣ヨリ補選選舉ヲ開クヘキ旨ヲ命セラレタルト

キハ府縣知事ハ其ノ命ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ開員ノ選舉區ニ限り臨時選舉ヲ行ヒ補選議員ヲ選舉セシムヘシ

第六十八條 補選議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル

第十一章 投票所取締

第六十九條 投票管理ノ町村長ハ投票所ノ秩序ヲ保持シ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ

處分ニ付スルコトヲ得

第七十條 凡テ武器又ハ兇器ヲ携帯スル者ハ投票所ニ入ルコトヲ許サス

第七十一條 選舉人ニ非サル者ハ投票所ニ入ルコトヲ許サス

七十二條 投票所ニ於テハ一切ノ演説討論及喧譟ニ涉リ又ハ他人ノ投票ヲ勸誘スルコト

ヲ禁ス

第七十三條 投票所ニ於テ秩序ヲ紊ル者アルトキハ町村長ハ之ヲ警戒シ其ノ命ニ從ハサル

トキハ之ヲ投票所ノ外ニ退出セシムヘシ

第七十四條 投票所ノ外ニ退出セシメタル者ハ犯罪者ヲ除ク外其ノ投票ヲ爲サシムル爲ニ

再ヒ投票所ノ内ニ呼入ルコトヲ得

第七十五條 投票所ニ參會シタル選舉人ニシテ刑法又ハ此ノ法律ノ罰則ヲ犯シタル者ハ投

票スルコトヲ禁シ其ノ姓名事由ヲ投票明細書ニ記載スヘシ

第七十六條 投票ニ關ル異議ノ申立ニ付町村長ノ決定ニ對シテハ投票所ニ於テ不服ヲ申立

ツルコトヲ得ス

第七十七條 選舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ於テ選舉會ノ參觀ヲ求ムル者ハ總

テ第六十九條ヨリ第七十三條ニ至ルマテノ例ニ照シ選舉長之ヲ處分スヘシ

第七十八條 各選舉區ニ於テ當選ヲ失ヒタル者當選人ノ當選ヲ無効トスルノ理由アリト認

ナルトキハ當選人ヲ被告トシ第六十五條ニ掲ケタル當選人ノ姓名告示ノ日ヨリ三十日以

内ニ控訴院ニ出訴スルコトヲ得

其ノ期限ヲ經過シタル後出訴スルモ其ノ効ナシ

第七十九條 原告人ハ訴訟狀ト共ニ保證金トシテ金三百圓又ハ之ニ相當スル公債證書ヲ控

訴院書記局ニ預置クヘシ

第六十五ノ七
八八〇條

●一六五ノ七九
條

●一六五ノ七八
條

●一六五ノ七七
條
●一六五ノ七六
條
●一六五ノ七五
條

●一六五ノ七四
條

●一六五ノ七三
條
●一六五ノ七二
條

●一六五ノ七一
條
●一六五ノ七〇
條
●一六五ノ六九
條

第八十條 原告人敗訴ノ場合ニ於テ裁判言渡ノ日ヨリ七日以内ニ一切ノ裁判費用ヲ納完セサルトキハ保證金ヨリ之ヲ控除シ仍足ラサルトキハ之ヲ追徴スヘシ

第八十一條 同一ノ當選人ニ對シ二人以上ノ原告人訴訟ヲ爲シタルトキハ控訴院ハ一ノ裁判言渡書ヲ以テ各訴訟人ニ宣告スルコトヲ得

第八十二條 審判中衆議院解散ノ命アルトキハ控訴院ハ其ノ訴訟ヲ棄却スヘシ

第八十三條 原告人訴訟ヲ願下クルトキハ同時ニ其ノ由ヲ新聞紙又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第八十四條 控訴院ハ當選訴訟ヲ審判スルニ當リ本訴ニ關係スル刑法又ハ此ノ法律ノ犯罪者ニ對シ直ニ處刑ノ言渡ヲ爲スコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ檢察官ヲシテ立會ハシム

當選訴訟ニ關係セサル場合ニ於ケル此ノ法律ノ犯罪者ハ所轄刑事裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十五條 控訴院ニ於テ當選訴訟ヲ判定シタルトキハ其ノ裁判言渡書ノ原本ヲ内務大臣ニ送付スヘシ若衆議院開會スルトキハ併セテ之ヲ議長ニ送付スヘシ

第八十六條 當選訴訟ニ付控訴院ノ裁判ニ對シテハ大審院ニ上告スルコトヲ得

第八十七條 訴訟ノ目的タル當選人ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ衆議院ニ列席スルノ權ヲ失ハス

第八十八條 當選訴訟ニ付本章ニ規定シタルモノノ外總テ普通ノ訴訟手續ニ依ル

第十三章 罰則

第八十九條 納税額年齡住所及其ノ他選舉資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シ選舉人名簿ニ記載セラレタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品手形若ハ公私ノ職務ヲ選舉人ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

其ノ授與又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第九十一條 直接又ハ間接ニ金錢物品手形若ハ公私ノ職務ヲ選舉人ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス

其ノ授與又ハ約束ヲ受ケ投票ヲ爲サ、ル者亦同シ

第九十二條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ選舉人ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十三條 選舉人ニ暴行ヲ加ヘテ投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ三月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十四條 選舉人ヲ強逼シ又ハ投票所若ハ選舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若ハ

●一六五ノ六八
條
●一六五ノ六七
條
●一六五ノ六六
條
●一六五ノ六五
條
●一六五ノ六四
條
●一六五ノ六三
條
●一六五ノ六二
條
●一六五ノ六一
條
●一六五ノ六〇
條
●一六五ノ五九
條
●一六五ノ五八
條

●一六五ノ九
條
●一六五ノ八
條
●一六五ノ七
條
●一六五ノ六
條
●一六五ノ五
條
●一六五ノ四
條
●一六五ノ三
條
●一六五ノ二
條
●一六五ノ一
條

●一六五ノ九
條
●一六五ノ八
條
●一六五ノ七
條
●一六五ノ六
條
●一六五ノ五
條
●一六五ノ四
條
●一六五ノ三
條
●一六五ノ二
條
●一六五ノ一
條
●一六五ノ〇
條
●一六五ノ九
條
●一六五ノ八
條
●一六五ノ七
條
●一六五ノ六
條
●一六五ノ五
條
●一六五ノ四
條
●一六五ノ三
條
●一六五ノ二
條
●一六五ノ一
條

九三九三九五
九七九九一〇〇
四條

一六五ノ四六
以下九四九六
九七九九一〇〇
四條

一六五ノ九
五九九九一
〇〇一〇三
ノ四條

一六五ノ四六
以下七〇九九
一〇一〇三
一〇四條

一六五ノ九
九〇一〇三
三〇四條
一六五ノ五八

劫奪スルノ目的ヲ以テ多衆ヲ嘯聚シタル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其ノ情ヲ知テ嘯聚ニ應シ勢ヲ助ケタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各本刑ニ一等ヲ加フ

第九十五條 選舉ノ際管理者又ハ立會人ニ暴行ヲ加ヘ又ハ暴行ヲ以テ投票所若ハ選舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若ハ劫奪シタル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各本刑ニ一等ヲ加フ

第九十六條 多衆ヲ嘯聚シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ重禁錮ニ處ス

其情ヲ知テ嘯聚ニ應シ勢ヲ助ケタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス
犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各本刑ニ一等ヲ加フ

第九十七條 演說又ハ新聞紙若ハ其ノ他ノ文書ヲ以テ人ヲ教唆シ前三條ノ罪ヲ犯サシメタル者ハ刑法第百五條ノ例ニ依ル其ノ教唆ノ効ナキ者モ仍本刑ニ二等又ハ三等ヲ減シ處斷ス

第九十八條 戎器又ハ兇器ヲ携帯シテ投票所若ハ選舉會場ニ入りタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十九條 當選人ニ於テ第八十九條ヨリ第九十八條ニ至ルマテノ刑ニ處セラレタルトキ

ハ其ノ當選ハ無効トス

第一百條 他人ノ姓名ヲ詐稱シテ投票ヲ爲シタル者及第十四條ニ依リ選舉人タルコトヲ得サル者投票ヲ爲シタルトキハ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百一條 前數條ノ罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ再ヒ罰金ノ刑ニ處セラレタル者ハ三年以上七年以下ノ選舉權及被選舉權ヲ停止ス

第一百二條 立會人正當ノ事故ナクシテ此ノ法律ニ規定シタル義務ヲ缺クトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百三條 本章ニ規定シタル罰則ノ外刑法ニ正條アルモノハ各其ノ條ニ依リ重キニ從テ處斷ス

第一百四條 凡テ選舉ニ關ル犯罪ハ六箇月ヲ以テ期滿免除トス

第一百五條 此ノ罰則ハ第十一章ノ各條ト共ニ投票所及選舉會場ニ貼示スヘシ

第十四條 補則

第一百六條 市ニ於テハ一市ニ一ノ投票所ヲ設ケ此ノ法律ニ規定シタル投票及選舉ノ管理ハ市長兼テ之ヲ掌ルヘシ

第四條ノ場合ニ於テハ一選舉區ニ一ノ投票所ヲ設ケ此ノ法律ニ規定シタル投票及選舉ノ管理ハ區長兼テ之ヲ掌ルヘシ

第一百七條 前條ノ場合ニ於テハ市長又ハ區長ハ其ノ管理スル選舉區内ニ於ケル選舉人中ヨリ立會人三名以上七名以下ヲ定メ選挙ノ期日ヨリ三日以前ニ之ヲ本人ニ通知シ

一六五ノ三
七二〇三
四條

一六五ノ六以
下八條以下

一六五ノ三
三〇四一〇七
刑法二三條以
下

一六六ノ七條

一六五ノ三二

一六五ノ三
三三六四三四
九一〇三條

選舉ノ當日選舉管理ノ市役所又ハ區役所ニ參會セシムヘシ
立會人ハ投票ニ立會ヒ併セテ投票ヲ點檢スヘシ

此ノ場合ニ於ケル選舉明細書ハ併セテ投票ノ事項ヲ記載スヘシ

第百八條 島司ヲ置ク地方ニ於テハ此ノ法律ニ規定シタル選舉長ノ職務ハ島司之ヲ掌ルヘシ

第百九條 町村制ヲ施行セサル町村ニ於テハ此ノ法律ニ規定シタル町村長ノ職務ハ戶長之ヲ掌ルヘシ

第百十條 選舉人名簿調製ノ初年ニ限り所得稅法施行以來第六條第八條ニ規定シタル納稅額ヲ引續キ納完シタル者ハ其ノ納稅資格ノ期限ニ充ツルモノト見做スヘシ

第百十一條 北海道沖繩縣及小笠原島ニ於テハ將來一般ノ地方制度ヲ舉行スルノ時ニ至ルマテ此ノ法律ヲ施行セス
(附屬要之)

(一六六)衆議院議員選舉法罰則補則 明治二十三年五月二十九日
法律第四十號 (官報五月三十日)
衆議院議員選舉法罰則補則

第一條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スル

以下一六六ノ二五、六七條

以下一六六ノ六七條

以下一六五ノ八條以下一六六ノ六七條

以下一六六ノ六七條

ノ目的ヲ以テ選舉會場又ハ投票所ノ近傍若クハ選舉人往來ノ途中ニ於テ選舉人ニ酒食ヲ供シ又ハ選舉會場若クハ投票所ニ往復スル爲車馬ノ類ヲ給シ及其供給ヲ受ケタル者又ハ選舉人ノ爲ニ選舉會場若クハ投票所ニ往復スル車馬賃又ハ路費若クハ宿泊料ノ類ヲ代辨シ又ハ代辨スルコトヲ約束シ及其代辨又ハ約束ヲ受ケタル者ハ衆議院議員選舉法第九十條ノ例ニ依リ處斷ス

第二條 第一條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ヲ脅逼シ誘引シ若クハ其往來ノ便ヲ妨ケ若クハ詐偽ノ手段ヲ以テ其選舉權ノ施行ヲ妨害シタル者ハ衆議院議員選舉法第九十二條ノ例ニ依リ處斷ス

本條ニ記載シタル所業ヲ爲シテ第一條ニ記載シタル目的ヲ達シタル者ハ衆議院議員選舉法第九十三條ノ例ニ依リ處斷ス

第三條 被選人タルコトヲ得ル者ヲ指シテ被選人タルコトヲ得ス又ハ當選ヲ承諾スルノ意ナシトシテ虚報ヲ流傳セシメタル者ハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 選舉會場又ハ投票所所在ノ郡市内ニ於テ選舉ノ氣勢ヲ張ル爲多衆集合シ若クハ隊伍ヲ組ミテ往來シ又ハ篝火松明ヲ焚キ若クハ鐘鼓法螺喇叭ノ類ヲ鳴ラシ旗幟其他ノ標章ヲ用非ル等ノ所業ヲ爲シ警察官ノ制止ヲ受クルモ仍其命ニ從ハサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五條 第一條ニ記載シタル目的ヲ以テ張札ノ類ヲ公然掲示シタル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

シノ部

第六條 當選人第一條乃至第四條ニ依リ刑ニ處セラレタルトキハ衆議院議員選舉法第九十
九條ノ例ニ依ル

第七條 本法ニ關スル犯罪ハ衆議院議員選舉法第四百條ノ例ニ依ル

●參照

○關係法令

九〇四 勅令第三號 明治三十三年
一月九日

衆議院議員選舉法施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第三號(官報 一月十日)

衆議院議員選舉法施行規則

第一條 選舉人ノ年齡ハ選舉期日(七月一日)ノ前滿二十五歳ニ達スルヲ以テ合格ト
ス

第二條 選舉法第六條第二ニ掲グル住居ノ期限内ニ選舉人其ノ住居ヲ府縣外ニ移シ
再ヒ其ノ本籍府縣ニ歸住シタルトキハ時日ノ長短ニ拘ラス其ノ期限中斷シタルモ
ノトス但シ旅行中ノ滞在ハ中斷スルノ限ニ在ラス

第三條 選舉人及被選人ノ納稅資格ハ地租ニ付テハ選舉人名簿調製期日(四月一日)
ノ前滿一年以上十五圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シ之ヲ納ム仍引續キ所有シ及納
ムル者ヲ以テ合格トシ所得稅ニ付テハ選舉人名簿調製期日ノ前滿三年以上之ヲ納

メ仍引續キ納ムル者ヲ以テ合格トス

賣買讓與ニ依リ土地ノ所有權移轉ノ場合ニ於テ其ノ所有ノ年限ヲ算スルハ登記ノ

日ニ依ルヘシ

滿三年以上所得稅ヲ納メ及滿一年以上地租ヲ納ムル者其ノ地租及所得稅ヲ併セ十
五圓以上ニ及フトキハ納稅資格ヲ有スルモノトス但シ所得稅ヲ納ムル者毎年ノ納
額ニ差異アルトキハ其ノ最少額ヲ以テ地租ニ併算スヘシ

第四條 置入地ノ地租ハ其ノ地主ノ納稅資格ニ算入スヘシ

第五條 數人共有地ノ地租ハ之ヲ平分シ各箇ノ納稅資格ニ算入ス但シ土地臺帳又ハ
附屬帳簿ニ所有權又ハ納稅負擔ノ割合ヲ記入シタルモノハ各其ノ割合ニ依ルヘ
シ

第六條 被選人ノ年齡ハ選舉期日ノ前滿三十歳ニ達スルヲ以テ合格トス

被選人家督ニ由リ財産ヲ相續シタル者ノ納稅資格ハ選舉法第七條ニ規定シタル選
舉人ノ例ニ同シ

第七條 警視廳ノ官吏ハ選舉法第十條ノ例ニ依リ東京府内ニ於テ被選人タルコトヲ
得ス

第八條 郡市ヲ合セ又ハ二郡以上ヲ以テ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テハ選舉ノ管
理ニ關係スル郡ノ官吏ハ選舉法第十一條ニ規定シタル市町村吏員ノ例ニ依リ其ノ
選舉區内ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

第九條 選舉法第十二條ニ掲ケタル神官トハ神社ニ奉祀スルヲ職トスル者、僧侶及教師トハ教規若ハ宗制ニ從ヒ其ノ分限ヲ有スル者其ノ他何等ノ宗教ヲ問ハス宣教ニ從事スル者ヲ謂フ

第十條 組合町村ニシテ一ノ町村役場ヲ置クトキハ其ノ組合町村ヲ以テ一投票區域トス

選舉法第十九條第一ノ場合ニ於テ一市又ハ市内ノ一區ヲ以テ一選舉區ト爲シタルトキハ其ノ選舉區ヲ以テ一投票區域トス

選舉法第十九條第二ノ場合ニ於テ市内ニ在ル數區ヲ合セテ一選舉區ト爲シタルトキハ其ノ選舉區ヲ以テ一投票區域トス

選舉法第十九條第三ノ場合ニ於テ郡市ヲ合セテ一選舉區ト爲シタルトキハ郡ハ町村ヲ以テ一投票區域トシ市ハ其ノ市ヲ以テ一投票區域トス

第十一條 選舉人名簿ニハ選舉人ヲ其ノ姓ノ伊呂波順ニ記載シ番號ヲ付スヘシ

第十二條 選舉人正當ノ事故ニ依リ選舉法第二十條ノ手續ヲ爲スコト能ハスシテ選舉人名簿ニ登載セラレサルトキハ其ノ第二十三條ノ例ニ依リ脱漏ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第十三條 選舉長ノ判定ニ對スル出訴若ハ始審裁判所ノ判決ニ對スル上告ノ爲ニ其ノ判定又ハ判決ノ執行ヲ停止セズ

第十四條 選舉人名簿確定ノ後選舉人其ノ投票區域外ニ轉住シタルトキハ前住地ノ

投票所ニ於テ投票ヲ爲スヘシ

第十五條 投票ヲ始ムル時刻ニ至リ立會人參會セサルトキハ投票所管理者ハ參會シタル選舉人中ヨリ更ニ立會人ヲ指定スヘシ

第十六條 投票所管理者ハ投票所入場券ヲ製シ廻リトモ投票期日ノ五日前ニ之ヲ各選舉人ニ配付スヘシ

入場券ノ配付ヲ受ケサル選舉人ハ之ヲ請求スルコトヲ得

此ノ規則第十四條ニ依リ投票ヲ爲サントスル者ハ前項ノ例ニ依リ入場券ヲ請求スルコトヲ得

入場券ニハ選舉人ノ住所姓名選舉人名簿ニ記載シタル番號及投票ノ場所日時ヲ記載スヘシ

第十七條 選舉人投票所ニ入ルトキハ入場券ヲ受付掛ニ差出スヘシ選舉人多數ナル投票所ニ於テハ必要ナルトキハ到著番號札ヲ受取ラシムヘシ

第十八條 選舉人入場券ヲ紛失シタルトキハ其ノ由ヲ受付掛ニ申立テ投票所管理者ノ承認ヲ得テ入場スルコトヲ得

第十九條 投票所管理者ハ選舉人ヲ呼出シ其ノ住所姓名ヲ自稱セシメ選舉人名簿ニ對照シ投票用紙ヲ交付スヘシ若到著番號札ヲ受取ラシメタル場合ニ於テハ到著番號ノ順序ニ從ヒ番號札ト引換ニ投票用紙ヲ交付スヘシ

第二十條 選舉人誤テ投票用紙ヲ汚染シタルトキハ更ニ之ヲ請求スルコトヲ得

第二十一條 投票ハ投票所管理者及立會人ノ面前ニ於テ選舉人自ラ之ヲ投票函ニ投入シ順次投票所ヨリ退出スヘシ

第二十二條 投票終ルノ時刻ニ至リタルトキハ投票所管理者ハ其ノ由ヲ宣告シ一時入口ヲ閉鎖セシメ參會シタル選舉人中未投票セサル者アルトキハ直ニ投票セシメタル後投票函ヲ閉鎖スヘシ

第二十三條 選舉長ハ各投票所ノ投票函總テ到達シタル翌日選舉法第四十八條ノ手續ヲ爲シ逐次投票ヲ開披點檢シテ選舉委員ニ付シ每票先ツ選舉人ノ姓名次ニ被選人ノ姓名ヲ朗讀セシメ書記二名以上ヲシテ被選人ノ得點ヲ點數簿ニ記入セシムヘシ

第二十四條 投票點數ノ記入ヲ終リタルトキハ選舉長ハ各被選人ノ得點總數ヲ朗讀スヘシ

第二十五條 點檢濟ノ投票ハ其ノ有効無効ヲ區別シテ封緘シ選舉長ハ選舉委員ト共ニ之ニ捺印スヘシ

連名投票ニシテ其ノ一部無効ナルモノハ無効投票ト共ニ保存スヘシ

第二十六條 天災若ハ其ノ他避クヘカラサル事故ニ依リ投票ヲ行フコトヲ得ヌ又ハ選舉會ヲ開クコトヲ得サルトキハ投票所管理者又ハ選舉長ハ其ノ施行ヲ止メ府縣知事ニ其ノ由ヲ届出ヘシ此ノ場合ニ於テハ府縣知事ハ期日ヲ定メ更ニ投票ヲ行ハシメ又ハ選舉會ヲ開カシムヘシ但シ其ノ期日ハ選クトモ五日以前ニ投票區域内又

ハ選舉區内ニ告示セシムヘシ

第二十七條 選舉法第五十八條第二項ノ場合ニ於テ生年月ノ差ニ依テ當選ヲ得タル者其ノ當選ヲ辭シ又ハ第六十三條ノ期限内ニ其ノ承諾ヲ届出サルトキハ生年月ノ差ニ依リ當選ヲ失ヒタル者ヲ以テ當選人ト定ムヘシ

第二十八條 選舉法第六十三條ニ掲ケタル届出ノ期限ハ第六十條ニ依リ當選人ノ姓名ヲ告示シタル日ヨリ起算スヘシ

第二十九條 選舉法第五十二條ノ選舉長ノ決定ニ對シ異議アル者又ハ第七十六條ノ投票所管理者ノ決定ニ對シ不服ナル者ハ始審裁判所ニ出訴スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ選舉法第二十六條ノ例ニ依ル

第二十條 選舉長及投票所管理者故障アルトキハ其ノ附屬ノ官吏又ハ吏員ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシムルコトヲ得

九〇五 勅令第四十一號 明治二十二年三月二十六日

衆議院議員選舉法及貴族院令ニ於テ直接國稅ト稱スル種目ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第四十一號(官報三月二十七日)
衆議院議員選舉法及貴族院令ニ於テ直接國稅ト稱スルモノ左ノ如シ

地租

シノ部

所得稅

○伺指令

九〇六 衆議院議員選舉人及被選舉人資格ノ件(高知縣)伺 明治三十二年三月十一日

本年法律第三號衆議院議員選舉法ニ由ルトキハ同法第十四條第四項ノ項ニ該當スルモノハ選舉被選舉ノ資格ナク而シテ刑法第六十四條ニハ大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得タルモノハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得スト大赦特赦ノ分界判然セリ抑大赦ナル者ハ唯リ其罪ヲ免スニ止マラス其罪囚ヲシテ曾テ罪ヲ犯セシコトナキ純良ノ人トナシ以テ社會ニ出スノ精神ニ依リ自カラ直チニ復權ヲ得セシムルモ議員選舉法第十四條ニ掲グル赦免ノ文字ハ大赦特赦ヲ同一視シ同條第四項ノ項ニ該當スルモノハ復權後尙三箇年間ハ公權中ノ一部ヲ停止スルハ大赦ノ精神ニ對シ稍妥當ヲ缺クモノ、如シ然リト雖トモ文字上ノ見解ヲ下ストキハ議員選舉法第十四條ニ掲グル赦免ノ文字ニハ大赦特赦ヲ包含セルモノト解釋致シ可然哉

內務省指令 明治三十二年三月十六日

大赦ヲ受ケタル者ハ法律第三號第十四條第五項ノ赦免ニ包含セス

(一六七)市町村會議員選舉罰則 明治三十三年五月二十九日 法律第三十九號

朕市町村會議員選舉罰則ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム 法律第三十九號(官報五月三十日)

市町村會議員選舉罰則

第一條 凡テ選舉資格ニ必要ナル事實ヲ詐稱シテ選舉人名簿ニ記載セラレタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

市二二一三
一八八條町村
一五二一五
一八二一八
一七九二〇
一七九〇七

議員タルコトヲ得サルノ實ヲ告ケスシテ議員トナリタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品手形若クハ公私ノ職務ヲ選舉人ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

其授與又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第三條 第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉會場ノ近傍若クハ選舉人往來ノ途中ニ於テ選舉人ニ酒食ヲ供シ又ハ選舉會場ニ往復スル爲車馬ノ類ヲ給シタル者ハ第二條物品授與ノ例ニ依リ處斷ス

其供給ヲ受ケタル者亦同シ

第四條 第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ノ爲ニ選舉會場ニ往復スル車馬賃又ハ路費若クハ沐浴料ノ類ヲ代辦シ又ハ代辦スルコトヲ約束シタル者ハ第二條金錢授與ノ例ニ依リ處斷ス

其代辦又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第五條 第二條第三條及第四條ニ記載シタル所業ヲ爲シテ第二條ニ記載シタル目的ヲ達シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス

第六條 第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

シノ部

市二二一三
一八八條町村
一五二一五
一八二一八
一七九二〇
一七九〇七
市二二一三
一八八條町村
一五二一五
一八二一八
一七九二〇
一七九〇七
市二二一三
一八八條町村
一五二一五
一八二一八
一七九二〇
一七九〇七
市二二一三
一八八條町村
一五二一五
一八二一八
一七九二〇
一七九〇七

●一六七ノ六
八九二〇二
●一六七ノ二
八二九三〇
一
●一六七ノ七
一〇二二二
一五二八二
二〇二二九

第七條 第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ヲ脅逼シ拐引シ若クハ其往來ノ便ヲ妨ケ若クハ詐偽ノ手段ヲ以テ其選舉權ノ施行ヲ妨害シタル者ハ第六條暴行ノ例ニ依リ處斷ス
第八條 第六條及第七條ニ記載シタル所業ヲ爲シテ第二條ニ記載シタル目的ヲ達シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第九條 選舉人ヲ脅逼シ若クハ選舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若クハ劫奪スルノ目的ヲ以テ多衆ヲ嘯聚シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
其情ヲ知り嘯聚ニ應シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

●一六七ノ六
九二〇二二
●一六七ノ二
九二〇二二
●一六七ノ七
一〇二二二
一五二八二
二〇二二九

第十條 選舉ノ際選舉ニ關スル吏員若クハ選舉掛ニ暴行ヲ加ヘ又ハ暴行ヲ以テ選舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若クハ劫奪シタル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第十一條 多衆ヲ嘯聚シテ第十條ノ罪ヲ犯シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
其情ヲ知り嘯聚ニ應シタル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮又ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

●一六七ノ一
八一九二〇
一

第十二條 第九條第十條第十一條ノ場合ニ於テ犯罪者武器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各本刑ニ一等ヲ加フ

●一六七ノ六
七九二〇二
●一六七ノ二
八二九三〇
一

第十三條 選舉會場所在ノ郡市内ニ於テ選舉ノ氣勢ヲ張ル爲多衆集合シ若クハ隊伍ヲ組ミテ往來シ又ハ篝火松明ヲ焚キ若クハ鐘鼓法螺喇叭ノ類ヲ鳴ラシ旗幟其他ノ標章ヲ用非ル等ノ所業ヲ爲シ警察官ノ制止ヲ受ルモ仍其命ニ從ハサル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第十四條 被選人タルコトヲ得ル者ヲ指シテ被選人タルコトヲ得ス又ハ當選ヲ承諾スルノ意ナシトノ虚報ヲ流傳セシメタル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第十五條 武器又ハ兇器ヲ携帯シテ選舉會場ニ入りタル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

●一六七ノ一
八一九二〇
一
●一六七ノ二
九二〇二二
●一六七ノ二
八二九三〇
一

第十六條 第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ張札ノ類ヲ公然揭示シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
第十七條 他人ノ姓名ヲ詐稱シテ投票ヲ爲シ又ハ選舉人タルコトヲ得スシテ投票ヲ爲シタル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第十八條 當選人第二條乃至第十六條ニ依リ刑ニ處セラレタルトキハ其當選ハ無効トス
第十九條 本法ニ規定シタルモノノ外刑法ニ正條アルモノハ各其條ニ依リ重キニ從テ處斷ス
第二十條 本法ニ關スル犯罪ハ六箇月ヲ以テ期滿免除トス
第二十一條 本法ハ市町村會ノ外市制町村制並ニ明治二十二年法律第十一號ニ據リテ開設スル各種ノ議會ノ議員選舉ニモ適用ス

●一六七ノ一
七九二〇二
●一六七ノ二
八二九三〇
一

●參照

○關係法令

九〇七 法律第一號 明治二十一年四月十七日

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ隱保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

法律第一號(官報四月二十五日)

市制

第一章 總則

第一款 市及其區域

第二款 市住民及其權利義務

第三款 市條例

第二章 市會

第一款 組織及選舉

第二款 職務權限及處務規程

第三章 市行政

第一款 市參事會及市吏員ノ組織選任

自第一條至第四八條

自第一條至第五條

自第六條至第九條

第十條

自第一一條至第四八條

自第一一條至第二九條

自第三〇條至第四八條

自第四九條至第八〇條

自第四九條至第六三條

第二款 市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第三款 給料及給與

第四章 市有財產ノ管理

第一款 市有財產及市稅

第二款 市ノ歲入出豫算及決算

第五章 特別ノ財產ヲ有スル市區ノ行政

第六章 市行政ノ監督

第七章 附則

自第六四條至第七四條

自第七五條至第八〇條

自第八一條至第一一二條

自第八一條至第一〇六條

自第一〇七條至第一一二條

自第一一三條至第一一四條

自第一一五條至第一二五條

自第一二六條至第一三三條

市制

第一章 總則

第一款 市及其區域

第一條 此法律ハ市街地ニシテ郡ノ區域ニ屬セス別ニ市ト爲スノ地ニ施行スルモノトス

第二條 市ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡市ノ公共事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條 凡市ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條 市ノ境界ヲ變更シ又ハ町村ヲ市ニ合併シ及市ノ區域ヲ分割スルコトアルトキハ町村制第四條ヲ適用ス

第五條 市ノ境界ニ關スル爭論ハ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款 市住民及其權利義務

第六條 凡市内ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其市住民トス

凡市住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並市有財産ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及市ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條 凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)市ノ住民トナリ(二)其市ノ負擔ヲ分任シ及(三)其市内ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其市公民トス其公費ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ市會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戸ヲ構ヘ且治産ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條 凡市公民ハ市ノ選舉ニ參與シ市ノ名譽職ニ選舉セラルハノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ市公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一 疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者

二 營業ノ爲メニ常ニ其市内ニ居ルコトヲ得サル者

三 年齡滿六十歲以上ノ者

四 官職ノ爲メニ市ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者

五 四年間無給ニシテ市吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間市會議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者

六 其他市會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セヌ又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ市會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其市公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔スヘキ市費ノ八分一乃至四分一ヲ増課スルコトヲ得

前項市會ノ議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條 市公民タル者第七條ニ掲載スル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

市公民タル者身代限處分中又ハ公權ノ剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ拘留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ市ノ公務ニ參與セザルモノトス
市公民タル者ニ限リテ任ヌヘキ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解
ク可キモノトス

第三款 市條例

第十條 市ノ事務及市住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クル
コトヲ許セル事項ハ各市ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得
市ニ於テハ其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得
市條例及規則ハ法律命令ニ抵觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ
公告式ニ依ル可シ

第二章 市會

第一款 組織及選舉

第十一條 市會議員ハ其市ノ選舉人其被選舉權アル者ヨリ之ヲ選舉ス其定員ハ人口
五萬未滿ノ市ニ於テハ三千人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三千六百人トス
人口十萬以上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル毎ニ人口二十萬以上ノ市ニ於テハ人
口十萬ヲ加フル毎ニ議員三人ヲ増シ六十人ヲ定限トス
議員ノ定員ハ市條例ヲ以テ特ニ之ヲ増減スルコトヲ得但定限ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條 市公民(第七條)ハ總テ選舉權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラル、者(第八
條第三項第九條第二項)及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡内國人ニシテ公權ヲ有シ直接市稅ヲ納ムル者其額市公民ノ最多ク納稅スル者三
名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラヌト雖モ選舉權ヲ有ス但公民權
ヲ停止セラル、者及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス
法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條 選舉人ハ分テ三級ト爲ス

選舉人中直接市稅ノ納額最多キ者ヲ合セテ選舉人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當
ル可キ者ヲ一級トス

一級選舉人ノ外直接市稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選舉人總員ノ納ムル總額ノ三分一
ニ當ル可キ者ヲ二級トシ兩餘ノ選舉人ヲ三級トス

各級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ上級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅
者二名以上アルトキハ其市ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ上級ニ入ル若シ住居ノ
年數ニ依リ難キトキハ年數ヲ以テシ年數ニモ依リ難キトキハ市長抽籤ヲ以テ之ヲ
定ム可シ

選舉人每級各別ニ議員ノ三分一ヲ選舉ス其被選舉人ハ同級内ノ者ニ限ラス三級ニ
通シテ選舉セラル、コトヲ得

第十四條 區域廣濶又ハ人口稠密ナル市ニ於テハ市條例ヲ以テ選舉區ヲ設クルコト
ヲ得但特ニ二級若クハ三級選舉ノ爲メ之ヲ設クルモ妨ケナシ
選舉區ノ數及其區域並各選舉區ヨリ選出スル議員ノ員數ハ市條例ヲ以テ選舉人ノ

員數ニ準シ之ヲ定ム可シ

選舉人ハ其住居ノ地ニ依テ其所屬ノ區ヲ定ム其市内ニ住居ナキ者ハ課稅ヲ受ケタル物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム若シ數選舉區ニ亘リ納稅スル者ハ課稅ノ最多キ物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ム可シ

選舉區ヲ設クルトキハ其選舉區ニ於テ選舉人ノ等級ヲ分ツ可シ
被選舉人ハ其選舉區内ノ者ニ限ラサルモノトス

第十五條 選舉權ヲ有スル市公民(第十二條第一項)ハ總テ被選舉權ヲ有ス

左ニ掲グル者ハ市會議員タルコトヲ得ス

一 所屬府縣ノ官吏

二 有給ノ市吏員

三 檢察官及警察官吏

四 神官僧侶及其他諸宗教師

五 小學校教員

其他官吏ニシテ當選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代官人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選舉セラレハコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選舉セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選

トス其時ヲ異ニシテ選舉セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

市參事會員トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ市會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者市參事會員ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條 議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ每三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ヌ可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム
退任ノ議員ハ再選セラレハコトヲ得

第十七條 議員中副員アルトキハ每三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選舉ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上副員アルトキ又ハ市會、市參事會若クハ府縣知事ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選舉ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選舉トモ前任者ノ選舉セラレタル選舉等級及選舉區ニ從テ之カ選舉ヲ行フ可シ

第十八條 市長ハ選舉ヲ行フ毎ニ其選舉前六十日ヲ限リ選舉原簿ヲ製シ各選舉人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選舉人名簿ヲ製ス可シ但選舉區ヲ設クルトキハ每區若各別ニ原簿及名簿ヲ製ス可シ
ト選舉人名簿ハ七日間市役所又ハ其他ノ場所ニ於テ之ヲ關係者ノ縦覽ニ供ス可シ

シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限内ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ市長ハ市會ノ裁決(第三十五條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選舉前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲シ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選舉ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選舉ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選舉ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條 選舉ヲ執行スルトキハ市長ハ選舉ノ場所日時ヲ定メ及選舉ス可キ議員ノ數ヲ各級各區ニ分チ選舉前七日ヲ限リテ之ヲ公告スヘシ

各級ニ於テ選舉ヲ行フノ順序ハ先ツ三級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ二級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ一級ノ選舉ヲ行フ可シ

第二十條 選舉掛ハ名譽職トシ市長ニ於テ臨時ニ選舉人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ市長若クハ其代理者ハ其掛長トナリ選舉會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス但選舉區ヲ設クルトキハ每區各別ニ選舉掛ヲ設ク可シ

第二十一條 選舉開會中ハ選舉人ノ外何人タリトモ選舉會場ニ入ルコトヲ得ス選舉人ハ選舉會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條 選舉ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選舉人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選舉人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選舉人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス選舉人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選舉人名簿ニ

照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條 投票ニ記載ノ人員其選舉ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却スヘシ左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一 人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二 被選舉人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三 被選舉權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四 被選舉人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並効力ニ關スル事項ハ選舉掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條 選舉ハ選舉人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サズ

第十二條第二項ニ依リ選舉權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選舉ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テヌ可シ其代人ハ内國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選舉掛ニ示シテ代理ノ證トヌ可シ

第二十五條 議員ノ選舉ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キ

モノハ年長者ヲ取り同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選舉スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十六條 選舉掛ハ選舉錄ヲ製シテ選舉ノ顛末ヲ記錄シ選舉ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選舉人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選舉録ニ附屬シ選舉ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十七條 選舉ヲ終リタル後選舉掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ數級又ハ數區ノ選舉ニ當リタルトキハ同期限内何レノ選舉ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限内ニ之ヲ申立テカル者ハ總テ其選舉ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十八條 選舉人選舉ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選舉ノ日ヨリ七日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得(第二十五條第一項)

市長ハ選舉ヲ終リタル後之ヲ府縣知事ニ報告シ府縣知事ニ於テ選舉ノ効力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス府縣參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選舉ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選舉ヲ取消シ又被選舉人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選舉ヲ行ハシム可シ

第二十九條 當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要

件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市會之ヲ議決ス

第二款 職務權限及處務規程

第三十條 市會ハ其市ヲ代表シ此法律ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セララル、事件ヲ議決スルモノトス

第三十一條 市會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

- 一 市條例及規則ヲ設ケ並改正スル事
- 二 市費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第七十四條ニ掲グル事務ハ此限ニ在ラス
- 三 歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事
- 四 決算報告ヲ認定スル事
- 五 法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手数料、市稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事
- 六 市有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事
- 七 基本財産ノ處分ニ關スル事
- 八 歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事
- 九 市有ノ財産及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事
- 十 市吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一 市ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十二條 市會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル市吏員ノ選舉ヲ行フ可シ

第三十三條 市會ハ市ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閲シ市長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス

市會ハ市ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十四條 市會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十五條 市住民及公民タル權利ノ有無、選舉權及被選舉權ノ有無、選舉人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ執行スル選舉權(第十二條第二項)及市會議員選舉ノ効力(第二十八條)ニ關スル訴訟ハ市會之ヲ裁決ス

市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ市長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選舉ヲ爲スコトヲ得ス

第三十六條 凡議員タル者ハ選舉人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可カラサルモノトス

第三十七條 市會ハ毎曆年ノ初メ一周年ヲ限リ議長及其代理者各一名ヲ互選ス

第三十八條 會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

議長代理者共ニ故障アルトキハ市會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲スコトヲ得

第三十九條 市參事會員ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辯明スルコトヲ得

第四十條 市會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ又ハ市長若クハ市參事會ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ會議ノ二日前タル可シ但市會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

市參事會員ヲ市會ノ會議ニ招集スルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第四十一條 市會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再回ニ至ルモ議員猶三分ノ二ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラズ

第四十二條 市會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ市會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ府縣參事會市會ニ代テ議決ス

第四十四條 市會ニ於テ市吏員ノ選舉ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有效投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取り之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同

數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取り更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶
過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條第二十三條、
第二十四條第一項ヲ適用ス

前項ノ選舉ニハ市會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十五條 市會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十六條 議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選舉ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會
ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス
者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十七條 市會ハ書記ヲシテ議事録ヲ製シテ其議決及選舉ノ顛末並出席議員ノ氏
名ヲ記録セシム可シ議事録ハ會議ノ未之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス
可シ

市會ハ議事録ノ謄寫又ハ原書ヲ以テ其議決ヲ市長ニ報告ス可シ
市會ノ書記ハ市會之ヲ選任ス

第四十八條 市會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠
金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第三章 市行政

第一款 市參事會及市吏員ノ組織選任

第四十九條 市ニ市參事會ヲ置キ左ノ吏員ヲ以テ之ヲ組織ス

一 市長 一名

二 助役 東京ハ三名京都大阪ハ各二名其他ハ一名

三 名譽職參事會員 東京ハ十二名京都大阪ハ各九名其他ハ六名

助役及名譽職參事會員ハ市條例ヲ以テ其定員ヲ増減スルコトヲ得

第五十條 市長ハ有給吏員トス其任期ハ六年トシ内務大臣市會ヲシテ候補者二名ヲ

推薦セシメ上奏裁可ヲ請フ可シ若シ其裁可ヲ得サルトキハ再推薦ヲ爲サシム可シ

再推薦ニシテ猶裁可ヲ得サルトキハ追テ推薦セシメ裁可ヲ得ルニ至ルノ間内務大

臣ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ市長ノ職務ヲ管掌セシム可

シ

第五十一條 助役及名譽職參事會員ハ市會之ヲ選舉ス其選舉ハ第四十四條ニ依テ行

フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス府縣參事會之ヲ決ス可シ

第五十二條 助役ハ有給吏員トシ其任期ハ六年トス

助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス若シ其認可ヲ得サルトキハ再選

舉ヲ爲ス可シ再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ追テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ

至ルノ間府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ助役ノ職務

ヲ管掌セシム可シ

第五十三條 市長及助役ハ其市公民タル者ニ限ラス但其任ヲ受クルトキハ其公民タ

ルノ權ヲ得

第五十四條 名譽職參事會員ハ其市公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選舉權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選舉ス其任期ハ四年トス任期滿限ノ後ト雖モ後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ毎二年其半數ヲ改選ス若シ二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ退任セシム初回ノ退任者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム但退任者ハ再選セラル、コトヲ得

若シ關員アルトキハ其殘任期ヲ補充スル爲メ直ニ補關選舉ヲ爲ス可シ

第五十五條 市長及助役其他參事會員ハ第十五條第二項ニ掲載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ヌ同條第四項ニ掲載スル者ハ名譽職參事會員ニ選舉セラル、コトヲ得ヌ

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市參事會員タルコトヲ得ヌ若シ其緣故アル者市長ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル市參事會員ハ其職ヲ退ク可シ其他ハ第十五條

第五項ヲ適用ス

市長及助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退職料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十六條 市長及助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ヌ其他ノ營業ハ府縣知事ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ヌ

第五十七條 名譽職參事會員ノ選舉ニ付テハ市參事會自ラ其効力ノ有無ヲ職決ス

當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市參事會之ヲ議決ス其議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得其他ハ第三十五條末項ヲ適用ス

第五十八條 市ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ市參事會ノ推薦ニ依リ市會之ヲ選任ス

收入役ハ市參事會員ヲ兼ヌルコトヲ得ヌ

收入役ノ選任ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其他ハ第五十一條、第五十二條、第五十三條、第五十五條及第七十六條ヲ適用ス

收入役ハ身元保證金ヲ出ス可シ

第五十九條 市ニ書記其他必要ノ附屬員並使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ市參事會之ヲ任用ス

第六十條 凡市ハ處務便宜ノ爲メ市參事會ノ意見ヲ以テ之ヲ數區ニ分テ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス但東京京都大阪ニ於テハ區長ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

區長及其代理者ハ市會ニ於テ其區若クハ隣區ノ公民中選舉權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選舉ス區會(第百十三條)ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選舉ス但東京京都大阪ニ於テハ市參事會之ヲ選任ス

東京京都大阪ニ於テハ前條ニ依リ區ニ附屬員並使丁ヲ置クコトヲ得

第六十一條 市ハ市會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ市參事會員又ハ市會議員ヲ以テ之ニ充テ又ハ市參事會員及市會議員ヲ以テ之ヲ組織シ又ハ會員議員ト市民中選舉權ヲ有スル者トヲ以テ之ヲ組織シ市參事會員一名ヲ以テ委員長トス

委員中市會議員ヨリ出ツル者ハ市會之ヲ選舉シ選舉權ヲ有スル公民ヨリ出ツル者ハ市參事會之ヲ選舉シ其他ノ委員ハ市長之ヲ選任ス

常設委員ノ組織ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十二條 區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外市會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十三條 市吏員ハ任期滿限ノ後再選セラレハコトヲ得

市吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款 市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第六十四條 市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

市參事會ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一 市會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ市會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市參事會ハ自己ノ意見ニ由

リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二 市ノ設置ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三 市ノ歳入ヲ管理シ歳入出豫算表其他市會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四 市ノ權利ヲ保護シ市有財産ヲ管理スル事

五 市吏員及使丁ヲ監督シ市長ヲ除クノ外其他ニ對シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ罷責及十圓以下ノ過怠金トス

六 市ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七 外部ニ對シテ市ヲ代表シ市ノ名義ヲ以テ其訴訟並和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事

八 法律勅令ニ依リ又ハ市會ノ議決ニ從テ使用料、手数料、市稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

九 其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ市參事會ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十五條 市參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員定員三分ノ一以上出席スル

トキハ議決ヲ爲スコトヲ得
其議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依
ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事録ニ登記ス可シ

市參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキ
ハ市長ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ
停止シ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決
ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出
訴スルコトヲ得

第六十六條 第四十三條ノ規定ハ市參事會ニモ亦之ヲ適用ス但同條ノ規定ニ從ヒ市
參事會正當ノ會議ヲ開クコトヲ得サルトキハ市會之ニ代テ議決スルモノトス

第六十七條 市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ滯滞ナキコトヲ務ム可シ
市長ハ市參事會ヲ召集シ之ヲ議長トナル市長故障アルトキハ其代理者ヲ以テ之ニ
充ツ

市長ハ市參事會ノ議事ヲ準備シ其議決ヲ執行シ市參事會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ
爲シ及之ニ署名ス

第六十八條 急施ヲ要スル場合ニ於テ市參事會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ市長ハ市
參事會ノ事務ヲ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ其處分ヲ報告ス可シ

第六十九條 市參事會員ハ市長ノ職務ヲ補助シ市長故障アルトキ之ヲ代理ス

市長ハ市會ノ同意ヲ得テ市參事會員ヲシテ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコト
ヲ得此場合ニ於テハ名譽職會員ハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辦償ノ外勤務ニ相
當スル報酬ヲ受クルコトヲ得

市條例ヲ以テ助役及名譽職會員ノ特別ナル職務並市長代理ノ順序ヲ規定ス可シ若
シ條例ノ規定ナキトキハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十條 市收入役ハ市ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十一條 書記ハ市長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十二條 區長及其代理者(第六十條)ハ市參事會ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケ
テ區内ニ關スル市行政事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十三條 委員ハ(第六十一條)市參事會ノ監督ニ屬シ市行政事務ノ一部ヲ分掌シ
又ハ營造物ヲ管理シ若シハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノト
ス

市長ハ隨時委員會ニ列席シテ議決ニ加ハリ其議長タルノ權ヲ有ス常設委員ノ職務
權限ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第七十四條 市長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

- 一 司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務
- 但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二 浦役場ノ事務

三 國ノ行政並府縣ノ行政ニシテ市ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ市參事會員ノ一名ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ掲載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ市ノ負擔トス

第三款 給料及給與

第七十五條 名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル實費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

實費辨償額及報酬額ハ市會之ヲ議決ス

第七十六條 市町助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

市會ノ議決ヲ以テ市長ノ給料額ヲ定ムルトキハ内務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス若シ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ内務大臣之ヲ確定ス

市會ノ議決ヲ以テ助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス府縣知事ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ府縣參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

市長助役其他有給吏員ノ給料額ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第七十七條 市條例ノ規定ヲ以テ市長其他有給吏員ノ退職料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條 有給吏員ノ給料、退職料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條 退職料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退職料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額舊退職料ト同額以上ナルトキハ舊退職料ハ之ヲ廢止ス

第八十條 給料、退職料、報酬及辨償ハ總テ市ノ負擔トス

第四章 市有財産ノ管理

第一款 市有財産及市稅

第八十一條 市ハ其不動産、積立金穀等ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財産ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條 凡市有財産ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條 舊來ノ慣行ニ依リ市住民中特ニ其市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市會ノ議決ヲ經ルニ非サレハ其權限ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條 市住民中特ニ市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキ

シノ部

ハ市條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條 使用權ヲ有スル者(第八十三條、第八十四條)ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條 市會ハ市ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權(第八十三條、第八十四條)ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條 市有財産ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ヌ可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ市會ノ認許ヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第八十八條 市ハ其必要ナル支出及従前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラル、支出ヲ負擔スルノ義務アリ

市ハ其財産ヨリ生スル收入及使用料、手数料(第八十九條)並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ市ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ市稅(第九十條)及夫役現品(第一百一條)ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條 市ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條 市稅トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ

一 國稅府縣稅ノ附加稅

二 直接又ハ間接ノ特別稅

附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ市ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ市限リ稅目ヲ起シテ課稅スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條 此法律ニ規定スル條項ヲ除クノ外使用料、手数料(第八十九條)特別稅(第九十條)第一項第二及従前ノ區町村費ニ關スル細則ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ市參事會之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以内ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條 三箇月以上市内ニ滞在スル者ハ其市稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ滞在ノ初ニ遡リ徵收ス可シ

第九十三條 市内ニ住居ヲ構ヘヌ又ハ三箇月以上滞在スルコトナシト雖モ市内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル市稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條 所得稅ニ附加稅ヲ賦課シ及市ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルト

キハ納稅者ノ市外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條 數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滞在スル者ニ前條ノ市稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅ス可シ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條 所得稅法第三條ニ掲クル所得ハ市稅ヲ免除ス

第九十七條 左ニ掲クル物件ハ市稅ヲ免除ス

- 一 政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋
- 二 社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三 官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徵收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ市條例ニ依リ年月ヲ限り免除スルコトヲ得

第九十八條 前二條ノ外市稅ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從テ皇族ニ係ル市稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條 數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課ス可シ

市内ノ一區ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其區内ニ住居シ若クハ滞在シ又

ハ土地家屋ヲ所有シ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔ス可シ但其一區ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツ可シ

第一百條 市稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收ス可シ

會計年度中ニ於テ納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ市長ニ届出ツ可シ其届出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一百一條 市公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市稅ヲ標準ト爲シ且之ヲ金額ニ算出シテ賦課ス可シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金額ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第一百二條 市ニ於テ徵收スル使用料、手数料(第八十九條)市稅(第九十條)夫役ニ代フル金圓(第一百一條)共有物使用料及加入金(第八十四條)其他市ノ收入ヲ定期内ニ納メザルトキハ市參事會ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セザルトキハ國稅滯納處分法ニ依リ之ヲ徵收ス可シ其督促ヲ爲スニハ市條例ノ規定ニ依リ手数料ヲ徵收スルコトヲ

得

納稅者中無資力ナル者アルトキハ市參事會ノ意見ヲ以テ會計年度内ニ限り納稅延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ越ユル場合ニ於テハ市會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徵收金ノ追徵、期滿得免及先取特權ニ付テハ國稅ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條 地租ノ附加稅ハ地租ノ納稅者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル市稅ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條 市稅ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以内ニ之ヲ市參事會ニ申立ツ可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度内減稅免稅及償還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條 市稅ノ賦課及市ノ營造物、市有財產並其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條 市ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムヲ得サル支出若クハ市ノ永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歳入ヲ増加スルトキハ其市住民ノ負擔ニ堪ヘサル場合ニ限ルモノトス

市會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ム可シ償還ノ初期ハ三年以内ト爲シ年々償還ノ步合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了ス可シ

定額豫算内ノ支出ヲ爲スカ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度内ノ收入ヲ以テ償還ス可キモノトス但此場合ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セス

第二款 市ノ歳入出豫算及決算

第百七條 市參事會ハ每會計年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歳入出豫算表ヲ調製ス可シ但市ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

内務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條 豫算表ハ會計年度前市會ノ議決ヲ取り之ヲ府縣知事ニ報告シ並地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告ス可シ

豫算表ヲ市會ニ提出スルトキハ市參事會ハ併セテ其市ノ事務報告書及財産明細表ヲ提出ス可シ

第百九條 定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルガ爲メニ豫備費ヲ置キ市參事會ハ豫メ市會ノ認定ヲ受ケスシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但市會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

シノ部

第百十條 市會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ市長ヨリ其騰寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付ス可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可キ事項アルトキハ

(第百二十一條ヨリ第百二十三條ニ至ル)先ツ其許可ヲ受ク可シ收入役ハ市參事會(第六十四條第二項第三)又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ヌ又收入役ハ市參事會ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ據ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ヌ

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス
第百十一條 市ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クモ一回臨時檢査ヲ爲ス可シ例月檢査ハ市長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ハ市長又ハ其代理者ノ外市會ノ五選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條 決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以内ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ市參事會ニ提出シ市參事會ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シテ之ヲ市會ノ認定ニ付ス可シ其市會ノ認定ヲ經タルトキハ市長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告ス可シ
決算報告ヲ爲ストキハ第三十八條及第四十三條ノ例ニ準シ市參事會員故障アルモノトス

第五章 特別ノ財産ヲ有スル市區ノ行政

第百十三條 市内ノ一區ニシテ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其區限リ特ニ其費用(第九十九條)ヲ負擔スルトキハ府縣參事會ハ其市會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ

發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ市會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十四條 前條ニ記載スル事務ハ市ノ行政ニ關スル規則ニ依リ市參事會之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別ス可シ

第六章 市行政ノ監督

第百十五條 市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百十六條 此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

市ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラヌ

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴ス可シ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ市ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百十七條 監督官廳ハ市行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ其事務錯亂滯滞セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之ヲ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徴シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閲スルノ權ヲ有ス

第百十八條 市ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セヌ又ハ臨時之ヲ承認セヌ又ハ實行セサルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシム可シ
市ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百十九條 凡市會又ハ市參事會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキハ府縣參事會代テ之ヲ議決ス可シ

第百二十條 內務大臣ハ市會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以内更ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選市會ノ集會スル迄ハ府縣參事會市會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十一條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス
一 市條例ヲ設ケ並改正スル事

二 學藝、美術ニ關シ又ハ歴史上貴重ナル物品ノ賣却讓與賃入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

前項第一ノ場合ニ於テハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可ス可シ

第百二十二條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一 新ニ市ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ増加シ及第百六條第二項ノ例ニ違フモノ但償還期限三年以内ノモノハ此限ニ在ラス

二 市特別稅並使用料、手数料ヲ新設シ増額シ又ハ變更スル事

三 地租七分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事

四 間接國稅ニ附加稅ヲ賦課スル事

五 法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十三條 左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ府縣參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一 市ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事

二 基本財産ノ處分ニ關スル事(第八十一條)

三 市有不動産ノ賣却讓與並賃入書入ヲ爲ス事

四 各個人特ニ使用スル市有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八十六條)

五 各種ノ保證ヲ與フル事

六 法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ市住民ニ負擔ヲ課スル事

七 均一ノ稅率ニ據ラヌシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事(第九十條第二項)

八 第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ市内ノ一區ニ費用ヲ賦課スル事

九 第一百一條ノ準率ニ據ラヌシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第二百二十四條 府縣知事ハ市長、助役、市參事會委員、委員、區長其他市吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ體實及過意金トス其過意金ハ二十五圓以下トス

追テ市吏員ノ懲戒法ヲ設タル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ

一 市參事會ノ懲戒處分(第六十四條第二項第五)ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二 府縣知事ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三 本條第一項ニ掲載スル市吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者、財產ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務ヲサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ(第六十三條)懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

四 懲戒裁判ハ府縣知事其審問ヲ爲シ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者

ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

市長ノ解職ニ係ル裁決ハ上奏シテ之ヲ執行ス

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第二百五條 市吏員及使丁其職務ヲ盡サヌ又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ市ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但出訴ヲ爲シタルトキハ府縣參事會ハ假ニ其財產ヲ差押フルコトヲ得

第七章 附則

第二百二十六條 此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ

真申ニ依リ內務大臣指定スル地ニ之ヲ施行ス

第二百二十七條 府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第二百二十八條 此法律ニ依リ初テ議員ヲ選舉スルニ付市參事會及市會ノ職務并市條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ府縣知事又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第二百二十九條 社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第二百三十條 此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第三百三十一條 現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第三百三十二條 明治九年十月第三百二十號布告各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第四條明治十七年五月第十四號布告區町村會法明治十七年五月第十五號布告明治十七年七月第二十三號布告明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ抵觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第三百三十三條 內務大臣ハ此法律實行ノ實ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

町村制

第一章 總則

第一款 町村及其區域

自第一條 至第一〇條

第二款 町村住民及其權利義務

自第一條 至第五條

第三款 町村條例

自第一〇條 至第九條

第二章 町村會

第一款 組織及選舉

自第一一條 至第五一條

第二款 職務權限及處務規程

自第一一條 至第三一條

自第三二條 至第五一條

第三章 町村行政

第一款 町村吏員ノ組織選任

自第五二條 至第八〇條

第二款 町村吏員ノ職務權限

自第六八條 至第七四條

第三款 給料及給與

自第七五條 至第八〇條

第四章 町村有財產ノ管理

第一款 町村有財產及町村稅

自第八一條 至第一一三條

第二款 町村ノ歲入出豫算及決算

自第八一條 至第一〇六條

第五章 町村內各部ノ行政

第一款 町村ノ組織

自第一一四條 至第一一五條

第六章 町村組合

第一款 町村行政ノ監督

自第一一六條 至第一一八條

第七章 町村行政ノ監督

第一款 附則

自第一一九條 至第一二九條

第八章 附則

第一款 總則

自第一三〇條 至第一三九條

町村制

第一條 此法律ハ市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スルモノトス

第二條 町村ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス